

---

# 私はノーマルだ！

臭い足の裏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私はノーマルだ！

### 【Nコード】

N4633P

### 【作者名】

臭い足の裏

### 【あらすじ】

完璧超人のお姉さんが実はあだったなんて私には信じられない……。そしてさらに信じられないのは私がお姉さんの趣味に興味を持ってしまったこと……。！ 大丈夫、私は正常だ！

## 1 話（前書き）

一人称練習のためにこれをかきました。

なにかおかしいなところとありましたら感想でお願いします。

登場人物の性格や口調が原作と違うような感じがします。

## 1話

私が学校から帰ってきて玄関の扉を開けると、そこには摩訶不思議な生物がうごめいていた。

「……うおつ。……ただいま、お兄さん。一体なにを——」

「うおおおおお——！ お、おかえり楓。これか？ これは単なる気分転換だ。うん、そうだ気分転換だ。気にするんじゃないぞ」

「そ、そう。わかった。ただエツチな本は玄関ではなく部屋で読んでくれると嬉しいんだけど」

言いながら靴を脱ぎ家にかかる。

この摩訶不思議生物の正体は、高坂京介。私のお兄さんだ。

面倒見のある優しいお兄さんなのだが、時々こういった奇行を起こすことがある。これがなければ近所さまから「まあ、良いお兄さんですわね」みたいなことを言われるほどにはいい人なんだけど……。とにかく、ちょっと残念なお兄さんなのだ。

「わかってねえ！？ 楓、よく聴けよ？ 俺はそんな本はこんなところで読ま——」

お兄さんのそんな言い訳を無視して私は自室に戻った。

お兄さんは優しくて面倒見のある、というところを抜いたら……まあなんというか普通だ。勉強も中の上くらい、顔も普通、運動神経も普通といった、普通人間だ。

でも普通というのもなかなか素晴らしいものだと思う。普通ってことは争いもそうそうない、平和ということだ。普通に暮らして普通に生を全うする。世の中の人は普通は嫌だなんて言うけど、普通を享受できない人なんて世の中には腐るほどいるのだ。この平和な日本でさえも。私もファンタジーのような、ハラハラドキドキするような人生を歩んでみたくもないけど、普通に過ごすというのも悪くないと思う。

そう改めて普通というのを考えてみると、普通人間のお兄さんっ

て幸せ者なんだなって思う。

しかし我が家には普通人間の反対、普通じゃない人間がいる。それはお姉さんだ。

我が家、高坂家には大黒柱のお父さん、それをサポートするお母さんがいて、そして先ほど奇行を起こしていたお兄さんと私、そして私の双子の姉、お姉さんの五人家族だ。

お姉さんの名前は、高坂桐乃。お姉さんとにかく普通という文字には当てはまらない。

お姉さんと言ったら、と周りの人に訊いてみればだいたいの人が同じことを言うと思う。

容姿端麗、運動神経抜群、頭脳明晰などといったパーフェクト人間。そして雑誌の読者モデルなんて仕事もしている。勝ち組街道を悠々と歩いている、思わず拝みたくなるような人物である。多少性格に難があるが、そんなものマイナスになどなりえない。

お姉さんと私は双子なのに、良いもののほとんどがお姉さんに持って行かれてしまったようだ。

だけど良いものを持っていかれているとしても、別に私は何も思わない。むしろ尊敬しているくらいだ。

そんなことを思いながら、私は部屋にある姿見の方へ向かい、自分の姿を映し出してみた。

改めて見て、私は、自分で言うのもあれだけど、お姉さんと双子というだけあって瓜二つのかわいい顔をしている。そのせいもあって、私とお姉さんはよく学校で間違われる。そこで間違われないようにお姉さんは茶髪で私は黒髪になっている。意図してやったわけではないけど、それが一番の見分け方なのだ。それでもたまに間違われることはあるけどね。

そして私はお姉さんに自信をもって勝てると言えることがある。それはプロポーションのとれた身体である。お姉さんも十分すばらしいけど、それでもだ。

私の胸は同年代の女の子たちよりは誇張なしに大きいと言えるだ

ろう。短足寸胴といわれている日本人だけど、私はその限りではない。お姉さんに負けず劣らずとした脚をしていると思う。太りもせず痩せすぎもしない健康的な身体。文句ないんじゃないだろうか。

姿見の前でポーズなんかとってみる。うん、悪くない。

もうひとつ、私はお姉さんに勝っているものがある。昔、いつも私の上に行くお姉さんにひとつくらいは追いつきたくて、何ができるかと考えた。スポーツで追い抜けるかと考えたが、ダメ。私は運動はそこまで得意ではないのだ。だったらどうしようかと悩んだ結果、勉強で追い抜こうという結論に至った。

そう決めてから勉強を頑張るようになった。そのおかげで、全国模試では一位を取れるくらいにまでなれた。そのときお姉さんはすごく私を褒めてくれて、すごく嬉しかったのを覚えている。今も全国模試では上位をキープしている。

こんな私だけど、家族からはとても愛されている。少し残念なお兄さんも、お姉さんも私のことをとても可愛がってくれる。特にお姉さんが。それはもうすさまじく私をかわいがってくれる。なにか……あるのだろうか？

まあ、私も気恥かしくて滅多に言わないけど、家族のみんなを愛している。

私は姿見で自分を見ることに満足すると、壁にかかっている時計を見た。現在五時を少し回ったところだ。なんとも微妙な時間。とりあえず、学校疲れたし夕食まで寝ようかな。

そう決めると私はベッドに潜り、仮眠を取った。

我が家の夕食は午後七時。お父さんが帰ってくるのが大体この時間なのだ。それまでに席についていないと食事抜きにされてしまう。現代社会では見られなくなった一家全員での食事だ。すばらしい。

仮眠を取りある程度すっきりした私は、七時十分前に席に着き夕

食を待っていると、お兄さんとお姉さんが時間ギリギリにやってきた。

「お帰りなさい。お姉さん」

「う、うん。ただいま楓。今日もかわいいね」

「は、はあ。ありがとう、お姉さん」

いつもどおりの挨拶――のつもりなんだけど、どうもお姉さんの様子がおかしい。周りをキョロキョロしたり情緒不安定だ。

「か、楓。昼間のことなんだが……」

「ああ、気にしないで。私は理解を持っているつもりだよ」

「そうじゃなくてだな……いや、なんでもないです」

私がそんなお姉さんの行動に疑不思議がっていると、不意にお兄さんから声をかけられた。

どうやらお兄さんは先ほどのことを引きずっているらしい。私はちゃんと理解を持っているのに、なにかお兄さんは不満そうだ。別に恥ずかしがることでもないと思うんだけど……何度もお母さんに没収されるのを見てきたんだし。

「……ねえ、楓。何があつたの？」

「なんでもないよ。しょうもないことだよ」

「ふーん」

そんなくだらない会話をしているといつの間にかお父さんとお母さんが席に座っており、食事も用意されていたので、私はお兄さんを無視して食事を始めた。

高坂家の食事はとても静かだ。テレビもつけないし、食器の音だけがこのリビングに響く。

着流しを着た厳つい顔のお父さんは容易く大黒柱を想像させる。基本は無口だが、愛情がにじみだしているのがわかる。そんなお父さんが私は好きだ。

そしてお母さんは寛容でいい人である。たびたびお兄さんの部屋から秘蔵のコレクションを暴きだして遊んでいるのを見る。その顔はとても生き生きしている。……がんばれ我が兄よ。そんなお母さ

んも私は好きだ。

「……ん？」

そうやって静かに食事をしていたのだが、急にお兄さんが首を傾げた。

「……なあ、何やってんの？」

どうやらお兄さんもお姉さんのおかしさに気付いていたらしい。食事中にも関わらず玄關のあたりをチラチラ見ているし、あきらかに何かに焦っているのがわかる。私は気にしないことにしたのだが、お兄さんにはそれができなかったらしい。

「……………はあ？」

「……ツチ、なんでもねえよ」

……見てわかるように、お兄さんとお姉さんは仲が悪い。とくに二人の間に何かがあったなんてことはない。気付いたら仲が悪くなっていた。……ああ、でもお兄さんの幼馴染である麻奈実さんが家に遊びに来るとお姉さんの機嫌が悪くなるのに原因があるのかもしれない。それにしてもお兄さんもなかなか隅に置けない人だ。幼馴染だからといって女を家に連れてくるなんて。しかも自分の部屋にそれなのに麻奈実さんは彼女じゃないなんて言うし、たちが悪い。それからまた会話も途切れて夕食がもうすぐ終わるといったところでお兄さんが喋りだした。

「俺、メシ喰ったらコンビニ行くけど。なんか一緒に買って来るものある？」

「あら、じゃあハーゲンダッツの新しいの買って来てちょうだい。季節限定のやつね」

「あ、私にもなんかおいしそうなお菓子買ってきて」

「なんかおいしそうになって……、まあわかったよ」

お兄さんにお母さんと私が注文をして、続けてお兄さんは言った。「そっぴいやさ、俺の友達が、最近女の子向けのアニメにはまっているらしいんだけど。えーと、確か、ほしくずなんとかっつーやつ」「なあと、突然？」

お兄さんの突然の内容にお母さんが聞き返した。

ほしくず……ほしくず……どっかで聞いた覚えがあるな。あれは……そうだ！ 学校でなんか男子がそれについて喋ってるのを聞いた覚えがある。確か、ほしくずういっちなんとかってやつ。それにしてもあれを話していたのは、クラスの子たちで密かにあるランキングのひとつ、気持ち悪いランキングトップとトップツリーなのだ。お兄さんもそっち系の人なんだろうか……

「イヤ別に、面白いって勧められたからさ。一回くらい観てやってもいいかなって」

「やあだー、そういうのって確かオタクっていうんでしょ？ ほら、テレビとかでやってる……あんたはそういうふうになっちゃだめよー？ ねえお父さん」

「ああ。わざわざ自分から悪影響を受けに行くこともあるまい」

厳格であるお父さんはそういったものに厳しい。実際ゲームとかあんまり買ってくれなかったし……

「お兄さん。私その話を学校で聞いたよ。名前は正確に覚えてないけど、ほしくずういっちなんとかってやつだよ。ただ、気落ち悪い男子がその話をしたけど、お兄さんもそっち系なの？」

「んなわけねーだろ。聞いただけだつーの。お前、この優しい兄がそんなのに手を出すと思うか？」

「……」

「……なんだその目」

「楓。お前もそういうものに手を出すんじゃないぞ」

「わかってるよ、お父さん。ただ、最近新作の服が出ただけど、それに手を出したいんだけどさ、ちょっと高いんだよね」

「そうか」

華麗に無視された。

というか、お姉さんが唇をきつく噛みしめて、手に持った箸が小刻みに震えているんだけど、どうしたのだろうか？

「……お姉さん？」

体調でも悪いのかと思って訊いてみた。

「……ごちそうさまっ」

お姉さんはそう言つと、どたどた足を踏み鳴らしながら部屋に戻つてしまった。

……ああ、これはあとでお父さんに説教されるね。

そのあと、お兄さんはコンビニに行つて、お姉さんは案の定お父さんに叱られて、私は部屋にもどつて少し勉強して寝た。

私の部屋は二階にあつて、左からお兄さん、私、お姉さんというふうになつてゐる。誰かが部屋を出たり廊下を歩いたりすると、わりと響くのだ。

気持ちよく寝ていた私なのだが、いきなり隣の兄の部屋が騒がしくて起きてしまった。時計を見てみると、普通に深夜である。

「なんだお兄さんうるさいなあ……こんな時間に。ちよつと注意しに行かなくては」

私は部屋を出るとお兄さんの部屋に向かった。お兄さんの部屋には明かりが付いていた。……いったいこんな夜中にどうしたんだろう。

「お兄さん、ちよつとうるさいよ。眠れないから静かにして」

そう言いながら私がお兄さんの部屋のドアを開けると

「……………」

「……………」

「……………」

なんとお兄さんの上にお姉さんが馬乗りになつてゐるではないかなんだろうか？ どうしてお姉さんがお兄さんの部屋に、しかも馬乗りに？

私の頭の中は、そんな疑問でいっぱいだった。

お姉さんはお兄さんを嫌つてゐるので、お兄さんの部屋に入るなんてことはまずあり得ないけど……。本当は仲はそこまで悪くなかつたのかな？ じゃれ合うくらいには仲はいいのかな？

少々、私はパニックに陥っていた。

お兄さんとお姉さんは呆然と私を見つめている。魚みたいに口とかパクパクさせてちよつと面白い。

「……えーと、じゃれ合うのはいいんだけど、その、ご近所迷惑になるから……その、お静かにお願いします。そうしてくれると私は、えーと、嬉しいですよ」

そんなことを言っただけで部屋に戻った。最後のほうは自分でも言うて良くわからなかったけど、あんな光景を見せられてはそれも仕方ないと思う。

私が部屋に戻った後も、またお兄さんの部屋でがさがさやってから、廊下を歩く音がして、今度はお姉さんの部屋が騒がしかった。いつの間に仲直りしたんだろう？ そんなことを思いながら寝た。

朝食の席、お兄さんとお姉さんはチラチラと私のことを見てくる。

「……ねえ楓。昨日の夜のこともんだけど……」

「ああ……別に私はいいけど、もう少し静かにしてもらえると嬉しいな。あと、仲直りしてたなら私にも言うてくればよかったのに」

「……なんであたしが、あんなのと仲直りしなきゃなんないのよ？」

「え？ だってじゃれあってたし——」

仲直りしてないの？ と言おうとしたところで、

「桐乃、楓、うるさいぞ。もう少し静かに食えんのか」

「ご、ごめんなさい」

お父さんに怒られてしまい、お姉さんには聴けずじまいになってしまった。でも、そこまで気にすることでもないような気がしてきた。

そのあと、お姉さんはすぐさま部活の朝練で出かけて行ってしまった。

さて、私も出かける準備をしようかな。いまから出かければ、随分と早く学校についてしまうけど、そんな日もあってもいいと思う。私は、制服に着替えて軽く化粧をし、スクールかばんを手に持ち

家を出た。 本日は雲ひとつない快晴だ。

1話（後書き）

7 / 20 修正

## 2話

あの日からいくらか経ったある休日、私は困っている。

私は友達である佐藤美香さとうみかと一緒に渋谷に遊びに来ていたのだが、ショッピングをしていたら急に男の人に声をかけられた。相手は一人で、なかなかにお洒落なお兄さんである。

これはもしかや初ナンパなのではないかと内心ドキドキしていたのだが、どうやらその人の話を聞いていくと違うみたいだ。なんなのかというと、

「君、うちの雑誌で読者モデルやってみない？　すごくかわいいしさ、それにかわいい服とか着てみたくない？」

要約するとこんな感じ。つまり雑誌の読者モデルにスカウトをされているのだ。

私はお姉さんと違って人前に出て何かをするとか、写真を撮られるというのは苦手だ。確かに読者モデルというものは興味はある。お姉さんもやっているし、プロがいろいろとやってくれるので、可愛くコーディネートしてくれて可愛く撮ってくれるだろう。そしてその写真が雑誌に載る。興味が無いわけではない。

だけどやっぱり私にはちょっとハードルが高いと思ってしまった。だからもつたいたないけど断ろうとしたのだが……

「君、違かったら悪いんだけど、楓ちゃんだよな？」

「はい、そうですけど……どうして私の名前を……？」

突然、スカウトのお兄さんから私の名前が出てきて、自然と目つきがきつくなる。こんな見ず知らずの人に名前を教えた覚えはないそれにSNSなんかも本名は隠しているので、知り合いでもない人に私の名前は知れ渡るわけはないのだけど。ちよつと怖くなり、スカウトのお兄さんから半歩遠ざかる。

「ああごめん。怖がらせるつもりはなかったんだけど。僕が楓ちゃんの名前を知っている理由ね、楓ちゃんのお姉さん——桐乃ちゃん

から教えてもらったからだよ。桐乃ちゃんが以前、君の事を言っていたね。それに顔も双子ということできつくりだしね、それで君が楓ちゃんなんじゃないかって思ったのさ」

「はあ、そうなんですか」

お姉さんが原因だったのか。お姉さんは、理由はわからないけどよく私のことをいろんな人に教えまわっている。そのせいで、学校で知らない人から声をかけられることが結構ある。その人たちはだいたいお姉さんの友達で、私のことを言っていたから声をかけたとかがだいたいの理由だ。知らない人が私のことを知っているとこのはあんまり気分のいいことではないけれど、悪い噂とかそういう類のものではないので、そこまで気にしてはいない。一度お姉さんに注意したこともあったけど、効果なかったのもあったし。

今回のこれも、そうなんだろう。そう納得することにした。しかしそうなると、この目の前のお兄さんは――

「今の話で感づいたかと思うけど、僕が読者モデルやってほしい雑誌って言うのは、桐乃ちゃんと同じ雑誌なんだよね。どう？ 姉妹揃って読者モデルってすごく良いと思うんだけど。しかも同じ雑誌でね？」

お姉さんと同じ雑誌。それはなかなか魅力的だ。魅力的だけでなく、私のこの引っ込み思案な性格は、踏ん切りをつかせてくれない。……やっぱり断ろう。無理してやることもないし。

「……お姉さんと同じところっていうのに興味はありますが、やっぱり写真をとられるというのは恥ずかしいというか……私はあんまり人の前に出るのとかは苦手で、その、お断りさせていただきます

……」

「そんなこと言わないでさ楓っ。やってみなよ！ 桐乃と同じところなんでしょ？ だったら桐乃も楓が困ったら助けてくれるって！

いい機会じゃんっ、楓はもうちよつと前に出たほうがいいって！」

「彼女の言う通りだよ。困ったら僕とか桐乃ちゃんとか周りの人に聞けばいいし、君と同年代の子もたくさんいるよ。モデルとして着

た服とかプレゼントしちゃうし、お金ももらえるしやってみて損はないと思うよ？」

「そ、そうかな……」

「そうだよ、ゼツタイ！ やんなきゃ損だって！」

一度は断りを入れたけど、美香の説得とお兄さんの説得により、気づいたらお兄さんから連絡先を渡されていた。

「いますぐに決めなくてもいいから、お父さんやお母さんと相談してもう一度僕に連絡してね」

「はい。よく考えて、両親と相談してから連絡します。……あ、あと、お姉さんには内緒にしておいてください。もしやることになったら驚かせたいので」

「わかったよ。良い返事待ってるね」

スカウトする人は口がうまい。こんな私が一瞬でも読者モデルやってもいいかななんて思ってしまうくらいに。

「ねえ楓、もし撮ることになったら私に写真見せてね！」

「気が早いよ。やるとは決まってるじゃないんだしさ。あとお父さんの許可取らなきゃいけないんだから」

「あー……楓のとこのお父さんって警察の人で厳しいんだったね。がんばってねっ」

もし私がやろうとするにしても、最終的にはお父さんの許可を取らなければいけない。お父さんは結構こういうのにいい反応を示していなかったような気がする。お姉さんが読者モデルを始めたときは、本当に渋々ながらって感じだったし。

このあと、私たちは普通に買い物をして、私の門限の時間ぎりぎりまで遊んで家に帰った。美香は終始興奮しっぱなしであった。理由は、私が読者モデルにスカウトされたかららしい。ちょっとおかしな気もするけれど、それも美香らしさのひとつだ。

そんな美香を見ると、だんだんと読者モデルをやりたくなっていた。家に着くころには今すぐにでもやりたいっていうくらいにまで気持ちが膨らんでいた。

私は帰宅してすぐに、今日あったスカウトのことを両親に報告した。

「今日、渋谷で読者モデルにスカウトされたんだ。それで、その雑誌がお姉さんのところと同じなんだって。別に他の雑誌なら断ったんだけど、同じって言うからさ」

「……お前にはまだ早いだろう。そんな雑誌に出て肌を晒すなんてはしたないことするんじゃない。仕事の経験なら高校生になっからアルバイトでもすればいいだろう。それくらいなら俺は許す」

「私まだ何も言っていないんだけど……」

私が本題に入る前に、お父さんに先回りされた。そして予想していたとおり答えはいいものではなかった。

「お前の目を見れば何をしたいかなんてすぐわかる。お前はその読者なんかかってやつをやりたいんだろう？ 前に桐乃に誘われた時は断ってたじゃないか？」

「あのときは興味はあったけど乗り気になれなくて。だけど今日スカウトの人に言われて、そして美香にもっと前にでなきゃって言われて、そのとおりだなって思ったの」

これは本心だ。私はこの引っ込み思案をどうにかしようとはおもっていたけど、きっかけがなかった。いや、きっかけはたくさんあったかもしれないけど、私がそれを逃してただけだ。

だけど今回、美香にそう言われたのと、もともと興味があったのもあってようやく決心がついた。

「その気概は評価するが別にその仕事でなくても他にあるだろう。そしてお前は勉強があるじゃないか。それを疎かにしてしまうのであるならば本末転倒だ。桐乃は部活も勉強も両立すると言っていたから許可したんだ。そして実際にそれを実現している。お前にはできるのか？」

「うっ……」

いくら自称秀才の私であっても、モデルの仕事しながら全国上位をキープするのは難しいかもしれない。できるかも知れないけど、点数が落ちるのは間違いないだろう。わたしはお姉さんみたいに器用じゃないのだ。

「……図星か。ならだめだ。自分のことを疎かにしてまで仕事する必要など無い。諦めろ」

「おとおさん……」

「まあまあお父さん、いいじゃない。いままで楓は頑張ってきたじゃない。ご褒美をあげましょうよ。確かに模試の順位は落ちるかもしれないけど、いままで以上に頑張るって言ってるし、自分でお金を稼げるようになれば視野が広がるわよ。それに美香ちゃんの言うとおり、楓はもつと人前に出れるようにならないと。モデルなんてそれにとつてもいい機会じゃない」

「……む、母さん、しかしだな……」

そんなところでいままでずっと無言で経緯を見ていたお母さんが口を開いた。さすがのお父さんもお母さんにそう言われてしまつては強く出れないようだ。

ちなみに、美香はよく家に遊びに来るので我が家族全員と顔見知りである。

「それにここで懐の大きいところをみせておかないと娘にカタブツ親父なんて思われて嫌われるわよ？」

「むっ……」

いつもは厳しいお父さんも、さすがに子供に嫌われるというのは堪えるらしい。眉間に皺を寄せて考え込んでいる。

「……確かに母さんの言うとおり社会勉強になるだろう。わかった、許可してやろう。だが、勉強は疎かにするんじゃないぞ」

「ほんと？　ありがとうお父さん、大好き」

そういつて抱きついてやる。お父さんもぎこちないながらも抱き返してくれる。すっかり子供のことを考えてくれる父親がいるって恵まれていると思う。最初許可してくれなかったのも、私のことを

想つてのことだったんだし、本当にお父さん、お母さんには頭が上がない。

そこでお母さんと目が合った。お母さんは私に向かってウィンクなんかしている。お母さんにとってはお父さんの操縦は簡単ということか。母は強し。そういうことなのだろうか……

「あ、そうだ。お姉さんには内緒にしておいてね。驚かせたいからさ」

そう言うってから私は部屋に戻ってモデルの承諾の電話をして寝た。突然の電話にもかかわらず、スカウトのお兄さんはすぐに出てくれて私の話を聴いてくれた。来週の日曜日に撮影をやるらしい。なんだかんだで楽しみだ。

楽しみとか思ってた私は少し浮かれていたかもしれない。これはやばい、緊張感がやばい。この緊張感だけでご飯三杯いける。もうそんなわけわからない例えしかできないくらい緊張している。

今私がいる場所は、スタジオである。本日は待ちに待っていた日曜日。私は気分上々で言われたスタジオまで足を運び、待っていてくれたスカウトのお兄さんに挨拶をして、さっそく始まるというので準備をしていたのだが……

いざカメラやいろいろ機材がある撮影場所まで着てみると、そんな浮かれていた気分は吹き飛んでしまった。私はもうちょっと軽い感じなのかと思っていたけれど、ぜんぜん軽いとかそんなものじゃなかった。

撮影に使うフロアはカメラや反射板などの機材でいっぱいだし、さらには私と同年代の女の子がたくさん、大人の人もせわしなく動いている。中には大人の人と真剣にどのように撮るのか打ち合わせをしている子もいる。

その中で私はというと、なにをどうすればいいのかわからず、部屋の隅で突っ立っていることしかできないでいた。私の番はまだ先

らしいので自分は余裕はあると思っていたのだが、どうやらそんなのただのやせ我慢でしかなくて、心臓がバクバクうるさい。

そんな私に比べて、周りの女の子はカメラマンさんに指示されたとおりにポーズを取り、満面の笑みを浮かべてカメラの前に立っている。本心からすごいと思う。もうこんなところにきていまさるんだけど、私には到底できそうにない。プロっていつのを見せられた。

軽い気持ちでできるような仕事じゃないだと、今になって気づいた。今すぐ逃げ出したい……申し訳ないけどやっぱり無理ですって言うて帰らせてもらおうかと、そんなことを思いつく。お父さんには怒られるかもしれないけど……

「あれ、楓だね？　すごくかわいいじゃん！」

「うわあっ！　あ、あやせかあ……。びっくりした……」

「驚かせちゃった？　マネージャーに楓が読モやるって聞いてさ、見に来ちゃった。すごい緊張してるね、大丈夫？」

私がそんなマイナス方向に思考を向けていると、急に隣から声をかけられびっくりして誰だと振り返ってみると、その人は新垣あやせであつた。あらがきお姉さんのクラスメイトでモデル仲間である。お姉さんとは違つて、あやせは事務所に入っているのだという。本物のプロだ。

そして私とあやせの接点というのは、あやせはお姉さんの親友だからである。お姉さん経由であやせを紹介してもらつて、遊んだりして仲良くなつた。あやせは優しくて面倒見があるとてもいい子さんなのである。その性格と、かわいいのもあつて学校ではかなり人気がある。よく学校の男子があやせに告白をして振られたという話を聞くが、まあそれも仕方ないと思う。あやせにつりあう男子なんてそうそういないだろうから。ただ、多少思い込みが強く自己完結しがちなところが欠点だ。でもその欠点もあやせならチャームポイントになるのかもしれない。

「う、うん、ただ大丈夫じゃなくないと思う……。それにしてもみんなすごいね。カメラの前であんなポーズ取れるなんて」

「本当に大丈夫？ ガッチガチじゃん。まあ最初だし仕方ないって言ったら仕方ないかもねっ。最初は緊張するかもしれないけど、カメラマンの人とかちゃんと指示してくれるし、やってると案外自然とポーズとれるようになるから大丈夫だよ。……あら、楓の番じゃない？ カメラマンさんが読んでるよ？」

あやせに言われ気づいた。カメラマンさんがこっちを向いて私の名前を呼んでいる。どうしよう……あやせはすぐ慣れるなんて言っているけれど、そんなもの信じられない。心臓が破裂しそうな速度でバクバクしているのがわかる。へんな汗も出てきた。

「ほら、突っ立ってないで行った！ 自信もって！」

あやせに背中を押されて撮ることになってしまった。顔がとても熱い。おそらく私の顔は今、真っ赤になっているだろう。こんなにも緊張したのはいつ以来だろうか。初めて全国模試で一位をとったとき、全校生徒の前で表彰されたとき以来かもしれない。いつもは自分から前に出るのは避けていたので緊張をしたことはあまりなかった。

「じゃあ楓ちゃん、そこに立って腰に手をあてて笑って」

そのまま、カメラの前まで来てしまった。カメラマンさんが私に指示を出す、私の耳には入ってこない。

「楓ちゃん顔固いよ！ ほら力抜いて自然体で！」

「えっと、えと……」

どうしようどうしよう。パニックで地面の上に立っているのかさえあやふやになってきた。

「ほら楓！ 笑って！ ……こりゃガチガチだね。カメラさん。私も入って良いですか？」

「ああ、あやせちゃん。友達なの？ いいよ入ってあげて。リラックサさせてあげてよ」

「まかせてください！」

「楓、私も一緒に撮るからよろしくね！ ほら腕組んで、笑って！」  
私の様子に見かねたのか、突如あやせが乱入してきた。そしてあ

やせは私の腕とあやせの腕を組ませ、カメラに向かってポーズをとっている。

…… 案外、それだけで落ち着いてきた。一人じゃだめだけど、二人なら大丈夫みたいなそんな気分だ。

「いいよーっおっけ！ 次は少し前かがみになって！」

あやせと撮っている内に、だんだんと慣れてきたようだ。とりあえずはパニックには陥らないようにはなったと思う。あやせもそんな私をみて満足そうだ。

「もう大丈夫そうだね。あとは一人で頑張ってみてね」

「ありがとう。あやせのおかげで落ちつけたよ。私頑張ってみるね」  
「はい、じゃあ楓ちゃん次はこの服着てやってみようか」

あやせから独り立ちした私は、緊張はするけれども先ほどのようにパニックには陥ることはなく、写真に写ることができるようになっていた。

それから何枚か写真を撮って、今日の仕事は終わりになった。今日は初めてということで、記念に撮影に使った服を一着くれた。さらにお金も少し色をつけてくれるらしい。テレビとかで聞いた話によると、読者モデルの子たちは安いギャラで使われるとか聞いていてすこしは心配していたけれど、そんなことはないみたいで安心した。むしろ私自身がちょっと高いのではないかと思うほどだ。内心笑みが止まらない。

そして今日の感想を一言で表すなら、楽しかったという言葉しか出てこない。なぜいままでモデルのスカウト断ってきたんだろうか。こんなにも楽しいことを自分から断っていたなんて人生損をしていたと思う。そんなことを思うほどに、今日の私は充実していた。これがきっかけで私の内気がなくなっただけではないけど、ひとつ、壁を乗り越えたような気がする。

「楓！ お疲れ様！ 最初はガチガチだったけど、最後の方はノリノリだったね！」

「ノリノリ…… だったのかな。それはともかく、ちゃんとできたの

もあやせのおかげだよ。ありがとね」

「そんなことないよー。楓が頑張ったからだよ。あ、そうだ！これ」

あやせに渡されたのは一枚の写真。

その写真は、最初にあやせと一緒に撮った写真だった。

「これって……」

「そうそう、私と撮ったやつ。記念にもらってきたんだ。これは楓の分。同じのを私も持つてるから大事にしようね！」

あやせはなんていい子なんだ。お姉さんは幸せ者だと思う、こんな親友がいて。

私にも美香という親友がいるけれど、ちょっと抜けてるところがある。だからといって、あやせに劣るとかそういうことではないけれど。

「うん、ありがとうあやせ！」

「はいはいよしよし。桐乃には内緒なんだよね？　どんな反応するだろうね？」

嬉しさのあまり、思わず抱きついてしまった。

これからはあやせもお姉さんもいることだし、楽しくモデルの仕事ができることだろう。

そして雑誌が発売されたとき、お姉さんはどのような顔をするだろうか。それが楽しみで仕方ない。

そして今日は雑誌の発売日。なんの発売日かというと、私が読者モデルとしてのデビューとなる雑誌の発売日だ。

だけど発売日が平日。ということは私は普通に学校に行っている。だから今すぐ雑誌を買いに行つてどんなものか見てみたいけど、買に行けない。この気持ちをどう表現してやるうか。

今まではゲームの発売日に学校を休んでまで買いに行く人の気持ちが理解できなかったけど、たぶんあの人たちも今の私みたいな気

持ちだったのだろう。私は学校を休んでまで買いに行くなんて愚行は犯さない。サボリ、ダメ絶対。だけど、どうもそわそわしてしまつて授業に身が入らない。こんなんじゃあ、サボりと変わらないよ。うなきがする。

「楓が出る雑誌つて今日発売でしょ？ 買いに行こうよ！」

だけど今は学校も最後の授業が終わつてホームルームがもうすぐ始まると言つた時。私は良く耐えたと自分自身を褒めながら、放課後になったら早速近くのコンビニまで買いに行こうと決心したとき、美香が話しかけてきた。しかもなかなか大きな声で。

「えー？ なにそれえー？ 楓が雑誌に出るのぉ？」

「そうだよ！ 桐乃と同じ雑誌で読毛やるんだよ！」

「キヤー！！ すごぉい！ 帰りに買つてこ！」

その声は当然教室のみんなの耳に入つてしまつて、さらに美香はみんなに言いふらすからそれはもうキヤーキヤー凄まじい事に……。先生が来ても収まらないし、怒つても収まらない。

クラスの女子や男子にすごい勢いで、あれはどうだったとかあの子に会ったかとか質問される。大勢に詰め寄られることが苦手な私にはちよつともう限界に近い。それに、騒ぎに誘われて隣のクラスの人とか来てしまふし、めちゃくちゃだ。

私は恨みを込めた視線を美香に向けると、明らかに申し訳にしない顔で申し訳なさそうな顔を作つて私に謝つて来た。

私は雑誌を買つたら近くの喫茶店にでも行つて、美香と一緒に見ようと思つていたのに。少々イラつとした。

「ああ、私のこともそうだけど、美香の好きな一組の男子つてどうなったの？ 先週デートに誘うとか言つてたけど？」

「えー？ それほんとぉー美香ぁー。その男子つてあのイケメンだよね？ チョー気になるんだけど！」

「えー？ ちょ、楓！ それ言わない約束だったじゃん！」

「美香があんな大声で言うからだよ。これは罰だよ」

「うわーん！ 理不尽だー！」

だから私がこうやって美香の秘密を言ってしまったのも仕方のないことなのかもしれない。だけど、あとで謝っておこう。言っからちよつとやりすぎたと後悔した。

そんな騒がしいホームルームであつたが、とうとう隣のクラスの先生も来て、みんな怒鳴られて散り散りに各々の場所へ歸つて行つた。そのときの先生の怒声が神の声に聞こえた。私は無神論者だけれども。

そして現在、私と美香はコンビニで雑誌を買つたあと、近くの喫茶店でそれを広げて見ていた。

あの後私たちはちゃんと謝り合つて、仲直りした。私も美香もあれくらいで友達をやめるなんてありえない。むしろ笑つて許してくれた。やっぱり美香でよかったと思う。恥ずかしいので言わないけども。

「あ、これじゃない？ すっごいかわいいじゃん！ あ、こっちも！ これ、あやせと一緒に写つてるじゃん！ うわ、これもかわいいー！ いやー、楓すごいじゃん！」

「ちよつと美香、声大きいって……！ みんなこつち見てるし」

最初は静かに見ていたのだが、私の写真を見つけると興奮したのか、大声ではしゃぎ始めた。そのおかげで、周りに座っている人たちから奇妙な見られた。恥ずかしい。

「あ、ごめんごめん。でもなんで写真ではこんなに笑顔でノリノリなのに、周りに見られるだけで恥ずかしがっちゃうかなー」

「それとこれはちがうよ。写真とかはカメラマンの人が褒めてくれるし、周りのモデルのみんなは写真撮られる人たちだしあまり気にならないんだよ」

本当にそれとこれは違う。みんなわかつてくれるだろうか。例えば、自分からならボケとかかませるけど、あのネタやってー、とかお願いされるのは恥ずかしいからできないみたいな感じ。表すなら

そんな感覚に似ていると思う。

美香が叫んだせいで「あ、あの子雑誌でモデルやってた子だ」「まじで？ 写真撮れよ写真」とか言ってるのが聞こえてくる。嬉し恥ずかしというかなんというか……。それはそれでありがたいけど、普通に私に携帯向けて写真撮ろうとするのはやめてほしい。

「ほら楓、写真撮られてるからポーズ決めちゃいなよ。それにあの人たちちよつとかっこ良くない？ ここでうまくやつとけばいい事あるかもよ？」

「からかうのはよしてよ……。それに私はいくら顔は良くても、あんなチャラチャラした男じゃなくてもつと清潔で紳士でロマンチックな人が好きなの」

「うわ、ごめん砂糖吐きそう。そんなんじゃ彼氏なんてできないよ」そう言いながら吐く仕草をする美香。まったく失礼だと思う。

私だつて彼氏くらいほしい。かつこいいことにこしたことはないけど、あんなチャラ男と付き合うなら犬と付き合った方がましだ。私が高望み過ぎているというのは知っている。だけど学校には頭の悪そうな男子しかいないので、自然と高望みしてしまう。

「ほつといてください。デート誘うとか言っておいて誘ってないへたれに言われたくないです」

「うっ、仕方ないじゃん。だつて恥ずかしいんだもん」

だもん、とか言っても全然可愛くない。言つていいのは小学生までだ。

それから私たちはいくらかおしゃべりした後、門限があるので家に帰った。いまさら中学生に門限をつける親っているのだろうか。お姉さんは六時半までなのに対して、同い年の私は六時までというものも納得がいかない。まあお姉さんは部活があるから自然と六時を過ぎてしまうのはわかるけど……。なら私も同じにしてほしい。だからといって現状そこまで不憫にも思っていないのでお父さんに門限を伸ばすように言ったりはしていない。

言つてはいないけれども、いつも門限ぎりぎりに帰るようにして

いる。私のささやかな抵抗だ。

「ただいまー」

今日は門限二分前に帰宅した私はリビングに入って挨拶をした。そこにはお兄さんがソファーに座っていてテレビを見ていた。

「お、楓か、おかえり。そーいやお袋に聞いたけど、お前桐乃と同じ雑誌でモデルやるらしいな」

お姉さんには内緒といったけど、お兄さんには内緒なんて言っていなかったのを思い出す。それにしてもお兄さんはなんか淡々としている。騒がれても嫌だけど、もう少し驚いてほしいというのも本心だったりする。

「読者モデルだよ、ちゃんと覚えてね。それにしてもあまり驚いてくれないんだね。私にとつては世紀の一大事なのに」

「まあ、いつかはやるんじゃないかと思ってたからな……。やっとモデル始めたかって感じたな」

お兄さんはそんなことを思っていたらしい。なんだか負けた気がする。何に負けたのかはわからないけれど。

「ふーん。へえ。……はいこれ、私がでた雑誌。今日発売日だったんだ」

「なんだよその反応……。つうか今日発売日だったのか。どれどれ……」

お兄さんは私から雑誌を受け取ると、私が写っているページを開いて見始めた。その姿をみて気づいたが、ファッション雑誌を読むお兄さんというのはこれほどにも似合わないものなのか。

「お、これか。おお、なかなかいいんじゃないの？ これとかお前に似合ってるじゃないか」

「そう言われると恥ずかしいね。あと、このページにも私が写ってるんだ、見てよ」

そうやってしばらくの間、私たちは私のデビュー戦を見て笑ったりしてた。

そしてお姉さんの門限が近くなった時、玄関のドアが開いた音が

した後、ドタドタと足を鳴らしてリビングにお姉さんが現れた。

「楓っ！ 読者モデル始めたんだって！？ 今日学校で聞いたよ、しかも私と同じ雑誌だって！ どうして言ってくれなかったの！？」  
そう言って飛び込んできたお姉さんに肩を掴まれてすごい勢いで質問をされた……ちよつと苦しい。

「おい桐乃、楓が苦しそうだぞ」

「あ、ごめん。もう、楓がモデルやってるって聞いたときすごいびっくりしたんだからね！ あ、それ貸して！」

お姉さんは機関銃のごとくベラベラ喋った後、お兄さんが持った雑誌をひったくった。

お姉さんにはまず落ち着いてほしい。顔真っ赤だし、息切れてるし、今学校の男子がお姉さんを見たらびっくりするだろう。

「お姉さんを驚かせたくて内緒にしてたんだ。ごめんね」

「そうなんだ。もう楓最高っ！ ええと、どれどれ……うわ、キャー！！ かわいいー！ うわこれも！ あー！ あやせと写ってるやつもある！ かわいいー！！ キャー！」

お姉さんは二万ヘルツという人間が聞ける限界の音域を超えるのではないかという甲高い声を出し、いかにも私、興奮してます！と全身で表現しているた。

そしてそう言いながらお姉さんは私に抱きついてくる。そんな声を耳の真横で聞いているから、私の耳は聴覚を失いつつある。頭の中がガンガンしてくらくらする。

それから夕食が始まる時間までお姉さんは騒ぎっぱなしでお母さんに注意されるまで続いた。食事中もずっと興奮しっぱなしで、何度もお父さんに注意されていた。

いつも食事では無口なお姉さんも今日はペラペラ良く喋る。すこし恥ずかしいけど、ここまで喜んでもらえると私も嬉しい。

「わあ、かわいいじゃない。あ、ここも。ほらほらお父さん、楓が写ってるわよ。見て見て」

「そうだな」

お母さんは私の写真を見てお姉さんと一緒にキヤーキヤー言っている。お父さんもそっけない反応はしているが、食事をしながら雑誌をチラチラ見ている。素直じゃない。

お兄さんは相変わらず空気だ。なんかもうテレビなんか見てるし。そんな感じで私の一日は終わった。終始恥ずかし疲れたりだったけど、とてもいい日だったと思う。明日学校でクラスみんなになんて言われるか想像するとちょっと気分が滅入るけど。

今日は良い夢見れそうだ。

## 2 話（後書き）

こうさか・かえで  
高坂楓

- ・性別：女
- ・年齢：14 歳
- ・慎重：168 cm
- ・体重：48 kg
- ・3サイズ：85 / 56 / 86

この物語の主人公。  
こうさか・きょうすけ こうさか・きりの

高坂京介と高坂桐乃の妹。桐乃とは双子で、楓が妹にあたる。  
茶髪にピアスというイマドキの桐乃に対して、楓は腰までストレ  
ートにした黒髪で、大和撫子な大人しめな女の子。

### ・容姿

顔は桐乃と瓜二つ。それに加えて楓には泣きぼくろがある。  
髪には気を使っていて綺麗。一応ピアスは空いている。

黒髪っ子大好きです。

7 / 27 修正

### 3話

案の定次の日はクラスが大騒ぎだった。朝からクラスの人に雑誌みたよとかかわいかったねとか俺の彼女になってくださいとか散々言われた。……ん？

昼食時になってもそれはおさまらず、今度は他のクラスの人たちが押し寄せてきた。クラスに入ってきて写真だけを撮って帰っていく不届き者が来るし。撮影料置いてけ！ って言いたい。言えないけど。

まあ、こんなことで怒るほど私の心は狭くない。美香が慰めてくれるし、私は大丈夫だ。

「ほら楓ちゃん、笑って笑って！ ギャハハハハ！」

どこのだれか知らない男子が私の隣に来てピースなんかして写真を撮っている。それを見て他の男子はゲラゲラ笑っている。こういう場面は良く見る。一人に何かやらせて、それを他の者は見て笑うみたいなことだろう。とても不愉快だが、無視すればいいだけだ。がんばれ私。

「楓ちゃん、俺二組の柿崎って言うんだけどさ、アド教えてよねえ」金髪で中学生の癖にごつついゴテゴテしたピアスなんか開けてるチャラチャラした男子が馴れ馴れしく私に話しかけてくる。しかも携帯のアドレスなんか聞いてくるし。私の大嫌いな部類の人間だ。

「あ、ええと、ごめん。今私携帯持つきてないからさ……」

「じゃあ、電話番号でもいいからさ、良いでしょ？」

だからと言って私には文句を言える度胸は無い。この男子の顔怖いし。日本人はこういうところに弱いんだ。仕方ないよね。

だからアドレスを聞かれたときに断る常套句を使って、暗に聞いてくんなと言ってみたんだが、やつは無視して電話番号を聞いてきた。だから携帯無いって言うてるのに聞いてこないでくれ。本当は持つてるけど。みんな、本当は中学校に携帯を持ってきたらダメな

んだゾ。

最初は微笑ましそうに私を見ていたクラスみんなも、こうなつてくると心配そうな顔をして私を見ている。だけど男子が怖くて動けない。まあ仕方ない。私も薄情だとは思うが、友達がこうなっても怖くて行けないもんね。

「ちよつとねえ、楓困つてんじゃん。教室に帰りなよ」

おお美香あゝ。言えない私の代わりに私の心の内を言ってくれる。ここに女神がいたよ。少し泣きそうだ。

いつもはほわほわしている美香の可愛い顔も今だけは怒りに染まっている。これはなかなか見せない顔だ。どんな時に見せるかという、私と本気で喧嘩する時とかそんな時にしか見せない顔。本気で私の為に怒ってくれている。胸が熱くなるよ。

「ああ？ ンだてめえ。俺は楓ちゃんに話しかけてんだよ。横から入ってくんなよクソが」

「ちよ、ちよつとあんた、そんなの関係ないじゃん。楓が困つてんだから……」

私の為に怒ってくれる美香もこの柿崎っていうチャラ男にきつく言われて語尾が弱くなってしまう。……ごめんね私の為に。

さすがの私も親友がこう言われると我慢できない。

「ちよつと柿崎くん……！ はつきり言うけど迷惑だから。教室に戻ってくれないかな。クラスのみんなも困ってるし」

「……………ツチ、モデルになつたからって良い気になりやがって。マジありえねエ」

柿崎もそう言われて周りを見回したあと、そのことに気が付いたのか、嫌そうな顔をしながら捨て台詞を吐いて教室を出て行った。周りの目を気にする日本人は『みんな』に弱い。完全勝利だ。

「ふう……ありがとね美香、助かったよ。褒美としてジュースを奢ってやるう」

「いやあ怖かった怖かった。私頑張ったんだから、ジュースじゃなくてもっと高いの奢ってよー」

そんな軽口で互いを慰め合っていた。いつも思うが親友が美香でよかったと思う。私はプライベートで遊ぶのって美香くらいだけだから、美香がいなくなったら実際危ないんだよね。面と向かって言えないけど。

結構こういう人って多いと思うんだよ。学校では仲良くするけど、休日とかは絡まないっていう広く浅くっていう人。私もそのタイプだ。だから美香と遊ばない日は私は一人で家で過ごすことが多い。

まあお姉さんの友達とも遊ぶけど、その時はお姉さんが一緒の時だし、本当に遊ぶっていうのは美香だけなんだ。

「——楓！　なんか変なヤツに絡まれたって聞いてきたけど……大丈夫そうだね」

お姉さんがすごい顔で私がいるクラスに入ってきた。息が上がっていることから、ここまで走ってきたんだろう。

「うん、今終わったよ。心配してくれてありがとね」

「当然っしょ。また変なの来るかもしれないから、あたしのクラスきなよ。美香も一緒に」

そう言ってお姉さんは私の手を取って連れて行った。お姉さんのクラスって、ちょっと苦手なんだよな。

「あ、桐乃が帰ってきたあ。どうだった？」

「うん大丈夫だったよ。心配だから連れてきた」

私がお姉さんのクラスに入ったとき、お姉さんグループの一人がお姉さんに話しかけた。

いつも思うけど、お姉さんグループはすごいね。なんか異様なオラを感じる。それはみんながみんなかわいいからだと思うんだけど、それに合わせてテンションが高い。

女の私でも近寄り難いんだから、男子とかもつと肩身狭いだろうなあ。

私とは基本合わない人たちだ。悪い人たちではないんだけどね。

「楓、本当に平気？　なんか絡んできたの柿崎って聞いたけど」

「本当に大丈夫だよ。というか、柿崎って人有名なの？」

お姉さんグループの一人のあやせが私を心配してくれた。あやせはそこまでアゲアゲってわけじゃないけど、要領良いからどこでも仲良くできるんだよね。だからこのグループでもうまくやっているように見える。羨ましい。

「ああ、柿崎っしょ？ マジあいつキモイよねえ。不良ぶつてるところか特に。しんじやえって感じい？」 キヤハハ」

私は知らなかったが、柿崎って人は結構有名らしい。なんか喧嘩とかばっかりやっていて俺力ツケーとかやってるらしい。

それなのに私のクラスでなったみたい、みんなに行動を否定されたりすると尻尾巻いて逃げるっていう小心者っていう話もあるんだって。

そんなことを教えてくれたのは来栖加奈子。くるす・かなここの子はすごくかわいい子でいい子だと思う。そうなんだけど、正直私は苦手だ。

それは、主に口調とかきついんだ。一言で言わせてもらうと『生意気』なんだ。わたしとかにはああいうことは言わないんだけど、敵には厳しいっていうか、加奈子の一言一言が突き刺さるというか……。まあ、そんな感じ。

「まさかあんなことになるとは思ってなかったよ。昨日の今日でなんか疲れた」

「そりや仕方ないよ、楓かわいいし。学年で結構人気だしね。そんなひとがモデルやるって聞いたらこうなるのは必然だって。一週間くらい続くんじゃない？」

うえ、まじか。それまではここに避難しようかな。

「じゃあ、おさまるまであたしのクラスに来なよ。ここなら追いかえるしさ」

「本当？ じゃあお願いしようかな。美香も良いよね？」  
「もちろん！」

私がお願する前にお姉さんが提案してくれた。ちょっとこのテンションは大変だけど、あんなのよりは何倍もましだ。

それから一週間ほど、本当に休みの時間になるといろんな人が来

た。しかも上級生まで来るし、お姉さんのクラスに行ってなかったら学校休んでたよ。

そしていくらかクラスに押し寄せ来る人がいなくなった日、いつも一緒に帰っていた美香が今日は用事があるから一緒に帰れないとのことで、お姉さんと一緒に帰っていた。

そういえば聞きたいことがあったんだ。ちょうどいい機会だし、聞いてみるか。

「ねえお姉さん」

「ん？ なに？」

「なんかお姉さん、お兄さんと仲良くなった？」

それを言った途端、お姉さんは歩くのを止めて石造のごとく固まった。片足を宙にあげたまま力チンコチンになっていた。拍手をあげたくなるような石造っぶりだ。

「え、ええ？ な、なにそれ。あたしがあんなクソ兄貴と仲が良くなっただってー？ あ、あり得ないっしょ。な、なんであ、あんなキモイ兄貴となんか」

そういうお姉さんは額に汗を滲ませて、平常を装っているんだと思うが、声は震えているし、後ずさってるし、明らかに何かありますって体で表している。

「だっていままでは挨拶くらいしか話してなかったのに、最近はよく話してるの見るし、お姉さんが今みたいにお兄さんのことを言うなんてなかったじゃん」

「ああああれは！ そ、そう！ あいつが勝手に話しかけてくるの！ ほんつとキモイよね！ なに馴れ馴れしくしてんのってカンジ！」

「そ、そうなんだ……」

「そうよ！ そうなんだから！」

本当にお兄さんとお姉さんの間に何があったんだらう。別に仲良

くなることは悪い事じゃないと思うんだけどなあ。

そのうちお姉さんも話してくれるでしょ。お兄さんにも聞いてみるか。

私は家に帰ってすぐに、お兄さんの部屋に向かった。お姉さんは友達に呼ばれたらしく、帰り途中で私と別れて遊びに行っている。

「お兄さん入るよ」

私はそういつてお兄さんの部屋に入った。

「ウヒヤアアアアア！？」 か、かえでええええ！！ ノックをしるおおお！！」

お兄さんは私が入ってきた途端、背に何かを隠しながらいままで聞いたことないような奇声をあげた。なんか鬼気迫る様子だ。

最近お兄さんの部屋が机を叩く音が聞こえたり、悔しそうな声が聞こえたり、奇行がさらに増えた気がする。大丈夫かこの人。

「うつ……な、なんかごめん。そして背中になんか隠したよね？なに？」

「な、何のことか知らねえなああ！ なんの用だい、楓ちゃん！」

お兄さんの気持ち悪さが上がった。この気持ち悪さだけでスライムくらいなら倒せそうな勢いだ。

「最近気持ち悪いよ。まあそんなことはどうでもいいけど、聞いたことがあるんだ」

「気持ち悪いか……そうだよな……。で、何の用だい？」

何だ本当に。気持ち悪いって認めた……？ もうわけわからないぜ！

「ええとね、最近お姉さんと仲直りした？ なんか最近あったでしょ」

そう言うとお兄さんもお姉さん程ではないが、反応を示した。思いつきりビクッ！！ と震えた。

「あ、あいつとかあ？ お前俺とあいつが仲悪いの知ってんだろ？」

「知ってるけどさ、なんか最近話すようになってる気がするさ」

「ああ、あ、あれは麻奈実がパソコンについて知りたがってたから

さ、俺わかんねーじゃん？ だからしかたなく桐乃なら知ってんじやねーかと思つて聞いただけだ。そんだけだぞ」

なんだそういうことか。なんでお姉さんはそんなことを隠そうとするんだ。

というか、パソコンなら私に聞けばいいじゃないか。私もできるんだし。

そこまで聞くのは野暮かな。お兄さんもきつと仲直りしたいんだよねきつと。

というか、また麻奈実さんかい。仲がよろしいことで。

「お兄さん麻奈実さんソッコンだね。麻奈実さんの為にお姉さんに聞くなんて、熱いね」

「おいからかうなよ。そんなことねーって何度も言つてんだろ。怒るぞ？」

あーもう聞いているこつちが恥ずかしいよ！ お兄さんは麻奈実さんのことになる我真剣になるから、からかいがいがあるつてもんだよ。そんなこと言つたら本気で怒るから言えないけど。

麻奈実さんもあんな顔して隅に置けないなあ、お兄さんにこんなに思われているなんて。

「あーもうわかったわかった。お兄さんが麻奈実さんのことを好きなのはわかったからさ、ありがとね」

「だから麻奈実とはなんもね——」

怒られるから早々に退散だ。早く部屋にこもつてお兄さんの怒りがおさまるまで待つてよう。

それにしても、とても少しだけお兄さんとお姉さんの距離が縮んだってことはわかったからよしとしよう。

麻奈実さん、あなたのおかげで我が家は一歩良くなりました。

### 3話（後書き）

さとう・みか  
佐藤美香

・性別：女

・年齢：14歳

・身長：162cm

・体重：43kg

・3サイズ：79/54/81

楓のクラスメイトで親友。楓の為に怒ったりできる優しい子。  
だが多少天然が入っており、たびたびボカを起こす。

・容姿

ブラウンの髪色で肩くらいまでの長さのポニーテールにしている。  
目尻が少し垂れているかわいらしい顔立ち。

#### 4話（前書き）

さて、一巻の山場に突入しました。  
どうやって話を進めようか悩むぜ……！

## 4話

やっぱり最近お兄さんとお姉さんの仲が良くなっていると思う。  
お兄さんはパソコンのことを聞いたただけだと言っていたが、それ  
だけじゃここまで仲良くはならない。

いままでは口をきいているところなんて滅多に見せなかったのに、  
最近は口調は厳しいながらも会話しているのを良く見る。それに、  
これが一番の変化なんだが、お姉さんがお兄さんを部屋に招いてい  
るのを見たんだ。

一体この変化はなんだろう？ 全てここ最近になって見えた変化  
だ。お兄さんとお姉さんに聞いてもはぐらかされるし。……お兄さ  
んとお姉さんは絶対に何かを隠している。

そして今日、お姉さんはいつもより気合いの入ったメイクと服を  
着てお兄さんと出かけて行った。お兄さんはいつも通りのＴシャツ  
とジーパンというなんともダサ……ふつうな服装だ。

お姉さんはこれから遠足でも行くのか、というほど笑顔で「早く  
しなさいよ、ノロマ」とお兄さんを急かしている。

あの互いを嫌い合っている二人が、仲よさそうに話しながら出か  
けて行ったんだよ？ 本当にこの世の中何が起こるかわからない。

くっ！ 今日モデルの仕事があるから二人を追えないのが残念  
だ。この私、高坂楓の一生の不覚だね！

ああ、もうこんな時間じゃないか。余裕を持って起きたのにギリ  
ギリになってしまった。全部あの二人のせいだ。

もう夏も近いということで、今日は肌を露出した少し大胆な服を  
着て撮るらしい。まあ肌を露出すると言ってもせいぜい肩を出す、  
ノースリーブくらいまでののだが。

私も結構この仕事は慣れてきた。だいたいどのようなものかわか

ってきた。そして大変だということも。

ポーズの取り方、目線の向け方、この服を着るときはどの角度が一番見栄えがいいか——など様々なことを教えてもらった。

正直思っていたよりも大変な仕事だ。覚えることはまだまだたくさんある。だからいつも仕事を終えて帰ってくる頃はヘトヘトだ。だけどその分プロ意識というの芽生えてきたと思う。恥ずかしいなどとも思わなくなったし、逆に自分をもっと良く魅せようとも思ってきた。

そのおかげか、最初は注意されることも多かったけど、今じゃ褒められる方が多くなってきている。私は褒めて伸びるタイプなんだね。もっと私を褒めて！

学校も騒ぎは収まったし、私が出た雑誌を見てくれたクラスメイトたちが「可愛かったね」とか言ってくれど私も嬉しくなる。

こう改めて思うと、私もここ最近で変わってきたなあ。私もお兄さんとお姉さんのこと言えないね。

そして今、私はカメラの前でポーズをとっているというわけだ。肩までだけど、肌を出して撮影するっていうのは、先ほど恥ずかしくないなんて言っただけほんの少しだけ恥ずかしい思いもある。でも、プロである私にはそんな物どうってことじゃない、プロだからね！

「いいね、楓ちゃん。OK、じゃあ休憩にしようか」

カメラマンさんの一言でやっと休憩に入れた。寒かったからはやく上に何か着たい。やっぱりやせ我慢はいけないと思う、うん。

「ありがとうございます」

「うん、こちらこそ。それにしても楓ちゃんすごく良くなったね。前は恥ずかしがってばかりで困ったもんだよ」

このカメラマンの人は、私が最初に撮ってもらった人なんだ。撮影する先々でよく会うから、こうやって話すようになった。

話してみると、結構気さくない人ってことに気が付いた。顔もかっこいいしね。そしてこのカメラマンさんは奥さんがいるんだっ

て。写真を見せてもらったけど、美人系のお姉さんだった。奥さん  
はいい人を手に入れたね。私もこういう人が彼氏に欲しいよ。

……そして前のことは少し私の黒歴史と化しているから、あまり  
触れてほしくないものだ。

あの日以降も何回かやらかしてしまつて、何度みんなを困らせた  
か……。

「いやゝ前のことはもういいじゃないですか。今はできるようにな  
つたんですし。私だつて成長するんです。今じゃこの仕事に誇りを  
持つてますよ」

これは私の本心だ。私はこの仕事に誇りを持つているから、こん  
なことを人に言つても恥ずかしくはない。時間が経つたあと思い出  
しては恥ずかしくて死にたくなるけど……。それをわかつていても  
私は言うことをやめない。

「いい心がけだ。ほとんどの人は――中学生や高校生だから仕方が  
無いかも知れないけど、ちょっと軽い気持ちでこの仕事をやつてる  
感があるんだよね。だけど、楓ちゃんはそのうのは無いみたいだ  
ね。その気持ちで今後もやつてくれると、撮る側としてもやりがい  
つてものがあるよ」

「ふふん、この秀才美少女に任せてください」

「自分でそんなこと言っているうちじゃまだ任せきれないかなゝ」  
こつこつというふう冗談を混ぜながら話す、こつこつのも悪くないね。  
年上つてことでちよつと馬鹿なことも軽く言えるから気が楽だし。  
そうやつて楽しく会話していた私たちだが、私と同時に休憩に入  
つていたカメラマンさんは休憩が終つたらしく、私に良く休んでお  
くように言つと仕事に戻つて行つた。

私もそのあと休憩を終え、何回か着替えて撮影をしたりして今日  
の仕事を終えた。

いやー今日もつかれた。けどお土産にスカート貰つたし、まあ  
よししよう。

昼から仕事をして、帰つてきたのは午後七時。お父さんも私の仕

事の日は門限を遅くしてくれる。帰りは車で送ってくれるから門限を遅くしてくれるんだと思う。

そして今は夕食時。

怪しい外出をしたお兄さんとお姉さんだが、お兄さんは多少疲れた顔をしているが、お姉さんはなにかに満足したような顔をしている。

どこに行ったか聞きたいけど、お姉さんははぐらかすし、お兄さんも話してくれることは話してくれるんだけど、要領を得ない答えだし——もう諦めた。

まあそのうち話してくれるのを期待しよう。別に仲良くなってるならそれはそれで全然良いことだしね。

そして一晩明けた次の日、私はまた撮影を行っています。

正直二日連続はきつい……！ さらに今日は平日！ 放課後に撮影という……。事前に言ってくれば良かったんだけど、急に来れない人がいたらしく、私が呼び出されたというわけだ。撮影場所が私が住んでる町の隣という割と近いからすぐに行けたけど。

私はそんなことで泣きごとは言わない。今日は美香と一緒に遊びに行く約束をしていたけど。美香と今日の限定スイーツを食べに行こうって思ってたけど！ でも私はプロだから！

……今度埋め合わせをしなきゃいけないな。

だけど悪いことだらけでもない。今日はお姉さんと一緒に撮影をするのだ。何気にお姉さんと一緒に撮るのは初めてなんだ。

お姉さんの仕事する姿を見たことがなかったから、楽しみだ。スタッフと打ち合わせをするときのお姉さんの真剣な顔とか、お姉さんもこの仕事に誇りを持っているんだなあとわかる。

撮影の時も一枚一枚撮るごとに表情やポーズを変えて、カメラマンさんの注文を忠実に再現したり——うん。さすがお姉さん、カッコいい。足の揃え方とか細かいところもちゃんとなっていて、お姉

さんから学ぶことはたくさんある。

そんなことを思っていると、いつの間にかお姉さんの番は終わったようだ。

「お疲れお姉さん。かつこよかったよ」

「ありがとう。楓と一緒に仕事やるなんてちょっと変な気持ちだね」  
そう言われると少し変な感じはする。なんというか、こそばゆい  
というかよくわからない感じだけど、悪くはない。

むしろお姉さんと一緒に仕事ができ嬉しい気持ちの方が高い。

そう話していると、私の撮影の番が回ってきたみたいだ。

私も頑張って仕事をやってきているので、カメラマンさんの注文  
やポーズや他の細かいところを気をつけながら満足のいく写真を撮  
っている。私が今できる最高のものを撮っていると思う。

それでもお姉さんのと比べてみると、少し見劣りするかもしれない。  
やっぱり経験の差かな。

スタッフの人にOKをもらって撮影を終えた私は、お姉さんの元  
へと向かった。

「お姉さん、どうだった？ 結構頑張ったんだけど」

終始私の撮影を見てくれたお姉さんに今日の私の評価を聞いて  
みることにした。私の撮影を見てたお姉さんの顔は真剣そのもの  
だったし、聞かない方が失礼してもんだよね。

「おつかれさま。うん、全体的に良かったと思うよ。楓がこの仕事  
始めてからあんまり時間経ってないのに、ここまでできるのは正直  
驚いたよ！ さすが私の妹だね！ でも、もう少し欲を言うなら、  
こうやって腰に手を当ててポーズするところあったじゃん？ あそ  
こはもう少しこういうふうにした方が可愛く見えるようになるよ」  
お姉さんは身振り手振りで私がやったポーズに改良を加えてくれ  
る。

ふむ、お姉さんが改良を加えてくれるところは私が気付いていな  
かったところばかりだ。こういうところが私とお姉さんの差なのか  
もしれない。

それにお姉さんは教えるのがうまいね。将来なんかの講師とか向いているんじゃないかな。

私がお姉さんに一つ一つ丁寧に教えてもらっていると、『桐乃』という声が聞こえた。

今私たちが撮影を行っている公園は、観光マップなんかにも載る、わりかし有名で人気な公園なんだ。

だから、撮影機材なんか持ち込んで撮影を行うので、ギャラリイなんかも多少いる。……ちょっと有名人になった感じでいい気分だ。一生懸命教えてくれるお姉さんに悪いと思いながらも声のした方へ目を向けると――

「あ、お姉さん。お兄さんがいるよ」

お兄さんが何かに驚いた顔をしてこっちを見ていた。そしてその隣には麻奈実さんがいた。

なんだよデートかい。別に無視しても良かったな。

「ん？ あ、ほんとだ……って地味子いんじゃない。無視しよ」

「そうだね。無視しよう」

あんなイチャイチャ見せつけてくる二人なんかに構ってるより、お姉さんの講習のほうは何倍も有益だからね。

最近仕事ばかりだったので勉強をできなかった。

お父さんに勉強も疎かにするなと言われている私にはちょっといけない事態だ。だから今日は日曜日なので図書館で一日勉強することにしよう。

といっても大した勉強はしないけどね。とりあえず簡単に復習をしたあと、高校一年生の勉強をすと言った感じ。高校まではまだ時間があるし、ゆっくりやっているから、模試で点数を落とすなんてことにはならない。

そんな感じで軽く勉強していると、気づいたら夕方になっていた。……つく、確率の問題め……なかなか難しいじゃないか。こんな

時間になってしまったよ。

そうやって悪態をつきながら図書館を出ようとしたとき、出口でお兄さんに出会った。お兄さんは私には気づいていないみたいだけど。

「お兄さんも勉強しに来たの？」

私がそうお兄さんに話しかけるとお兄さんも私の存在に気が付いたみたいだ。

「お？ 楓か。んまあ、そうだな」

「お兄さん勉強するんだ？ お兄さん馬鹿だから勉強してないかと思っただよ」

そうか、気付かなかったけどお兄さんもいたのか。

「俺だって勉強くらいするわ！ それに思いつきりお前の前で勉強したこともあるよな！？」

「そうだったっけ？ あ、そういえば高校生にもなって私に因数分解のやり方を聞いてきたことあったね。恥ずかしい」

「恥ずかしいってか、あんな三つも文字あって何乗もある因数分解なんか一介の高校生には解けねえわ！ つうか教えたっていうかお前が俺で遊ぶためにあの問題持ってきたんだろが！」

お兄さんが勉強していることは知っている。勉強を麻奈実さんに教えてもらってるおかげで、このまま行けば割といい大学に行けることもね。

こんな私の軽い冗談に乗ってくれるお兄さんはやっぱりいい人だ。反論してくる顔が少しマジだけどね。

というか、そのくらいの問題解けるようにならなきゃだめでしょ。

「熱くなつてるとこ悪いんだけど、うるさいよ？ ……まったく、公共の場くらい慎みを持とうよ。高校生にもなってそんなんじゃない恥ずかしいよ？」

「ぐっ……てめ……覚えてろよ」

「ごめん忘れた」

「ぐぐぐっ……」

とことんからかいがいのあるお兄さんだ。

それに顔を真っ赤にして周りをきよるきよる見回してるのを見たら嘔き出しちゃうじゃないか。やめてくれ、お腹が壊れる……！

図書館から出て、今は二人で家に帰っている途中だ。お兄さんは不機嫌顔だ。別に私は悪くないよ、からかわれるお兄さんが悪いんだよ。

まあでも、謝ってあげないことはないかな？

「ごめんねお兄さん、私が悪かったよ。今度算数ドリルあげるからさ。ふふっ」

「てめーまだそれ引つ張るか。……まあいいんだけどよ」

お兄さんも本気で怒ってるわけじゃない。私がかかってるのを知ってるからね。

私もお父さん見たいな冗談通じない人にはこんなことしないよ？

玄関の扉を開けると、家の中が異様に静まりかえっていた。

いつもはテレビの音とか、お母さんが料理している音とか聞こえるんだけど、今は無音だ。

そして妙に緊迫した空気が漂っている気がする。何があっただろう？

お兄さんも首に手を当てて違和感を感じているようだ。

なんか足音を立てるのさえはばれる空気で、お兄さんと私はリビングの扉の前まで忍び足で向かった。

「……………」

そしてノブを掴んだとき、お兄さんは一瞬止まって何かに躊躇している感じだ。わかるよその気持ち。明らかにリビングから変なオラが出てるもん。

「……………いま……………」

でもそれに打ち勝ったお兄さんは扉を開け、おびえた様子だがそう言った。

そして中にはお父さんとお姉さんがテーブルを挟んでソファに座って対面していた。

……気まずい。二人とも無言。お父さんは普段から無言だし、お姉さんもお父さんとかと話さないから……。

無言なだけなら、二人はそうだから気にしないんだけど、空気がやばい。私たちが入ってきたのに何の反応も示さないし。

お父さんは何を考えているかわからない無表情でお姉さんを見つめていて、お姉さんはガツガチに固まってしょんぼりと頂垂れている。

なにもしていない私たちでさえ、なにか悪いことをしたのではないかと思うほど、この場の空気はやばかった。

「あ」

お兄さんが唐突に間抜けな声を出した。どうやらテーブルを見ているようだ。

お兄さんの目線をたどっていくと、テーブルの上には何か置いてあった。……これが灯台もと暗しというやつか。でもこの空気で周囲を観察なんてできないし、仕方ないことだ。

テーブルに置かれていたのは、お姉さんがよく使っている可愛いバッグと――

「……なに……これは……？」

『ほしくず ういっちメルル』という可愛い小学生くらいの女の子が描かれたDVDのケースと、『妹と恋しよっ』という十八禁の表記がなされたDVDだった。

## 幕間 1

唐突だが、俺、高坂京介には妹が二人いる。

高坂桐乃と高坂楓という双子の妹。桐乃が姉で楓が妹だ。二人とも十四歳。近所の中学校に通っている中学生だ。

桐乃はライトブラウンに染めた髪の毛、両耳にはピアス、長く伸ばした爪には艶やかにマニキュアを塗っている。すっぴんでも十分目を惹くだろう端正な顔を、入念なメイクでさらに磨きをかけている。中学生には見えない大人びた雰囲気。背がすらっと高く、しかし出るところはしっかり出ている――。

これで歌でも上手ければ、いかにも女受けしそうなカリスマアイドルのでき上がりだ。

別に兄の俺だから妹を鼻屑目に見ているわけじゃない。俺の妹達とはとにかく垢ぬけたやつらなんだ。

そうなんだ、妹“達”なんだ。

桐乃の双子の妹である楓は、そんな垢ぬけた桐乃より、さらに上を行く垢ぬけたやつなんだ。

前髪を切りそろえ、腰までストレートにした艶やかな黒髪、桐乃と同じく両耳にはピアス、そして同じくマニキュアを塗っている綺麗な爪。俺とそこまで変わらないくらいすらっとした背の高さ。見た目の雰囲気は一言で言うと、日本人形みたいなやつだ。

確かにこれらを見て、桐乃と楓どちらか選べと言われたら、楓を選ぶやつの方が多くなるかもしれない。だが別にこれだけなら、桐乃も楓もそう大差はない。

桐乃と差を決定づけるものがある。それが身体のプロポーションだ。

兄であるお前が何言っちゃってんの？ 馬鹿なの？ とか思っやつもいるかもしれない。だがこれだけは言わせてくれ。「お前本当に十四歳か？」と。

なんつーか、とにかくすげーんだわ。『ボンツ、キュツ、ボンツ』という漫画みてーな身体をしている。

それが背の高さと合わさって高校生、もしくは大学生と言われてもおかしくない。本人はそう思われるのは嫌らしいが。

さらに桐乃は、ティーン誌とやらでモデル活動をやっていたり、陸上部のエースだったり、学力テストで県五位だったりする、普通人間の俺とは大違いのやつだ。

そして楓は、最近になって桐乃と同じ雑誌でモデルを始めたり、運動はからつきしだが、勉強の方は全国模試で一位をとったりと――

……なんつーか、ミュータントみてーな双子だ。……ああ、あと楓は歌がすげー上手かったな……。なんかもう、ミュータントっていうのも生ぬるいかもしんねーな……。

そんな妹たちだが、男連中からは羨ましがられるし、その気持ちもわからなくもないが、正直嬉しくもなんともしねー。

考えてもみるよ？ こんなミュータントみてーな妹達がいる俺は、肩身が狭いったらありやしねーわ。

毎度毎度、お袋や近所のおばさんから桐乃が陸上で賞を獲ったとか、楓がまた模試でトップを獲ったとか聞かされてよ。

まあでも、それらはいづらが頑張ったからこそその結果だ。別に悪い事じゃあない。俺の自尊心が傷つけられるだけだ。

こうやって長々説明したが、俺が言いたいのは他にある。

それは、桐乃の……趣味のことだ。

あの時桐乃の趣味を聞いたとき、聞いた自分の正気を疑ったぜ。別にただの趣味だったらどうもしないのだが……なんつーかとても言いにくいんだが……。

我が妹、桐乃さんは、十八禁ゲーム、いわゆるエロゲーを愛しているのだ。

特に『妹もの』と言われるジャンルが好きで好きでたまらなく、そついったアイテムを本棚の後ろにある隠し収納スペースに蒐集し

ている。

他にも、子供向けアニメのDVDボックスやら、何やら……。

初めて桐乃のコレクションを見せられたときは、目ん玉が飛び出るかと思っただぜ。

やけに妹の楓に甘いなと思っていたが、こういうことだったのか……。本人は「二次元と三次元を混同すんな、バカ」らしいが、いかにも怪しい限りである。

あの日桐乃の趣味を知ってしまった俺は、桐乃のために今日まで様々なことをしてきた。

桐乃の『人生相談』とやらに乗ってやつたり、『裏の友達』作りを手伝うために桐乃のオフ会に一緒に行ってやつたりした。その友達作りの時が俺のアキバ初体験だったんだが、俺はこれを思いださないように記憶の奥底に沈めておこう……。

まあ、そのおかげであいつにも『裏の友達』ができたし、そうしたらとはうまく行っているようだし、なによりだ……。

我ながらなんであんな生意気でム力つく大キレーな妹にこんなことしてきたんだと思う。だが、そのとき何かしてやりたいって思っちまったから仕方ない。

そして、それらの『人生相談』を受けるにあたって特に気をつけたのは、桐乃のもう片方、楓にばれないように行動することだった。楓は頭が良く、回転も早い。そして目ざとい。少しの変化で楓は答えまでたどり着くことがある。一を聞いて十を知る、ということだな。なんとも恐ろしい女だ。

その頭のせいで、何度も楓にからかわれるが、今はどうでもいいや、どうでもよくない！ 主に俺のプライドとかその辺！

家では桐乃とは今までと変わらず話すことなんてなかったのだが

——まあ、『人生相談』のときは話したりもしたが——それでも楓は変化に気づいたらしい。

何度かそのことについて聞かれたこともあるし、後もつけられたりした。

楓にスニーキングスキルが皆無だったことに感謝だな……。基本バレバレだったな。まるでチョッパーを見ている気分だったぜ。

まあそのおかげで楓にばれることはなかった。諦めてくれたのか、聞きに来ることも後をつけてくることもなくなったしな。

つか、桐乃嘘下手すぎだろ。何度俺が疑問を楓に持たぬように説得したことが……。

だが、そのうち楓にはばれるだろう。あいつのことだ、俺たちが出したボロを掴んで核心をついてくるかもしれない。

桐乃にもそのことは言っている。桐乃もそのうち楓には打ち明けようとは思ってはいるようだ。今は勇気が無くて言えないらしいが、俺にとっちゃあ、楓に桐乃の趣味のことを言っても、「あ、そっすか」で終わると思うが。お袋と一緒に俺の部屋からエロ本を探して遊んだりするやつだ、このくらい余裕で許容できるだろう。

……つか、お袋は別にいいが、楓もエロ本とか見ても普通なのってどうなんだ？ 見つかった物の中にはなかなかハードな物もあったが……。

割とあいつは大物になりそうな気がする。今でも十分大物だがな……。

それに楓は俺の好きなジャンルのエロ本が見つかったときは、それに出ていたやつの格好を真似て俺をからかってくる。真似ると言っても、眼鏡をかけてくるとか、さりげなくセリフを言ってくるとかだけだな。だけどあれはからかいとか度が超えているんだと思うんだ……。

それにあいつは気付いていないかもしれないが、相当恥ずかしい事なんじゃないかと思う。だっていくら小物だけでも、エロ本の格好してんだぜ？ やばいだろ。

だけど俺はそのことを楓には言っちゃらない。いつか仕返ししてやるために温存しておくんだ……！ 情けねーとは思うが、言葉では勝てねーからな！ フハハハハハハ！

……なんとも情けねー兄だなおい……。

桐乃は無言雑言半端ねーわ、楓にはからかわれまくるわ……。俺  
ってなんだろうな……。なにかが目から溢れてきたぜ……！

それに今更だが、なんで俺が桐乃のエロゲーをやらなければなら  
ねーんだよ！！ 本当に今更だな！！

なんで妹持ちの俺が『おにいちゃん……いいよ？』なんて仮想の  
妹に迫られなきゃなんねーんだよ！！

そのたびに俺は言いようのない罪悪感を感じる。精神的ダメージ  
は半端ないものだぜこれは……。

このエロゲーをプレイする時はいつも命懸けなんだぜ？ すごい  
だろ俺、褒めてくれよ。

別にやらなきゃいい話なんだが、やらなきゃ桐乃に毒を吐かれる、  
それはもう機関銃のごとく。あいつの毒はすげーぞ、蜂の巣にされ  
たね。

俺は怖いからエロゲーに逃げたね。負け犬とも何とでも言え、だ  
がその前に桐乃の毒舌を受けてからな！

エロゲーのプレイを始める時もそうだが、プレイしている時も周  
りに気を配らなければならない。

俺の部屋は鍵が掛らないんだ。あとはわかるな？ そう、ノック  
をしないで入ってこられると相当困るわけだ。主に俺の社会的生存  
の部分で。

その回数が一番多いのが楓だ。

あいつは狙いすましたかのように俺の部屋にやってくる。ここで  
は書けないような諸々なことを俺がしている時などだ。

あいつは絶対に楽しんでる。男の敵だあの女は。

そしてこれはエロゲーをプレイしているときにも適用される。

俺が桐乃に借りたPCでエロゲーをプレイしているときに何かと  
理由をつけて俺の部屋に侵入してくる。なんで絶好のタイミングで  
来れるのかね？ 理由はわかってるが……。一々仮想の妹に反応  
する俺がいけないんだよな。

でも仕方ねーじゃねえか。あんなのを平常心でやれっていうのが

土台無理な話だ。無理矢理テンションあげなきゃやってらんねーわ！

楓には俺のプライバシーというものが存在してないらしいから、なんも悪びれずこれらの行為を行っている。一度きつく言ってやらねーとな……口で勝ったことはないけどな！

……ふう、話が大きく逸れたが、桐乃は俺に『人生相談』をしてくる前までは、誰にもこのことを言えず一人でアニメのDVDやらフィギュアやらエロゲーやらを集めていたわけだ。

そこで俺の奮闘によって桐乃と同じ趣味を持つ『裏の友達』ができ、自分の趣味について好きなだけ話せるようになった。

……よかったんじゃないの？ 何も気にせず趣味について話せる相手が出来たってことはよ。その時の桐乃の顔は、生き生きしていてなかなか可愛いじゃねえかよ。

だから俺は気を抜いていたのかもしれない。

これで大キレーな桐乃との『人生相談』も終わるだろうと……。あとは自分で全部できるだろうと……甘く見ていたぜあいつのことを。

今、俺の目の前にある光景は一番あつてはならない光景だった。

親父と桐乃がテーブルを挟んで向かい合っている。とても緊迫した雰囲気だ。

親父は何を考えているかわからない無表情の顔で桐乃を見つめ、桐乃は俯いている。

そしてテーブルの上には警察官の親父ふうに言つと証拠品が置いてある。

長年警察官をやっている親父が放つ威圧感は半端なもんじゃない。無条件に土下座して謝ってしまうほどだ。それがいまこの空間で起きている。

そしてこの空間を作り出した証拠品というのは

『ほしくず ういっちメルル』のDVDケースに入っている、

『妹と恋しよっ』（十八禁）だった。

パカッとしつかりとオープン状態。問答無用で有罪である。

ギルティ

俺はこれを見て理解したよ。感想を言おう。

バツツツカじゃねえええの！？

バカッ………なんというバカ………バカだ………！もはや情けなさ過ぎて泣けてきたわ！

あれほど親父にだけはばれると言ったのによ！？

油断して、またDVD落とすんじゃねーぞって——言わんこつちやねえよ！

かぁーっ！俺にばれたときと同じ轍を踏みやがって！どーしてあんだけ高スペックなくせに、そういうとこだけ抜けてっかなあ！迂闊にもほどがあるだろ……。

「……なに………これ………」

あーあ！楓にもばれちまってよ！最悪だよおい！

どうすんだよこの状況……。俺でも限界ってものがあるぞ……。

俺はそんなことを表情に出さないようにするしかなかった。

## 幕間1（後書き）

私は黒猫派です。

黒猫に毒を吐かれない（切実）。

## 5 話（前書き）

雲行きが怪しい……？

文の書き方が変わっているかもしれません。

いろいろ練習したのでご理解のほどお願いします。

## 5話

「……なに……これは……？」

家に帰ってきて私が発した第一声は疑問の言葉だった。

おそらくアニメなのだろうと思われるDVDケースと、アニメかゲームかわからないけれど十八禁という私たちには見せられないようなものが中に入っているDVD。

そんなものがテーブルに置かれていたら、こう言葉を発してしまうのも無理はないと思う。

これらは我が家に似つかわしくないものだ。

お父さんは悪影響を及ぼすからと言って、アニメのDVDやゲームなんてものは買ってはくれない。

それにお父さんは機械音痴だからDVDプレイヤーなんてものもこの家には無い。

そんなものが我が家にあるのだ。私の頭は少しかパニックを起こしている。どうやら私は予想外の事態に弱いようだ。

こんな物が持てるとしたら——お父さんは除外として、お母さんはまずアニメなんて見ないし、ゲームもしないから除外。

残るは私とお兄さんとお姉さん。

私は漫画も読むし、アニメも多少見るけれど、こんなものは持っていない。よって除外。

一番怪しいのはお兄さんだ。でも、私とお母さんの捜査網を潜り抜けてこんな物を隠し通せるわけが無い。実際、お兄さんの秘蔵のコレクションは私とお母さんが暴きだしたし。

それに今のお兄さんの顔を見ればこれらがお兄さんの所有物でないことは明らか。

残るは……お姉さんなんだけれど。

まあ、現実逃避をせず、この光景を見ればこれらが誰の物なのかすぐわかるんだだけでも……。

おそらくこれらはお姉さんの物なのだろう。お姉さんはこれらが  
お父さんにばれて、今こうやって向かい合っている。

でも信じられない。お姉さんがこんなものを持っているなんて  
お姉さんは優しくて、明るくて、友達もたくさんいて、可愛くて  
かつこよくて――。

そんなお姉さんがクラスの気持ち悪い男子と同じような物を持っ  
ているなんて……信じられない……！

「京介、楓、ちよつとちよつと……」

扉の前で固まっていた私たちに、廊下からお母さんが小声で話し  
かけてきた。

振り返ると、袖を掴んで引つ張られた。

「あんたたちは部屋に戻ってなさい」

「あ、ああ……」

お母さんは私たちを引つ張りだすと、リビングの扉をそおつと閉  
じた。

「ね、ねえ、お母さん。何が……あつたの？」

私は震える声で、お母さんにそう聞いた。

多分私の予想通りだと思うけれど、そう聞かずにはいられなかつ  
た。

「それがね――」

お母さんの口からは、私の予想通りの答えが返ってきた。

お姉さんはお父さんの前でのDVDケースを落としてしまった  
らしい。そして中身を見られたのだという。

詳しく聞きたかったけれど、お母さんは直接見たわけではないの  
で、そこまでは知らないらしい。

やっぱりお姉さんの物なのか……。

こうやって聞かされてもまだ信じられない。……いや、信じたく  
ない。

別にお兄さんが持っていたっていうなら、笑って終われた。お兄  
さんだって男の人だし、そう言うのも仕方ないかもしれない。でも

極力私たちに見えないようにしてほしいけれど……。探す私もあれだけだね。

でもお姉さんって言うのは話が別だ。アニメとかなら、いくら気持ち悪い男子が見ているものでも、ギリギリ許容できるかもしれない。そういう好き好きは人の勝手だし。

でも、十八禁の表記がされたあのDVDは話が別だ。まだあれはどういうものかわからないけれど、お姉さんが持っていてはいけないものなのわかる。

あれはお姉さんには必要ないものだ。

「——あんた……もしかして知ってたの？」

「あ？ 何が？」

「……だから。……その……あれよ……ああいうの、桐乃が持っているって、こと」

どうやら、私が気付かないうちに話が進んでいたようだ。

お母さんの言う通り、お兄さんはこのことについて知っていたのだろうか？

もし、知っていたならば、今まで疑問に思っていたことも辻褄が合う。

おそらく最近になってお兄さんは、お姉さんがこういう物を持っていることを知って、一緒に隠していた——となれば、今まで話もしなかったお兄さんとお姉さんが話すようになったり、一緒に出かけるようになったりと、最近の不自然な挙動も納得がいく。

私の目線にも気が付いたのか、お兄さんは良く分からないが少し笑みを浮かべてこう言った。

「……まあな、知ってたよ」

やっぱり知ってたのか。お兄さんとお姉さんが仲良くなった原因はこういうことだったのか。

……なんだか複雑な気持ちだ。こんなもので仲良くなったのかと思つと……。

「……やっぱり。……楓は？」

そつだよ。私も知ってるか気になるよね。

「……ううん。私は知らない。さっき初めて知った」

「……そつ。……京介……まさか……あんたの影響じゃないでしょ  
うね？」

そつか。そういうこともあったか。

お姉さんはお兄さんに影響を受けて、あんなもの買ったりして――  
お姉さんはモデルをやっているからお兄さんと違ってお金がある  
から買えるし……。

それを隠すためにお兄さんはああやってたのかも。

「違えよ。良く考えてから言ってくれお袋。そもそも俺はパソコン  
持ってねえし、俺の部屋にブツを隠せるような場所なんてないの、  
知ってるだろ」

そう言われればそつだ。お兄さんの部屋には隠せる場所なんてな  
いなんてわかつていたのに熱くなっていたようだ。

私は知らず知らずのうちにきつくなっていた目を指で解した。  
冷静になろう。

「そついえば、そつね……ま、いいわ。どのみちアレは桐乃のなん  
だもんね……はあ」

お母さんのこの反応も、あのお姉さんだからなのだろう。

お母さんもこれがお兄さんだったら、私と同じように笑っていた  
だろう。それはもう、お腹が壊れるくらい。

「お父さんがあんなに怒ってるのって、久しぶりよね。このままじ  
や、しばらくおさまりそうにないわ。どうしたものかしらねえ……」

お父さんはやたら滅多ら怒る人ではない。悪い事をしたら悪い、  
と、善悪の区別を幼いころにきっちりと学ばされたので、よほどの  
ことがない限り今のようにはならない。

なにかあっても、注意などで終わリだ。その注意だけでも私たち  
的には恐ろしいんだけど。

だからお母さんの言っている通り、今のお父さんみたいに怒るっ  
ていうのは久しぶりだ。

お母さんはそう言っただけで少しの間思案していたが、「あ、そうだ」と何かを思いついたようだ。

「あんたたち、あたしちょっと出かけてくるから、あんたたちは部屋に戻っていなさいね」

「……何？　出かけるの？」

お母さんが出かけると言いだしたので、お兄さんは不安げにそう聞いた。

お兄さんの気持ちはすぐわかる。

ここでお母さんがいなくなると、RPG的にはパーティーに勇者がいなくなるのと同義だ。そして速効「おお、しんでしまうとはなさけない」となるわけだ。

実際居なくなってもどうなることでもないんだけど、気持ちの問題というか、居づらくなるというか、そんな感じ。わかるよね？

「ここにいたってしょうがないでしょ。お父さんの好きなお酒買ってくる。あの人さっぱり酔わないけれど、どばどば吞ませればある程度大人しくなるんだからさ」

お母さんの言う通りここにいたってしょうがない。

そしてお母さんの作戦はないよりましだ。ある程度お酒とか他のことに思考を割けられれば、お父さんも落ち着くだろう。

そして本当にお父さんは酔わない。付き合いとかどうしているんだろう？　おそらくそういう付き合いって酔ってなんぼだと思っただけれども。

あ、その前にお父さんはそういうのに行かないか。いつも七時に帰ってくるし。

それにしても酔わないって羨ましい。

私は去年のお正月にこっそりお父さんのお酒を呑んだけれど、すぐ酔った。私はお酒が絶望的に弱いつてことをそのとき知った。

そして私は将来お酒の付き合いというものに不利だと思い知らされた……悲しい。

それで顔赤くなってお父さんにばれて、怒られたし……。

……あれ？ 今日をカウントして、前回お父さんに怒られたのって……私？

そしたら久しぶりっていうか、結構間が空いてるなあ。

お母さんがお酒を買いに行つて、今私たちがいる廊下はとても静かになった。

部屋に戻るよう言われたけれど、なんかそういう気持ちにもなれない。

お兄さんも私と同じ気持ちのようで、ここにどまっている。

「……ふう……どうなることやら」

お兄さんがどういう気持ちでそつつぶやいたのか知らないけれど、本当にこのあとどうなるんだろう……。

お母さんが出て行つてからずっと無言。気軽に話すなんて気持ちにもなれなかった。

それから十分くらい経ったくらいだろうか。お姉さんがドアを蹴破る勢いで飛び出してきた。

お姉さんの顔は怒りで真っ赤に染まり、泣いたのだろう、目が赤く腫れていた。

……きゅ、急にどうしたんだ……？

「……き、桐乃……？」

「……お、お姉さん……？」

お兄さんと声が重なった。

「……どいてよ………どけ！」

お姉さんはものすごい顔で私たちを睨んで、突き飛ばすように押しのけてきた。いろんな感情が入り乱れているのだろう。今のお姉さんはどうしたらいいのかわからない、というような様子をしている。

お姉さんにこういうきつい言葉は言われなかった私はすこしばっくりしてしまった。

お姉さんはハアハアと息を荒げながら玄関へと向かい、乱雑な手つきでブーツを履いた。

「お、おい桐乃……どこ行くんだよ？」

「うるさい！ あたしの勝手でしょ！」

「そうだよお姉さん。どこ行くの？」

「楓も黙ってて！」

今のお姉さんには余裕が無いのだろう。普段私に見せない顔と声でお兄さんと私にきつくあたってくる。

お姉さんにそう言われてちよつとショックだったのは内緒だ。

「ちよ、待ってつて——」

外に出て行こうとするお姉さんを、お兄さんは追いかけようとした——けれど、お姉さんはそれを狙い澄ましたかのように勢いよく扉を閉めて行った。

「ぶへっ！？」と思いつきり顔面を挟んで「あうぐ……っのッ……！？」と呻くお兄さん。

「……とても痛そうだ。」

それでもお兄さんは痛みを抑えて外に出て——帰ってきた。

「……お兄さん大丈夫？　すぐく嫌な音がしたけど」

ゴキンッ！　と本当に嫌な音がしたんだ。それはもう目を背けてしまつくらいに……。

「……ああ、大丈夫だ。いつつ……」

大丈夫だと言っておきながら、私の前で痛そうにする。……めんどくさいお兄さんだ。

「そう。あと……お姉さんは？」

「……俺が出た時にはもういなかった」

どっかに走って行っちゃったんだろう。周りが見えなくなつて事故とか事件に巻き込まれなければいいけれど……。

あと物にあたつて他人の物とか壊してこなければいいけれど——さすがにそれはないか。

恐る恐るリビングに入ると、お父さんが掃除機をかけていた。フ

ローリングの片隅にクリスタルの灰皿が転がっていて、タバコが周りに散らばっている。見る限り、これがひっくり返ってしまったのだろう。

お父さんかお姉さんが怒って投げてしまったのかな……？

いったいリビングでどんなやり取りが行われていたのだろう……。恐ろしい。

「……………」

お父さんは黙々と掃除機をかけている。静まり返ったりリビングに掃除機の音だけが響く。

なんとも表現しづらいイヤな空気がこのリビングに充満していた。

やがてお父さんが掃除機をかけおわり、私たちに低く重い声で。こつ呟いた。

「京介、楓、ふたりともそこに座りなさい」

「あ、ああ……」

「うん……」

これからお父さんは私たちに、お姉さんの件について尋問をするのだろう。

もしかしたら、今のお父さんの苛立ち具合によっては怒られるかもしれない。

私は、テーブルの上に目を向けた。

そこには例のDVDケースとDVDがある。そしてその脇には一枚の紙切れがあるのを見つけた。

「こりゃあ……」

お兄さんが何やら思案しながら呟いているけれど、私はこの紙切れに書かれている内容が半分も理解できない。

その紙切れにはDVDケースに描かれているキャラクターと同じキャラクターが大きく描かれている。その絵のすぐ下にこのような記述があった。

『星くず ういっちメルル2（初回限定版）ついに入荷！ 前作の

パッケージを店頭までお持ちくださったお客様全員に、人気声優・星野くらのサイン入りポストカードをプレゼント!」

この記述を見る限り、星野くららっていう声優さんのサイン入りポストカードを貰いたければ、前作（おそらく目の前にあるDVDケース）をこの紙切れに書かれている指定の場所へ持ってこいというものなのだろう。

他にもこの紙切れにはごちゃごちゃ書かれているけれど、私が理解できるのはこの部分だけだった。

私がそう考えていると、掃除機を片付けてきたお父さんが対面のソファに座った。

それだけの行動なのに、私たちは背筋をピンと伸ばし、姿勢を正した。

そのときの私は、なにもしていないのに、有罪を待つ罪人のような気持ちだった。

「おまえたち、知っていたのか？」

そのお父さんの言葉は、嘘は言わせないぞ、と暗に言っていた。

「あ、ああ……」

「知らなかったよ」

そもそもお父さんは警察官なので、こういう尋問は得意分野なのだ。私たちに嘘が吐けるわけじゃないじゃないか……。

というか、そんなの自分の子供に使わないで欲しいけれどね……。

「そうか。楓、お前は部屋に戻っていなさい」

「そんな、私も居ていいでしょ？」

こんな状況を見せられて、部屋に戻れなんてお父さんはなんて酷なことを言うんだ。あの光景を見て、ある程度状況はわかったけれど、すべてわかったわけではないのだ。

お姉さんに不信感を抱いたままの私には、この仕打ちは生殺しに近かった。

「楓」

「うつ……、わ、わかった……」

といつても、お父さんの眼光に敵う私ではない。正直に言つと、泣きそうになつた。

だから私は、お父さんに怒られぬよう、おずおずと部屋に戻つた。

## 6話（前書き）

描写を細かくしようと書いていたら全然話が進まねえ！！  
そして書いててよくわからなくなってきた！！  
どうしよう！

## 6話

部屋の扉を開けると、アロマの香りが私の鼻腔をくすぐった。

いつもは私をリラックスさせてくれるその香りも、今は邪魔にしか思えなかった。ピンク色の可愛いカーペットも、ベッドの上にある可愛いぬいぐるみもなにもかも――。

もどかしい。物にあたりたい気分だ。

でも、そんなことをしても私に益はない。そんな冷静な判断をしてしまう私のそんなところも、もどかしさを募らせた。

「……うう」

だから私は、部屋の明かりも点けずにベットに飛び込んで抱き枕を抱きしめることにした。それだけではこの気持ちを鎮めることはできないけれど、なにもしないよりはマシだ。

リビングでは緊迫しっぱなしで、あまり冷静に物事を考えることはできなかった。

だから今こうやって、嫌でも冷静になれるようになると様々なことを思い浮かべる。

なんでお姉さんはあんなものを持っていたのだろう。アニメやゲームはともかく、十八禁のものなんて……。

私が見る限りのお姉さんからは想像できない。

陸上ではエースで県でも記録を持つ、私にはできない所業。それでいて勉強面でも県で上位に入る。まさしく文武両道を体現しているお姉さん。

妹である私をとても可愛がってくれる。

私だって勉強は全国一位だけれど、運動なんてできない。最近になったモデルを始めたけれど、そんなものお姉さんもやっている。

お姉さんは私の尊敬する、自慢の姉なのだ。そんなお姉さんが――。

なにが悲しいかと言われても、なにかはわからない。でも悲しい。

私は抱き枕に顔を埋めて、考えるのをやめた。

どのくらい時間が経っただろうか、廊下がやけに騒がしいことに気が付いた。

近くにある時計に目を向けると、十分くらいしか経っていなかった。

……なんだろう？

「いででででっ!？」

突然お兄さんの悲鳴が聞こえてきた。ちよ、ちよっといきなりどっしたんだ!？

「何!？ どうしたの!？」

そう言っただけで廊下へ出ると、お父さんとお兄さんが、お姉さんの部屋の前で何やら揉めているのを見つけた。

お兄さんは、お父さんの進路を遮るように立っている。それをお父さんは、退かせようとしてお兄さんの手首を掴んで締め上げているようだ。

お兄さんが悲鳴をあげるのも無理はない。あれはものすごく痛そうだ……。

「ちよ、ちよっといきなりどっしたの!？ お姉さんの部屋の前でさ!」

私がお父さんにそう聞くと、私に意識を向けた。それでもお兄さんの手首を締め上げたままなんだけれど……。

「楓か。ただ桐乃の部屋を調べるだけだ。他にもあるかもしれないからな」

お父さんは強行手段を取ろうとしているのか。それをお兄さんは止めようとしている。

でも勝手に部屋に入るのはさすがにダメじゃないかな……？

「だから親父よ! 何度も言ってるけどよ、どんな事情があろうと、本人の許可も取らずに部屋を家捜しすんのは、まずいだろ……。た

とえ親でも、やっていいことと、悪いことがある。……だから、どかねえよ」

お兄さんの言う通りだ。私だっていますぐお姉さんの部屋に入つて、そんな悪影響を及ぼすものは排除したい。

でも無理矢理にやっては解決しない。ちゃんと話を聞いてから判断を下すべきだと思う。

それになにより、いくら親でもそんなことをすればプライバシーの侵害だ。誰だって勝手に部屋に入られるのは嫌だと思う。

「そうだよお父さん。勝手に入るのはいけないことだと思う。お姉さんが帰つて来てからでもいいんじゃないかな」

私もお兄さんに続いてそう言つと、お父さんは聞き入れてくれたのか、お兄さんの手首を掴んでいた手を離れた。

お兄さんは私を神でも見るかのような目で見てきた。……ああ、結構限界に近かつたのか、手首真つ赤つかだしね……。

「……親父、ここは俺に任せてくれ……俺が、あいつと話してみるから。せめて、それまでは待つてやつてくれよ。自分がいないときに、大切にしてたもんが勝手に捨てられちまつてるなんて——かわいそうじゃねえか。な？ 頼むよ……！」

こんなにならぬお兄さんを見るなんていつ以来だろうか。いつもはめんどくさがりで本気になることのないお兄さんが——今こうやつて、お父さんにビビりながらも必死に訴えている。

そしてお兄さんが必死になつてゐる相手というのがお姉さんというのは、初めてかもしれない。

「おまえ……」

お父さんも私と同じ気持ちなのだろう。いぶかるような目をお兄さんに向けている。

「……………」

お父さんとお兄さんは無言で睨み合つている。私がそれに首を突っ込むなんて真似はできない。そんなことをしたら私が死ぬ。

しばし経つたあと、お父さんは一つ深いため息を吐くところ言つ

た。

「——いいだろう。俺は、桐乃の部屋には入らん」

お父さんは嘘は言わない人だ。言ったことはちゃんと守る人だ。

「そのかわり、京介、お前が責任を持って捨てておけ。全部一つ残らずだ。わかったな？」

「——わかった。桐乃と話して……必ず、そうする」

お父さんの言葉を聞くと、お兄さんは深い安堵のため息を吐いた。

そのあとお兄さんは、ちょうど返ってきたお母さんと私に後を任せると、お姉さんを探すべく出かけて行った。……後を任されたこっちはこっちで大変なだけでも。お兄さんには後で見返りを要求しなければ。

「……………」

リビングに戻ったお父さんはお母さんにお酒を貰うやいなや、ドカンとソファに座り、おちよこで休みなく呑み始めた。相当イライラしているのがわかる。対面に座っている私にとっては地獄でしかない。

「ほらお父さん、おつまみできたわよ。お酒もまだまだあるからね」

お母さんは甲斐甲斐しくお父さんのおつまみを作ったりお酒を追加したりしている。それをお父さんは無言で受け取って口に運んでいる。今の私たちは、王の機嫌を必死にとる臣下のようなものだ。

「わ、私もお母さんのお手伝いしようかなあ」

お父さんの正面に座っている私には、こんな圧力耐え切れない。私はそう言っ、早足で台所に避難した。すぐに離れたいがために声が裏返ってしまった……。

台所に避難した私はお母さんに「しっかりしなさいよ」と言われただけで、無理だよそんなの……。お父さんは魔王で私はスライムなんだよ？ 仲間にも入れてもらえないよ。

お母さんは夕食の準備もしているから私も手伝わせてもらおうこと

にした。私だって料理くらいできる。得意料理は卵焼きです。あと、スクランブルエッグ。すごいでしょ。

「お母さん……お姉さんのあれ……どう思う？」

今は三枚目の卵焼きを作っている最中、私はお母さんがお姉さんのあれをどう思っているか疑問になって聞いてみた。多分今日の夕食は卵料理だね。

「桐乃の、ねえ……。あの子の趣味にどうこう言つつもりじゃないけど……やっぱり十八禁のあれは……ダメよねえ……。アニメとかなら持ってもいいんじゃないかと思うけど……。京介なら問題なかったんだけどね……はあ……」

寛容なお母さんでもやっぱりあれは容認できないよね……。お母さんもすごく落ち込んでいる様子だ。自慢の娘が——と思うところなるのも無理はない。

だってもう四枚目の卵焼きを作っている私に何も言ってこないし。お母さんも心ここにあらずといった感じで、刻みネギが山盛りですごいことになっている。今日の夕食はネギと卵に決定だね。今日は私作の卵料理が火を吹くよ！

でもさすがに五枚目の卵焼きは作らせてもらえなかった。意識を取り戻したお母さんは、もう四枚も作っていることに驚いたけれど、そこは主婦、卵料理に合うものを作ってくれた。感動したね、おそろく織田裕二も「地球に生まれて、よかったあー！」と何やら叫んで感動を表してくれるだろう。

「楓、こっちへ来なさい」

リビングにいるお父さんの言葉で、感動も織田裕二もどこへやら吹っ飛んでしまった。

「う、ううーん」

震える声で返事をしながらお母さんにヘルプの目線を送ると、「がんばってね」と笑顔で送り出された。この……ッ、裏切り者め……！

もうあそこには行きたくない。あそこに行くなんてメラで倒され

る私にとっては自殺に等しい行為だよ。私にはリビングが悪魔城に見えた。

「……………」

若干涙目になりながらリビングに戻り、お父さんの対面に座った。けれど、お父さんはお酒を呑みながら無言で私を見つめるだけ。なにこれ……？ 私なんか悪いことでもしたのかな……？ ま、まさかお兄さんと一緒になってお姉さんの部屋に入るのを阻止したから、それで？ お兄さん恨むぞ！

「なんでしよう、お父さん？」

自然と敬語になってしまふ私。私は、怒られるときは敬語になつてしまふのだ。主な理由として、敬語の方が誠意があるっぽいからはやく許してもらえらるだろう、という私の打算だ。そんなもの、警察官であるお父さんに通用しないんだけど……まあ気分だ。

「……お前は、桐乃の持っていた物についてどう思う？」

と、怒られるわけでもなく、私がお母さんに質問したことと同じことを質問してきた。

「……お父さんは、どう思う？」

質問に質問で返すという、失礼極まりないことだけれど、どうしても聞きたかった。お父さんの性格から、「悪影響だからいらん」という返答が返ってくるのは見えているけれど。

「俺か。俺は、当然すべて捨てるべきだと思う。あれは悪影響しか与えん。ゲームをやると頭が悪くなる。犯罪者の家から、いかかわしい漫画やゲームが見つかったと、ニュースでやっているだろう？ すべてを鵜呑みにするわけではないがな」

まあそうだろうね。お父さんにとってはああいったものは害悪でしかない。

私はお父さんにゲームを買ってほしいと言っては拒否されているけれど、納得はしている。

実際モデルを始めるようになって自由に使えるお金ができるようになって、ゲームは買っていない。お父さんの言いたいこと――

私たちが道を外さず、立派に育ってほしいという気持ちがとても伝わってくるから。

だからお父さんは、お姉さんがそういうものを持っていることに對してとても怒っているのだろう。

自分がとても可愛がつて育ててきた娘が、道を外してしまうのではないか、ダメになつてしまふのではないか。

そういうお父さんのお姉さんを愛する気持ちがこうやつて——すこし厳しすぎるかもしれないけれど——表れている。

「お前はどうか？」

「確かにああいうものは害があると思う。だからお父さんの言いたいこともわかる。けれど、別に持つてもいいんじゃないかなとも思う。きつとお姉さんは、最近になつて集め始めたわけじゃなくて前から集めてたと思う。けれど、部活も勉強も悪くなつたわけじゃないでしょ？ お姉さんだつて善悪の区別くらいできるし……まあ、十八禁のあれはどうかと思うけれど」

お父さんのそういう気持ちはわかる。けれど、それとお姉さんの気持ちは別なんだ。

それをわかつてほしい。私だつてお姉さんにああいうものは持つてほしくないんだ。

「お前の言いたいことはわかつた。そろそろ京介も歸つてくるだろう。お前は母さんの手伝いでもしてやれ」

やつと解放されるのか……。顔に表れないようにしていたけれど、服の中は冷や汗でやばいことになっている。

今すぐ台所へダッシュしたいけれど、最後まで気を抜かないのが私、高坂楓だ。

だから私は優雅に台所へと歩いて行つた。

台所へ戻るとお母さんに「がんばつたね」と褒められた。けれど、全然嬉しくない！ お母さんが助けてくれればこんなに緊張しなくてよかつたのに！

そして私の傑作の卵焼きが別の料理に化けていた。化けていたと

「いつか、卵焼きの面影がないのですが……。こんなのでは私が作ったと言っても信じてもらえないじゃないか……」。

「そうやって私の自信作が別のものへと変わっていく様子に絶望しながらも夕食の準備をしていると、玄関の扉が開く音がした。お兄さんだろう。」

「お母さん、玄関行ってくるね」

「お母さんにそう言っ、私はお兄さんを迎えるべく玄関へと向かった。」

## 6話（後書き）

一話5000文字を目指して書いています。

## 7話（前書き）

次話で一巻の部分は終わるかと思います。  
今回は少し短いです。

## 7話

帰ってきたお兄さんの顔は、何やら決心した顔だった。こんな顔も見たこともない。

今日は今までにないお兄さんのバーゲンセールだね。

「お帰り。お姉さんには会えた？」

「ああ……まあな。それでお袋呼んでくれねえか？　頼みたいことあんだよ」

お母さんに何か頼むつてことは——お兄さんは、お父さんに言われた通りにするつもりはないらしい。

そのためにお父さんと直接対決するつもりなのかな……。お姉さんのことが嫌いなあのお兄さんが、お姉さんの為にこんなことするなんてね——いいじゃん、とつても。

応援したくなる。この際問題は置いておいて、純粹にお父さんに認めさせたいと思う。

そのあと事はその時考えればいい。

「そう……私も手伝うよ」

「ああ、サンキューな」

ある程度夕食の準備を終わらせたお母さん呼びだして、今はお父さんとお母さんが使っている部屋にいる。

お母さんも快く手伝ってくれるようだ。お母さんはお姉さんの趣味についてすべてを納得したわけではないけれど、基本お姉さんに任せるといふ結論をだしたようだ。よかったね。

「あいつがこれまで獲ってきたトロフィーとか賞状を集めてくんねえか？　あと、あいつの成績表とアルバムも」

お兄さんが部屋から持ってきたバッグに入れてくれとのことだ。何に使うかはよくわからないけれど。

……それにしても、こうやって集めてみると……まあ、たくさんあること。市大会優勝やら県大会上位入賞やら……。

しかもとても大きいトロフィーなんかたくさんあるし、やつぱりお姉さんはすごいなあ。

「こ、こりゃあありすぎじゃねえの？　つつかなんだよこの成績表

……俺に喧嘩売ってんのか」

「あんたがやらないだけよ。というかあんたが喧嘩買っても勝てないでしょ？　それに楓は体育以外評定五だったかしら？」

お兄さんはお姉さんのすごさを甘く見ていたようだ。まあ、仲悪かったし仕方ないかもね。これを見てもう少し見習ってほしいものだ。

そしてお母さんの言う通り、私は体育以外なら評定は五なんだ。体育はいくら頑張っても四にしかない。実技試験なんて滅びてしまえ……特に冬の持久走。

その分お姉さんは毎回体育の評定は五だし、羨ましい。

「お袋……確かに勝てねえが、言っていることと悪いことってのがあんだ。主に俺の尊厳的な意味でな……」

「あら、あんたに尊厳なんてあったのね。Hな本とか堂々と置いてあるからそんなもの捨てたのかと思ってたわ」

「お袋といい楓といい桐乃といい、俺の家には敵しかいねえのかよ……」

そうは言っているけれど、お兄さんはお姉さんのトロフィーとか見るたびに嬉しそうに笑っている。なんだか見ているこっちが恥ずかしくなってくる。

ある程度バッグに入れ終わった後、お兄さんは言った。

「あとこれが一番大事なんだが、お袋、親父って桐乃がモデルで出たところをスクラップして集めてんだよな？　それ……貸してくれるか？」

へえ……お父さんってそんなことしているんだ。私もあるのかな？

「まああるけど……よく知ってたわね……」

「ああ、確証はなかったけどな……」

お母さんはお父さんの机から一冊の薄い本を取り出して「はい、これがそう」とお兄さんに渡した。

そこにはデビュ―してから最近までの可愛い服を着たお姉さんが、堂々とポーズをとっている写真が貼ってあった。それが何十ページも渡つて。これは……すごいな。

「私のもあるお母さん？」

「あるわよ——はいこれ」

私は最近始めたばかりなのであまりページ数はないけれど、私が初めて撮った、あやせとの写真もあった。

嬉しい……。いつも感心しないとかお父さんは言っているけれど、陰ではこうやって集めてくれて——泣いちゃってもいいかな。

お父さんは素直じゃないから、このことを言っても「娘の仕事を確認するために——」とか言いそうだけれども。

——これからもつと頑張らなきゃな。

「……？ お兄さんこれ……」

お兄さんのポケットから何か落ちたの見た私はそれを拾った。それは写真だった。楽しそうに笑うお姉さんと、ゴスロリなのかわからないけれど、そんなようなを着た女の子、そして私より背が高そうで変なメガネをかけた女の人が映っている写真。

「これか……。これはな、桐乃のオタク友達なんだわ。……ほら、楽しそうに笑ってるだろ？ こっちの桐乃も、モデルでバツチリキメてる桐乃も——どっちも桐乃なんだよ。だからな、俺は親父に認めさせたいんだわ。ガラじゃねえけどな」

私の自慢のお姉さんも、趣味に勤しむお姉さんも、両方お姉さんか……。

そう言うお兄さんの顔は真剣そのものだった。……よかったねお姉さん。こうやって身体張ってくれるお兄さんがいて。

「ふゝん、そうなんだ……頑張つてね」

「おうサンキュー。んじゃ行ってくるわ。終わるまでリビング入ってこないでくれよ」

そういつとお兄さんは戦場へと歩いて行った。打倒、魔王だ。

お兄さんがリビングでお父さんと戦うので、私とお母さんはその間入れない。だから私たちはお母さんたちの部屋で待機中だ。

テレビを見ることができないから、退屈だ。部屋に戻って勉強でもしようかな。

「それにしても……いつのまにあの子たちはあんなに仲良くなったのかねえ」

「だねえ。正直私もびつくりしたよ」

二人とも無言でテレビを見ていたところ、お母さんが感慨深そうに呟いた。

仲良くはなったと思っていたけれどあそこまでとはね。普通の兄妹でもあそこまでやるところはないよ。

「これでもう少し京介が勉強できたら文句言わないのにねえ」

「ほんとほんと」

でも優しいことだけが取り柄みたいなお兄さんだし、ちょうどいいのかもしれない。お母さんも同じようなこと言ってるし。

そうやって私たちはボーっとしていたら、リビングから「親父！ふざけんじゃねえよ！？」とお兄さんが怒鳴っているのが聞こえた。

「京介、頑張ってるじゃない」

「そうだね」

お父さんに認めさせようと、殴られてもおかしくないようなことも言っている。私ならあんなこと口が裂けても言えない。

今のお兄さん、とってもかっこいいよ。

そのあとも何やらお兄さんが怒鳴っている。私たちはそれをBGMにテレビを見ている。

他人行儀にも見えるけれど、ちゃんと心の中では応援しているよ。そうやって幾ばくか時間が経った後、聞き捨てならないものがリ



嫌だなあ。いくらお姉さんの為とはいえ、家族にあんなこと言うなんてどんな精神しているんだろうね。みんないるのに。

リビングに行ってみると、お兄さんが真っ白に燃え尽きていた。真っ白なのに顔は鼻血で真っ赤だ。

一目でわかる。お父さんにぶつ飛ばされたんだね。おめでとうお兄さん。

「はいこれ。氷あてて。それと鼻血拭かないと。はいティッシュ」  
とりあえず台所へ行って適当にビニール袋に氷を詰めると、お兄さんに渡した。

「さんきゅ、あー」

鼻血を拭いて、鼻にティッシュを詰めて私から受け取った氷袋を殴られたところにあてている。

ていうかやりきったというか、にへら、と気持ち悪い笑みを浮かべながら氷をあてないで欲しいな。鼻に詰めたティッシュと相まって気持ち悪さ二倍だ。

「とりあえず、お疲れ様。あと、その気持ち悪い顔やめてくれないかな」

「おおすまんすまん」

そういつてお兄さんはキリリツと顔を直したようだけれども、全然直っていない。というか、目だけ真剣で口がにへらってなっているから、さらに気持ち悪くなっている。だめだこいつ、早くなんとかしないと……。

お兄さんの治療を終えた時、お姉さんが帰ってきた。

「お姉さんお帰り」

「う、うん……」

お姉さんの顔はいつものバツチリメイクではなく、すっぴんだ。そして目が赤く充血している。

泣いたことを悟られなくなかったみたいだけれど、バレバレだ。「親父、お前の趣味のこと認めてくれるってよ。よかったな」

鼻にはティッシュを詰めて、氷袋をあてている姿でそんなこと言

つてもキマってないぞお兄さん。

「あ、あんた……それ……」

お姉さんはそこでやっとお兄さんの顔の惨状に気が付いたみたいだ。顔が青ざめている。

「これか？　ちと親父と揉めてな。ぶっ飛ばされちまった。でもおまえの為にやっただからな？　俺に感謝しろよ？」

「な、なにそれ……キモッ、ホントキモー！」

お姉さん言葉と動きが合っていない。顔を真っ赤にして、にやけながら言っても全然説得力ないよ。

その後、夕食で再度お父さんがお姉さんの前で、趣味を認めると宣言した。それを言うときのお父さんの顔はこれほどにもないくらい歪んでいたけれど、お姉さんの泣いて喜ぶ顔を見ると、幾分かその顔も柔らかくなった気がした。

……本当によかったね。お姉さん。認められてさ……。

次は、私の番だ。お姉さんの趣味を認めさせるために協力はしたけれど、それはお兄さんの本気を見たからであって、私自身がお姉さんの趣味を認めたわけじゃない。

正直私は趣味を認める自信が無い。……さて、覚悟を決めなければいけないな。

## 8話

「楓、話があるんだけど……今いい？」

あの事件から一夜明けた日。学校から帰ってきて勉強をしていた時、いつもより早く帰ってきたお姉さんは私の部屋に入ってきてそう言った。

「……うん。いいよ。ここで？」

「ううん、私の部屋で話す」

何を話すのかは想像できる。お姉さんの趣味のことだろう。

昨日はお兄さんもお姉さんも疲れたようで、言いには来なかった。私もすぐに趣味について説明されるのはよした欲しかったので、助かった。

正直に言えば、何事もなかったように過ごしたかったけれど、そういうわけにもいかないだろう。逆にそうなってしまったら、ぎこちないままこれから過ごすことになってしまう。

「わかった。片付けてから行くから待ってて」

私がそう言くと、お姉さんは部屋に戻って行った。

お姉さんの顔は、今にも泣きそうな顔だった。問題はお姉さんにあるはずなのに、なんだか私の方が申し訳なく思ってしまう。

私は片付けると言いながら、無意味に鉛筆を削ってしまったり、消しゴムのカスももう無いはずなのに集めてしまう。

行きたくない。本当は今すぐお姉さんの部屋に行って、話を聞いてあげて、その趣味を快く受け入れてあげたいと思う。それなのに、私の本心はそれを拒否する。

無駄に時間をかけながらも、勉強道具は片付け終わった。だけでも、椅子から腰が浮かない。体が言うことを聞いてくれない。

動いてよ。お願いだから。

私がそうやって自身と格闘すること五分、私が来ないことに疑問を持ったのか、お姉さんがまた私の部屋にやってきた。

「楓？ 時間かかるなら無理しなくてもいいよ？」

「じゃあそう……いや、今終わったから一緒に行こう」

お姉さんの甘い囁きに思わず頷いてしまいそうになった。けれどもここで問題をあと送りにやっても、結局話を聞くことになるのだ。だっただけ早い方がいい。

「そう？ じゃあ行く」

ようやく椅子から離れることができた私は、お姉さんと一緒にお姉さんの部屋に行くことにした。

お姉さんの部屋の扉を開けた時、甘い香りが広がった。

私はこの香りが好きだ。それに部屋も、ピンクなどの可愛いもので統一されている。どちらかというと、私は部屋をおしゃれ系にコーディネートする。なぜなら、私は可愛い系の部屋というものがあまり好きではないからだ。だから、可愛い系のお姉さんの部屋というのは、私の趣味に合わない。けれども、お姉さんの部屋は嫌みに可愛くなくて、けれども可愛い。そういう可愛い部屋が苦手な私でさえもお姉さんの部屋は素晴らしいと思ってしまふ。お姉さんはセンスがいいと思う——というのは、普段の私が持つ感想だ。

今の私は普段の私ではない。そんな香りや部屋を楽しむ余裕は私には無かったし、身体はカチコチに緊張して、嫌な汗が背中を伝う。この時だけ明るいお姉さん部屋は、私の目をチカチカさせた。

「やっときたか」

そう言葉を聞いて、お兄さんが居ることにはじめて気付いた。

「ちょっと、勝手にそこに座らないでくんない？ 感染るから」

お兄さんは、お姉さんの勉強机の椅子に座っていたけれど、お姉さんはそれを感染るからやめろと言った。

椅子がそこにしか無いから座ったんだろう。お姉さんもそれには気付いている。けれど、お姉さんは床に座れと言いたいのだろう。仲良くなったと言っても、こういうところは変わらないらしい。

というか、お姉さんがお兄さんを部屋に入れるという行為自体がすごい進歩なんだけれどね。

「おうおう、わかったよ。ったく……」

お兄さんは言われ慣れているのか、素直に従った。年下の妹に命令される兄、どんまい。

「じゃあ楓、そこに座って」

お姉さんは簡易机を置き、そこに座布団敷いて、私にそう促した。そしてお姉さんは私の対面に座り、お兄さんはお姉さんのベッドに座っている。

お姉さんはベッドに座ったお兄さんに対して本当に嫌そうな顔をしたけれど、私に話すことを優先したようだ。椅子はダメでベッドはいいのかな？ よくわからない。

「……………」

お姉さんは座ると、俯いて黙りこくってしまった。

お兄さんに目を向けると、お兄さんも無言でお姉さんを見つめている。

「……………」

「…………… お姉さん、話したいことって、昨日の……？」

「…………… うん」

十分もその状態が続いたため、お姉さんから言わせたかったけれど、我慢できなくなってしまった私は聞いてしまった。私は早く終わらせたかった。

お姉さんは私の質問に肯定の反応を示すと、ポツポツと話し始めた。

いつからかわからないけれど、アニメなどに興味を持ってしまい、いわゆる『オタク』となったしまったこと。ずっと隠してきたけれど、最近お兄さんにオタク趣味がばれてしまって、『人生相談』を受けてもらってたこと。その人生相談の内容は、一緒にオタク趣味を隠してもらうことや、趣味友達を作るために協力して欲しいこと。だけれど、お父さんにばれてしまって隠すことができなくなっ

まって、いまこうやって話していることなど。

様々なことを教えてもらった。そうやって話すお姉さんの顔はともいい顔をしていた。目は爛爛<sup>らんらん</sup>と輝いており、口は綺麗な弧を描いていた。

もし、ここにお姉さんに少しでも興味をもつ男子がいたら、一瞬で惚れていただろう。それほどまでに今説明するお姉さんは輝いていた。

お兄さんもそんなお姉さんを微笑ましく見つめていた。今この部屋は、優しく、暖かい、心地よい雰囲気だと思う。

——私を除いては。

お姉さんにそんな素晴らしい顔で説明されても、私の心の内はまったく晴れない。今までの疑問が明るみになってもことを引いてもそうだ。

私は、裏切られたような気持ちだった。

昨日までは、お母さんやお兄さんなど、直接本人から聞いたわけではなかったので、「まあ嫌だけれど応援したいな」みたいな気持ちだった。

けれども今、私の尊敬するお姉さんの口からそのようなことを言われて、私は後悔した。お父さんと一緒に反対していればよかった。ここまでショックだとは思っていなかった。

今すぐここから出ていきたい。けれども、お姉さんの悲しむ顔も見たくない。

「——でね？　これがあたしの一番好きなアニメでさ、作画が神つててさ、超すごいんだよ！」

お姉さんは話してて興奮してきたのか、アニメのDVDやらフィギュアを取り出してきては私に見せてくる。このとき初めてお姉さんの部屋の本棚の奥に隠しスペースがあることを知った。これには驚かされたね。

そしてお姉さんの一押しというアニメを私に見せてきた。

それは、私が一番見慣れている『星くず　ういっちメルル』であ

った。

パッケージに書かれている可愛い女の子を、このときだけ、私はぶっ飛ばしたかった。お姉さんを誑かしたのはおまえかと。

お姉さんの話を聞いてから、私のテンションはストップ安であった。

「……お姉さん、わかった。あと、十八禁のあれはなんなの？」

私はどうしても聞きたかったことを聞いた。あの十八禁のDVDのことを聞かないと終われない。

「あー。ちよつと待っててね……」

お姉さんは再度、隠しスペースに入って行き、何やら箱を数個持ってきた。

「これね」

そう言ってお姉さんが差し出してきたものに私は絶句した。

『妹と恋しよっ、妹めいかあEX』という半裸の女の子が身体を抱いて恥じらっているというイラストが箱に描かれていたからだ。これはあのとき見たDVDのパッケージだろう。

他の箱にも同じようにタイトルに『妹』が入っていて、女の子が半裸だったりしている。

え……、なに、これ……？

「お、お姉さん？ これってさ……」

「ん？ どう？ 可愛いでしょ。あたし、この女の子大好きなんだー！ 超可愛いんだよ！？」

そういうことを聞きたいんじゃない。私は、そんなことを聞いたんじゃない！

「違うよ！ 私が聞きたいのは、これは何のゲームなのってこと！」  
「………楓？ いきなりどうしたの……？」

いきなり大きな声を出してしまったせいで驚かせてしまった。

「う、ごめん。何でもないよ」

お姉さんはこれらが何のゲームか説明してくれた。これらは妹を愛でるゲームで、お姉さんはそれらの『妹もの』と呼ばれるゲーム

が好きなのだと。

そう説明するお姉さんは見るからに興奮していた。

……なに？ これって十八禁だよな？ それで、これらは、妹と、  
そういうことを、するゲーム、なんだよね……？

ウソ……まさかね……。ありえないよね？

今までお姉さんが、“妹”である私にとっても優しくしていたの  
て……？

——気持ち悪い。本当になんなの。なんでお姉さんはそんなに笑  
っていられるの？ なんでお兄さんは何も疑問を持たないの？ な  
んでなの……！

「——それでさ、どうかな？」

「——ッ！ う、うん。いいんじゃないかな。お姉さんに話しても  
らって私はとっても嬉しいよ」

押し寄せてくる吐き気を気合いで我慢して——嘘をついた。

時間が解決してくれるだろう。そのうち理解できる時がくると思  
う。時間はかかるかもしれないけれど、そうなれる自信はある……  
と、思いたい。

お姉さんには悲しんでほしくない。

だから私は、できうる最高の笑顔で、嘘をついた。

「ほんと！？ よかった……嫌われるんじゃないかと思ったからさ  
……ほんとに、よかった……」

「よかったな、桐乃」

すごく嬉しそうに、安堵するお姉さん。そして一緒になって喜ぶ  
お兄さん。

罪悪感が半端ない。いままでお姉さんに嘘をついてこなかった私  
は、初めて嘘をついた。

普段の私なら、お姉さんに悲しまれようと、自分の意見を述べて  
いただろう。そしてお姉さんとちゃんと話し合い、納得できる結論  
を出しただろう。いくら時間が経っても。

それはお姉さんを信じていたからできた。

けれどもさ……正直今のお姉さんは信じられないよ。今までのようにお姉さんに全幅の信頼は置けないよ。

それはお兄さんも同じだよ。お兄さんも今までのように仲良くできる自信がないよ……！

「——うっ。お、おねえさん……ちょ、ちょっとトイレ行ってくるね」

「そう？　行つてらっしゃーい」

そう思つたら吐き気が押し寄せてきた。もう我慢もできないくらいに。

お姉さんののきな声がさらに吐き気を催し、部屋を出ると走つてトイレへ向かった。

「——げえ……！」

吐いた。たくさん吐いた。今のうちに胃の中にあるものは全て吐きださなくてはいけない。

このあとまたお姉さんの部屋に戻るのだ。また吐きなくなったらダメだ。

三分くらいだろうか。私はずっと吐いた。

「……はあ、はあ、はあ。はは、顔、汚いや」

口の周りは吐しゃ物でベトベトになっていた。口の中は胃酸と吐しゃ物が混ざつた、酸っぱくてとても不愉快な味がする。

さぞや今の私の顔はひどいことだろう。

なぜか笑いたくなくなってしまった。

私は口の周りをティレットペーパーで軽く拭いたあと、吐しゃ物と一緒に流してトイレを出た。

洗面所で手と顔を洗い、顔を上げた。

鏡に映つた私の顔は、想像した通りひどいものだった。

血色は悪くなっているし、疲れ切つた顔をしている。

普段から美容に気をつけている私ではありえないような顔だった。

「……こんな顔でお姉さんの前になんて出れないよね」

私は一度顔を叩いた。気合い入れた。

「……よし」

お姉さんの部屋の扉を開けると、お兄さんとお姉さんが『妹もののゲームについて談笑していた。

兄妹なのになんでそんな楽しそうに話せるんだろう。

気持ち悪い。先ほどよりは気持ち悪くはない。全部出してきてよかった。

「ただいま」

「うん。おかえり！ 遅かったけど大丈夫？」

「うん。ちよっとお腹が痛くてさ」

なるべく笑顔で答える。悟られてはダメだ。

「でね、この娘がチョー可愛くてさ！ ねえ、楓はどう思う？」

「可愛いね。隣の娘も可愛いんじゃない？」

「うわ、楓わかってるね！ この娘があたしのお気に入りなんだ！ そんなのどうでもいい。早く部屋に戻りたい。

いくら吐き気が和らいだからといって、なくなったわけではない。それに時間が経つにすれ吐き気が大きくなってくる。いつまた吐いてしまうかわからない。

「お姉さん、私は戻るよ」

「そう？ ありがとね。楓に話を聞いてもらってとっても嬉しかった！」

三十分後、話が一区切りついたところで私は戻ると言った。お姉さんはまた新しい『妹もの』のHなゲームを取り出そうとしていたけれど、それにつかまったらまた何十分も話すことになるだろうから、強引に切り出した。

お姉さんは本当に嬉しそうな顔で私にそう言う。すごく心が痛い。ごめんねお姉さん。私には無理だよ。

私の部屋に戻る間も、冷静を装った。廊下も足音は響くから、走るなんてことはできない。

私は自分の部屋のドアを開けて中に入ってドアを閉めた。

「……………うあつ……………！」

途端に涙が溢れてきた。どんな感情なのかはわからない。わからないけれど、涙が溢れてくる。

「うああ、うううう、ぐすつ、ああああ……！」

涙は止まらないし、身体はドアの前から動かない。

フローリングの床に、涙の水溜まりができるのではないかというくらい涙を流した。

「なんでえ……ねえなんでえ」

床の涙を拭くのもめんどくさくて、私はそう言いながらのろのろとベッドに歩いてのそのそと潜った。横になると、さらに涙が溢れてきた。

「――！！」

体じゅうの水分を出し切ってしまうのではないかというほど涙を流した。私のお気に入り枕は、涙と鼻水でぐしゃぐしゃだ。

けれども、そんなのは気にならない。声にならない叫び声をあげないから私はずっと泣いた。

ドンドン、という音で私は起きた。ドアを叩く音のようだ。

どうやら私は泣き疲れて寝てしまったのか。

「楓？ ご飯できてるよ？ 来ないの？」

お姉さんの声だ。そして結構な時間を寝てしまったみたいだ。

お姉さんの声を聞いたらまた涙が出てきた。

「ごめんね、今日はいらない。お母さんに言っておいて」

泣いていると悟られないように、不自然にならないように言葉を発した。

吐き気は収まったけれど、食欲なんてない。

「そう？ 大丈夫？」

「うん、大丈夫だから」

「わかった、じゃ」

そついうとドアの前からお姉さんの気配が消えた。

こんな顔見られたくないし、それになにより、今は誰とも話したくない。

「うわ……枕ビショビショ……」

さっきまで抱いていた枕は涙と鼻水を吸ってビショビショだった。私はそれをベッドから出すと、抱き枕に変えた。ちゃんと後で洗わなきゃ。

もう疲れた……寝よう。

明日の朝、お姉さんたちと顔を合わせなきゃいけないのか……。嫌だな……。

## 8話（後書き）

どうしようもない後。

## 9 話（前書き）

難しい。

話は進まないし、なんかグダグダになるし……。  
おもしろくしようと書きたいのに！

## 9 話

ジリリリリという目覚まし時計のうるさい音で私は起きた。時計を見ると午前六時。

「ん……朝か」

体を起こし、伸びをした。身体がだるい。重石を何個も身体にくくり付けたような感覚だ。

私は二度寝できないから、だるくてこのまま寝なおしたくても寝ることができない。こういうとき、規則正しい生活をしている己を呪いたくなる。

けれども起きてしまったのなら仕方がない。学校に行く準備をしよう。

その前に昨日はお風呂に入らずに寝てしまったから、まずお風呂に入らなくては。

着替えを準備して部屋のドアの前まで歩いた。

とりあえずドアに耳をあてて、外の気配を探る。今はまだお兄さんとお姉さんに会いたくないからだ。

朝食で会つとわかっていても、そう思ってしまうのも無理はないと思う。

外に気配がないのを確認して、恐る恐るドアを開けた。お姉さんたちは私より起きるのが遅いのは知っているけれど、イレギュラーとはあるものだ。いつもイレギュラー想定しなければこの世の中学生てはいけないよ。

そして足跡を立てずに階段を下りた。リビングではお母さんが朝食を準備している音がする。

私はこの音が好きだ。

朝の六時はだいたいの人が寝ているから静かだ。その中に調理をする音だけが響く。なんだか心地よい気持ちになる。

マッサージをされているときのような心地よさに似ていると思う。

私はその心地よい音を聞きながらお風呂場に向かった。

洗面所の鏡に写った私を見てみると、昨日ほどひどくはなかった。ちよつと隈が気になるけれど、それも二、三日で治るだろうしそれまで我慢だ。これくらいなら化粧でごまかせる範囲だと思う。

それにしても化粧を初めに考えた人は本当にすごいと思う。こういう隠したいところを隠せて、しかも可愛くなれるという女の最強の武器だね。

それからシャワーを浴びて湯船に浸かった。

「ん、んはあ」

肩まで深く浸かり、伸びをする。おばさん臭いかも知れないけれど、お風呂に入るのってとっても気持ちがいい。

今はまだ若いからできないけれど、将来私は温泉巡りに出ようと思っている。

別に温泉が好きな訳ではない。でもお風呂と言ったら温泉だよね。理由はそれだけ。

「それにしても……これからどうしようかな……」

そんな私の言葉が、お風呂場に響く。

これからというのは、お兄さんたち二人とどう接していくかということだ。一晚経った今、嘔吐感とかはしなくなっただけれど、嫌悪感はまだ拭えない。

だからといって私は二人を避けたくない。私はどうにかこの嫌悪感を克服して楽しくやって行きたいのだ。

そう思う反面、でも……と思うところはある。

私は小さいころからお父さんに躰けられてきた。だから、はいそうですかという訳にはいかない。

何かきつかけがあれば、私も頑張れると思うんだけど……今は無理かな。そしてできれば、お姉さんの趣味を私も好きになれば最高なんだけれども。

きつかけと言っても、私から起こすつもりはない。もし私から起こして、失敗してしまったらイヤだから。

私は基本憶病なんだ。大体が待ちの体勢になる。こんなことから、友達が少ないのだと思うけれど……。

向こうからやってきてくれるまで、この気まずい気持ちは続くと思う。

「……って時間やば」

お風呂場にある防水仕様の時計を見れば、六時四十分だった。四十分も入ってたのか。

朝食は七時からだから、今出ないと髪を乾かす時間がない。

もう一度軽くシャワーを浴びてから、すぐにお風呂を出て身体を拭いて髪を乾かしたところで、七時の二分前になったので、パジャマのままリビングへ向かった。

私は部活をやっていないから朝練習とかはないので、パジャマのままで行っても大丈夫なのだ。

洗面所を出てリビングのドアを開けると、お父さんとお母さんとお兄さんが席に座って私を待っていた。

お姉さんがいないのは、陸上部で朝練だからだ。

正直いなくて助かった。こういう顔をしたらいいかかわからないから。

「遅いぞ。早く座れ」

お父さんは少しイライラしているようだ。まあ、二日前の出来事のせいだろう。お父さんは認めはしたけれど、納得はしてないみたいだし。

それに、お父さんは朝もお風呂に入るんだった。今日は私が先に入っていたから、入れなくて機嫌が悪いのかも……。それは悪い事をした。

私が席についたとき、お兄さんが口を開いた。

「楓、お前もう大丈夫なのか？ 昨日晚飯来なかったしよ」

「う、うん。大丈夫だよ」

気まずいのでお兄さんとは目を合わせないようにしていたのだけれど、向こうから仕掛けてきた。

平静を装ってみたけれど、失敗したっぽい。私に女優の才能はないのだ。

「そうか？ そうならいいけどさ」

お兄さんは私の挙動がおかしいことに気が付いたようだけれど、追及はしてこないようだ。

そうしてもらえらるとお兄さんと目を合わせることだけで気まずさを覚える私としてはとても助かる。

そうして朝食は始まった。テレビに流れるニュースをBGMに私たちは無言で食べる。

いつもはゆっくり食べる私は、今日は早く食べようとお箸を進めていた。

「ごちそうさま」

「あら、今日は早いね。 なにかあるの？」

「ちよつと学校に早く行こうと思ってさ」

とりあえずこの気まずさがイヤだったので早々に片付けることにした。

お母さんには適当な嘘をついて食器を片付けると、早足で部屋に戻った。

部屋に戻ってから私は嘘をついてしまった手前、早めに学校に行かなくてはならなくなったので、すぐに制服に着替えた。

そして学校に持っていくものの準備を整えたとすぐに家を出た。朝食から三十分で家を出たことなんて初めての経験だ。

こんなに早く学校に行っても正直何もすることないんだけど…。

コンビニで漫画でも読んでから行こうかな。

本日の学校の授業は終わり、今は美香とスタバに入り、適当に飲み物を頼んでから席に座り、他愛もない会話をしている。

私たちは学校が終わるとほとんどの日はスタバに行ったりファミ

レスに行ったり遊んでいる。

学生の私たちはあまりお金を使えないので、コーヒ一杯とかで何時間も過ごさなくてはいけない。まあ私は最近モデルを始めたので気にせず使えるんだけれどね。

「でさ、話変わるけど、楓なんかあった？」

「ん？ どうしたの急に」

「なんかさ、元気ないっていうか？ よくわかんないけどさ」

本当に話が変わるな。さっきまで美香の想い人がどうたらこうたらうるさかったのに。

こうすぐ話題が変わるのがガールズトークというものだね。まあ私もスイーツの話をしていたのにいきなりファッションの話に変えたりするけれどね。

それに美香の言うとおり、何かあったかと言われれば、何かはあった。思い当たるのはあれしかない。

けれどそれは学校では気にしないようにしていたし、今だってそう言われるまでは忘れていたくらいだ。顔に出るなんてことはなかったと思うけれど。

「うそ、顔に出てた？」

「いやそういうわけじゃないんだけどね。なんか雰囲気というか？」

「ふ〜ん」

なんという心理眼。

私だっけ忘れていてたくらいなのに気付くなんて、実は超能力者か何かだったのか。海外ドラマでよくやっている霊能捜査官に美香はなれるかもしれない。

「で、なんかあったの？ というかあったんでしょ？ 私に話してよ」

「いや、でも……」

これに限ってはいくら美香でも話すことはできない。

家族の問題だし、お姉さんのメンツにも関わることだ。美香は口が軽いとは思っていないけれど、万が一他の人にバレでもしたら大

変なことになる。

そして何より、これは私が我慢すればいいだけだし。

それにまだ一日しか経ってないのに美香に頼るといのは、私のプライドが許さない。

「話しくいなら無理して話さなくてもいいよ。でも、ダメだったら私に頼ってね？ 楓って何でも一人でやろうとするからさ」

「うん……ありがとう」

私がそう言うと美香は「いいいいいよ」と言ってくれる。

気になっても無理に聞いてこないところが美香のいいところのひとつだ。でも肝心なところでは力になってくれる。

抜けているところはあるけれど、それを引いても美香が一番だと改めて思う。

本当にダメになりそうになったらその時は頼りになろう。

あー、結婚できるなら美香と結婚したい。

そのあと美香とはいってもどおりころころ内容が変わる忙しい会話を楽しんだ。

といっても、その六割が美香の想い人の話だったんだけどね……。はつきり言ってしまうとめんどくさい！ さつさと白黒つけてほしいものだ。

甘すぎて砂糖がリバーズしてしまいそうだよ。それを美香に言っても恥ずかしいやらみているだけで十分やら……一発殴ってやろうか。

私はそれを我慢するために苦手なブラックを飲んで耐えていた。褒めてほしいものだ。

「じゃーねー」

「うん。また明日」

それから私の門限になるということで、スタバを出た私たちは、帰り道が途中で違うので交差点で別れた。

綺麗な夕焼けが照らす住宅地を私は一人で歩く。

家に近づくにつれ、私の足が重くなるのがわかる。美香との楽しかった気持ちもだんだんと沈んでいく。

でも帰らないわけにもいかない。少し前までプライドが云々言っていたけれど、そんなもの捨てて今すぐ美香に電話して助けを求めたいくらいだ。

とか思いながら歩いていると、いつの間にか家の前まで辿りついていた。右手首にある腕時計を見ると、門限二分前。

覚悟を決めるしかあるまい。思い切って玄関の扉を開けてみた。

「ただいまあ」

語尾が少し弱くなってしまった。

お、お兄さんとお姉さんの靴が玄関にないということは、まだ帰ってきていないのか。これはラッキーだ。

この際に早く部屋に籠もって、夕飯まで勉強しようかと思って向かっていたら、

「ちようどいいところに帰ってきた。ちょっと買い物いつてくるから、ご飯みててくれない？」

「……わかった。いつてらっしゃい」

お母さんに止められた。

リビングにいたらお兄さんたちが帰ってきたときに顔を合わせてしまっじゃないか……！

でもいつもこういうときはお母さんの手伝いをしているから、断ることもできない。従うしかない。

そうやってお母さんの作りかけの料理がダメにならないように見る仕事をするようになった。

テレビのニュースでは最近の事件が取り上げられている。バラバラ惨殺事件やいじめが原因で自殺した女の子やら何やら……

まったく恐ろしい世の中だ。といっても、薄情かもしれないけれど現実感がないため他人事だ。まあそのようなものだろう。

と、そんなことを思っていると、玄関の扉が開く音が聞こえてき

た。お母さんはまだ帰ってくるには早いから、これが誰なのかはわかる。

正直言ってしまうと、これは私にとってはテレビでやってるニュースよりも大事件だ。

「あ、楓ただいま。それとお帰り」

「ただいま、つてお袋は？」

「おかえり。お母さんはお買いもの」

少しそっけない返事になってしまったけれど、これくらいなら及第点だろう。

それにしても、二人揃って帰宅か……。あの話を聞かされてから見ると、なんかイヤだな……

そうしてリビングに入ってきた二人は、お母さんたちがいないからか、ソファに座って例の趣味について話している。お兄さんは少しお姉さんに引いてるみたいだけれど。

そうやって話す二人は仲がよさそうに見える。やっぱり二人は――やめようやめよう。そんなのありえる訳がないじゃないか。二人は兄妹。それ以上でも以下もない。

そしてお姉さんが愛してやまない『妹もの』も、私の勘違いなんだ。そう思わなければ。

私は料理を見なければいけないので、キッチンから離れられない。ということとは、

「楓もこっちきなよー」

お姉さんから声がかかるわけだ。

しかし、私には切り札がある。

「いや、お母さんに料理見ててって言われてるからさ」

「いいじゃんそんなの。ほらあんたが楓の代わりやりなさいよ」

お姉さんはお兄さんにこれを代わらせようとしている。やばいやばい。

「は？ 何で俺が」

「何？ なんか文句あるワケ？」

「すいません何でもありません……楓、代わろうか？」

「いや、いいから！ お兄さんに任せると何もかもがダメになりそうだからいいから！」

「……………」

たのまれたしことをおにいさんにするなんてとんでもない！

……ふざけている場合じゃない。

正直私は気まずさが臨界点を突破しそうなのだ。今の私がお姉さんがいるところに行ったら何も喋れないかもしれない。

だから必死になって止めてしまった。お兄さんはその必死な私を見て自分の頼りなさを再確認したようだけれど。

一応、本当の意味でもお兄さんに任せると心配なので止めたから、いいよね。

というか、お兄さん弱すぎだよ。妹にちょっと強く言われただけですぐ折れる。なんということだ。かわいそうに。

と、そこでお母さんが帰ってきたようだ。ナイスタイミングだお母さん。

「ただいまあ。そして二人ともお帰りなさい」

お母さんがそう言うと、二人もそれにただいまと返す。

「ご飯見ててくれてありがと。もうすぐ夕飯だからリビングで待っててね」

気付けばもうそんな時間か。料理を見る感じ私が手伝えそうなくともないし、テレビでも見ながら待つとしようか。

## 9 話（後書き）

こんな感じの作品ですが、どうぞこれからも見守ってくださいと嬉しいです。

## 10話

七月のある日曜日。季節はもう夏真っ盛りだ。

私はクーラーのよく効いた部屋で、ベッドに寝転がりながら、私が出ているファッション雑誌を広げて見ている。

この自分が出ている雑誌を見るというのは、私の習慣になっている。他の雑誌に写っている女の子と自分を比べて勉強したり、私の晴れ姿に見惚れてみたり。

この仕事も、もう慣れてきた。今では、私はちよつと大きめの記事にも載せてもらえるようになった。これは私がモデルとして認められつつあるという、たいへん喜ばしいことだ。それにギャラも増えるし、嬉しいことづくめ。

貯金にも余裕ができてきて、服をたくさん買ったり、小物も欲しいものを買うのが私の最近の趣味だ。

お父さんやお母さんにはあまり使いすぎるな、貯金しろと言われているけれど、パーっと使うのは楽しい。お父さんたちには悪いけれど、今はちよつとセレブ気分でいようと思う。もう少ししたら、まじめに貯金します。

と、こんなのにきになっているけれど、実は期末テストが近いのだ。こんな大げさに言っているけれど、別に特別なことはしない。いつもどおり勉強すればいい。今日のノルマは達成したからのんきにしているのだ。

「楓、いいいい？」

雑誌も見終え、最後の広告欄を適当に見ていると、お姉さんがドアの向こうから声がかかってきた。

「うん。いいよ」

私も特にすることがなかったので、快く迎える。

私もお兄さんやお姉さんに対する態度にこのままではいけないと思ってきた。なので、最近は私から話しかけるようにしたりして、

コミュニケーションをとるようにしてきた。

そのおかげで、未だに気まずさは抜けないけれど、普通に話すくらいはできるようになった。お姉さんの趣味は理解できないけれど、私の言葉の後に部屋に入ってきたお姉さんは、メイクバッチリのお出かけスタイルだった。私を誘いに來たのだろうか。

「あつそれ、今回の楓も可愛かったよ！」

お姉さんは、私のベッドにある雑誌を見つけると、私を褒めちぎりだした。あれが可愛い、これが可愛い、全部可愛い――

お姉さんは毎回こんなことを言うてくる。褒められるのは嬉しいけれど、ここまでやられると恥ずかしい。

「うわあ、何度見ても飽きないわ……」

「はあ、お姉さんは何の用で來たの？」

「あつそうそう、楓が可愛すぎて忘れてた。えつとね」

お姉さんが止まらないので、私が呆れながら言つと、やっと本題に移ってくれた。

「あやせたちがウチに來るんだけど、楓も参加ね。いいよね？」

「いいよね？」と確認しているけれど、それはもう決定事項なんですよ、わかります。

別にイヤではない、むしろ遊べるなら楽しいし、その方が全然いい。それにお姉さんともコミュニケーションとれるし。

ひとつ不満があるとすれば、こんな直前に言わないで、一日前くらいに言つてほしい。私も化粧とかいろいろ準備があるのだ。

「いいよ。準備する」

「あ、それと楓の部屋でいい？ 今あたしの部屋散らかつててさ！」

「私の部屋は全然いいよ？ それより……散らかつてるって、変なゲームとかアニメ？」

「ちよつとあたしのコレクションを整理しようとしてたらさ、逆に散らかつちゃつてさ。それと、あれは変なのじゃないからね！ あたしの可愛い妹なんだから！」

プンプン、とお姉さんは可愛く頬を膨らましている。本当はムカ

つく行為だけれど、実際に可愛いから何も言えない。

「ついつい変なの、と本音が出てしまった。まあそれでも十分にオブラートに包んでいるんだけれど。」

それに目の前で『あたしの可愛い妹なんだから！』と熱弁されても困る。私の頬が引き攣っているのがわかる。

「というか、私がダメだったらどうしたんだろうか。無計画だなお姉さんは。まあその無計画もうまくいっちゃうのがお姉さんなんだけれども。」

「そ、そう。とりあえず私は準備するから、待ってて」「オツケー」

モデル仲間に、早くて可愛い化粧の仕方を教えてもらった私に敵はいない。

おそらく、「お前に足りないもの、それは……ない！」とクーガーさんもびつくりな早さで化粧を終えることができるだろう。

「といっても、私は薄化粧だから早いのは当然だけれどね。」

それから三十分後、化粧や着替えを終え、適当に部屋の掃除をしていると、ぴんぽーんと呼び鈴が鳴った。どうやら来たらしい。本当にギリギリだね。

「あたし迎えに行ってくるから、楓はお菓子とかジュース持ってきてくれる？」

「うん、わかった」

お姉さんはトタトタと軽い足取りで、玄関へ向かって行った。

我が家は突然の来訪にも備えて、お菓子が常備してある。お母さんが近所のおばさんたちをよく家に呼んだりしているからだ。

いいのかわからないけれど、私やお姉さんが友達を家に呼ぶときは、それを勝手に使っている。減ってもいつの間にか増えているし、いちいちお菓子を買わなくていいから楽で助かっている。お母さん様々だね。

私もお姉さんの後に続いてリビングへ行く途中、

「お待たせ、待ってたよ」

と、お姉さんの猫なで声であやせ達を迎える声が聞こえてきた。

このような声は、家、特にお兄さんに対する声ではない。お姉さんは学校とか友達の前では、今のような声を出す。おそらく自然にそうなっているんだと思うんだけど、すごいなあと思う。

「あ、お兄さん。いま聞こえたと思うけれど、友達くるからよろしく」

リビングに入ったらお兄さんがソファに座ってテレビを見ていたので一応報告しておくことにした。

お兄さんの部屋にはテレビがないから自然とリビングで見ることになる。かわいそうに……

まあ、私も最近までは部屋にテレビはなかったんだけど、モデルの仕事で得たお金で最近、最新型テレビを買った。あんまり大きなものじゃないけれどね。

しかし自分のお金でこういう大きな買い物をするのって本当に気持ちがいいね。なんかこう、スカツとした。

さすがにお父さんには怒られた。「中学生が買うものじゃない」と。もう買ってしまったものは仕方がないので、私の部屋に設置されることになった。

これで私は部屋でテレビを見るという快適空間を手に入れた。本当に部屋にテレビがないひとはかわいそうだね！

「ああ、昨日桐乃から聞いたわ。邪魔だから部屋から出てくんなくて言われたけどな」

そう言ってお兄さんは苦笑いした。

お兄さんには昨日のうちに言っ、私には直前に言っってなんだろう。深い意味はないんだろうけれど、なんだかなあ。私は多少疑心暗鬼になっているようだ。

「あっそう。部屋にいてもいいけれど、盗み聞きしないでよね」

「いくら俺でもさすがにそんなことはしねえよ！ お前は俺をストーカーかなんかと思ってねえか！？」

ほんの少しイヤな気分になったので、嫌みのひとつでも言いたくなかった。

それにしても「いくら俺でも」って、なんか含みのある言い方だな。自分でダメ人間だと言っているようでなんかかわいそう。

「おもってないおもってないだいたいじょうぶおにいさんはすとーかーじゃないよ」

私がそう言いながらお菓子の準備をしていたのだけれど、お兄さんは「棒読みだし感情が籠もってねー！」と不満があるらしい。まったく失礼な。まあ、実際棒読みだからそれは正しいのだけれど。私がそんな非難の声を無視して準備をしていると、「おじやましまあゝす」とみんなが入ってきた。

二階に上がって行く足音が聞こえる。お兄さんの方を見ると、居心地が悪いようだ。ふっ、いい気味だ。

「あー、お兄さん。女子中学生が気になるのはわかるけれどさ、ここでお菓子とか食べるから部屋に戻ってくれない？」

言い忘れていたけれど、リビングでやることを言っていなかった。お兄さんには悪いけれど、ご退場願おう。

「はいはい、邪魔な兄貴は部屋に戻りますよー。それと女子中学生は気にしてねえからな」

お兄さんは渋々ながら従ってくれた。捨て台詞を残して。負け惜しみとも言つ。

「あ、部屋に戻る前に広げた雑誌は片付けてってね。ついでに、友達のアイスコーヒー作って」

「そこは俺に感謝の言葉をかけるところじゃねーの!？」

まったく、何を期待していたのだから……

お兄さんは漫画雑誌を片付けたあと、友達の分も含めてアيسコーヒーを作ってくれた。最後は「覚えておけよ!」と言いながら部屋に戻る、かませ犬キャラ全開なお兄さんであった。使えるものは

使う、それが私、高坂楓だ。

準備も終えたことだし、私の部屋にいるだろうお姉さんたちを呼びに行こう。

階段の部屋のドアの前まで来ると、部屋の中からも楽しそうな話し声が聞こえる。私たちの部屋は壁が薄くて、音が隣の部屋に漏れる。だから、普段はみんな気をつけている。けれど、今は友達がいるのでそういう警戒心も薄れているのだろう。

「みんな、いらっしやい」

「あ、楓えーおじゃましてるよ」

私の声に最初に応えたのは、加奈子。今日もツインテールでＴシャツにホットパンツという、シンプルでいて可愛い服装だ。加奈子は悪口さえ言わなければ全然楽しい子なので、比較的苦手でも遊ぶときはイヤな気分にはならない。

他には、あやせといつもお姉さんのグループにいる子が一人。彼女たちも加奈子に続いて私に挨拶をしてきた。あやせは、水色の水玉模様のワンピースという清楚系なあやせにピッタリな服装。

私もそれに返す。そして私が部屋に入ってくる前まで盛り上がった内容は、円になって座っている彼女たちの真ん中にある、私が出ている雑誌のようだ。そういえば片付けるのを忘れていた。

「楓って最初の頃とは見違える程よくなったよねー」

「でっしょー!? さすがあたしの妹だよね!」

あやせが私のページをみて感慨深そうに言った。お姉さんは自分のことのように喜んでいる。

私もあやせの言うとおり、そう思う。最初のころの私の写真は、なんだか表情が固くて見てるこっちが恥ずかしくなるような代物だった。

けれど今日の前にある雑誌にある私の写真は、自信を持って、どう、かわいいでしょ? と言えるくらいまで上達したものだと思う。これもあやせのおかげなんだと思う。あの最初の撮影ときあやせが来てくれなかったら私は辞めていたかも知れないし。

あとお姉さんのアドバイスもなかったら、ここまで自信が持てるものも撮れなかっただろう。

「これもあやせとお姉さんのおかげだよ。ありがとね」

私の気持ちを正直に二人に言くと、「いや、楓のがんばりの成果だよ」とあやせが謙虚に言い、「そう？ 照れちゃうな……えへへ」とお姉さんが顔を真っ赤にして喜んでいる。

心があったまるこの感じ、やっぱり友達っていいなあと思う。

「楓可愛いなあ、あたしもこういうのやってみたい」

「加奈子もやろうと思えばできるよ！ 可愛いし！」

加奈子が私たちの会話を聞いてそんなことを言ったのに対して、あやせがすぐにできるよ！ と自信満々に言った。

まあ加奈子が本気でやろうと思えば、当然できると思う。加奈子ってこう見えているんなところに才能持ってるし、なにより可愛いし。

「ええ、マジ？ あたしもやってみようかなあ」

加奈子も満更でもなさそうだ。

「あはは、いいかもね。私お菓子持ってくるよ」

多分リビングへはもう行く空気ではないだろうから、部屋に運んでこよう。

お兄さん、無意味に部屋に戻ったね。どんまい。

## 10話（後書き）

この話の中に入れようと思った内容のプロットの内の、六分の  
一しか書けなかった！

進まないね！

本当にごめんなさい！

## 11話（前書き）

おまたせしましたあああ！！！！！！！！  
やっと再開できたよ！！！！！！！！

## 11話

『桐乃さあ、彼氏いるんでしょ？』

私がリビングからジュースやお菓子もろもろを持って部屋の前まで来たとき、部屋の中からそのような声が聞こえてきた。加奈子の声だ。

『だからあ、そんなのいないってば！』

『うそだあ、じゃーケータイ見してみ？』

『だ、だめ。それはだめ。プライバシーの侵害だから……』

部屋の外まではつきりと聞こえてくる。それはそうだ。この家は意外と壁が薄いので、大きな声や音を出すと隣の部屋や廊下に響いてしまうのだ。

いつもは私たち兄妹三人はそれに気を付けているのだが、今日は友達も来ているということとでそんなことにしていないみたいだ。

おそらくこの会話はお兄さんの部屋にも届いているだろうが、この会話を盗み聞きするかしないかはお兄さんのモラルを信用しよう。と言いつつ私も、お盆を抱えながらドアに耳を貼り付け盗み聞きしているわけだが。

『やっぱアヤシイ……。桐乃お……。正直に白状したらあ？』

『ふ、ふん……。白状するって……。なにを……。？』

『もう、とぼけてえ！ ねえってばあ！ 桐乃お、相手はどんな男なの？』

典型的な“恋バナ”だ。私は恋バナは好きではない。なぜなら、恋バナとか言ってはいるが、ただの好いている相手をみんなに言う暴露大会だし、言ったとしてもその男の人の品評会になったりするし面倒くさいことこの上ないからだ。しかも今のこの状況のように、言いたくもないのに無理やり言わせたりするからだ。といっても美香みたいに自分から「あの人大好き」とか言っているなら別にいい

のだが。

私は恋バナは好きではないが、今回は加奈子を応援させてもらう。なぜならお姉さんのことだからだ。

お姉さんは私がそういった話が好きではないと知っているため、そういった話を私の前ではしない。たまに彼氏がいるかとか聞いてくるだけだ。

私もその時にお姉さんに聞いてみるのだが、毎回お姉さんはいないと答える。学校でもお姉さんは人気なのに、浮いた話は聞こえてこない。

正直すごく気になる。ここで私が部屋に入って行ってしまったら、この話も流れてしまうと思うので終わるまでドアの前で待機してやる。頑張れ加奈子。

『だからあゝ、あたしに彼氏なんかいないってば！』

そこで引き下がってはだめだ。しつこく聞くんだ加奈子。それはもう芸能人の追っかけの如くしつこさで。

『うそだあ！ 信じられないよ！ 絶対男だって！ いいじゃん別に、誰も友達の彼氏取ったりしないからさあ。ね？ あたしたちだけに、こつそり教えてよ〜う』

『い、いないってばそんなのっ、何度言わせるの！』

お姉さんの余裕が無くなってきた。これはもしかすると本当に彼氏がいるのかもしれない。おもしろいことになってきた。しかしもしいたら、それはそれで嫌な気持ちになる。先を越された意味で。

『えー？ だって桐乃、ガッコですっごいモテるじゃん、男の子たちからさ〜』

『そ、それは！ そうかもしれないけど！』

そこを否定しないところがお姉さんらしい。ここでそんなことないよ〜とかいう女の人より何百倍もましだ。

まあ実際お姉さんはモテる。社交的なお姉さんは、男女差別なくみんなに明るく接しているから当然だろう。お姉さんに一番近い私の元に、お姉さんの携帯の番号を聞きに来たりする男子は結構いる。

それは同級生だけでなく、上級生などほかの学年の人もあるほどのモテっぷりだ。羨ましいなんてこれっぽっちも思っていない。そうなんだ。

『ていうかあ、あたしが男とあっている現場を見たわけじゃないんでしょ？　ならどうしてそんなこと言い始めたワケ？　あたしにか

——彼氏がいるなんてさ』

『だって最近おかしーじゃん、桐乃！』

『そうそう！　すっごい変ー！』

周りの子も参戦してお姉さんに問い詰める。

『ええ~~~~んっ？　うそ~~~~ど、どこがあ？　そ、そんなことないじゃ〜ん？』

聞こえてくる声だけでお姉さんがどれだけ焦っているのかわかる。焦りすぎて言葉づかいもおかしくなっているし。

お姉さんにはどこか思い当るところがあるのだろう。だから変と言われておかしくなっている。

『最近いきなり付き合い悪くなったしい〜、ガッコでもこそこそメールしているみたいだし〜』

『……………』

凶星みたいだ。私とお姉さんのクラスは離れているので、そういう変化はわからない。家では普段と同じように見えたし。まあ食事中に携帯を見ていて、お父さんに注意されているのを見るようにはなっただ。

それだけで私視点ではおかしいと思うようなところはなかったのだが、ふむ……彼氏か。嬉し悔しい。

『あ、あたし電話してるとこ見た！　なんか痴話喧嘩してるような感じだった！』

『ち、痴話喧嘩？　なにソレ？』

痴話喧嘩か……妙にム力つく。さらに話を分かっていなさそうなお姉さんの返答がさらに……いや、気にしては負けだ。

『うん、なんかあ、すっごい怒鳴ってるんだけどお、でも、それな

のになんか嬉しそうな。それで電話切ったあと、なんかにやにやしてんの。絶対彼氏でしょアレ——」

『だよ〜?』

『いや、それは、ちが……ちがくて……えと……』

お姉さんはしどろもどろになってしまった。

私としては今すぐ部屋に入って「もう白状したらどうなんだい! ? おおん! ? 」と言いたいところだけれど……抑えるんだ。

『あ、ホラあ! 思い当たるところあつたんでしょ?』

『な、ないっ! ぜんぜん!』

そんな反応では「あたし、彼氏います」と言っているようなものだぞお姉さん。お姉さんは嘘が下手くそだから仕方ないことかもしれないけど。

『ふーん? あくまで彼氏なんていないってゆーんだ、桐乃は?』

『あつたりまえでしょっ』

『じゃー、最近のおかしな行動について、セーナーなりユーを説明してよ』

ああ加奈子、それは悪手だ。お姉さんは彼氏のことは絶対に吐かないと思うから、最近のおかしな行動についての説明を求めたのはいいけれど、正当な理由を説明してよなんて言ってしまったらだめだ。お姉さんに畳み掛けてきた今までの怒涛の流れを切ってしまうではないか。

ここなら……そう、「実はアタシも気になってる男がいるんだケドさあ〜? 桐乃が教えてくれたら言っちゃってもいいかなあ〜? 」とか嘘でも言ってしまえば、周りの子が「えー? 知れたーい」とか乗り出してきた、説明せざるを得ない展開に持つてくとかいろいろ考えなきゃ加奈子。まあ、嘘はだめだと思うけど。

『あーんも〜、いい加減にしてえ〜』

やはりお姉さんはここで話を切ろうと企んできた。こんな状況になつたらお姉さんは、お兄さんに「死ね」や「うざい」などと言うだろうが。まあそれはそれだ。特に違和感など感じない。私だって

多少なりそういう猫かぶりじゃないけれど、そういうことをしないわけでもないから。

『さつきからさー、あたしに彼氏なんかいないって言うてるでしょ』  
『』

『えーそんなあ……アタシらは桐乃ことを心配してえ……いたた、叩かないでよ桐乃お』

『だめ、ちゃんと反省しないと許してあげないっ』

本当に心配していたかは定かではないが、まあこの話もこれで終結となるだろう。お姉さんの口からきいたわけではないが、彼氏はいらのだろう。そのうち私にはこっそり教えてくれるかもしれないというだけわかったので、今はそれで満足だ。

「まあまあお姉さん、そこまでにしてあげようよ」

満足した私は、もうドアの前で張り付いている意味がなくなったので、部屋に入ってお姉さんの加奈子に対する制裁をやめさせた。制裁といっても、軽く叩いているだけだが。これがお兄さんに対してだと、百倍くらいの力を込めそうだ。

「か、楓っ、もしかして……聞いてた？」

「うん。バツチシ」

別に隠すことではないので、正直に聞いてたことを告白した。そう言つと、お姉さんは恨みがましそうな目で私を見てきた。別に恥ずかしがらずともいいのに。

「み、みんなにも言つたけど、彼氏なんかいないからねっ」

「うん、わかってるよ。彼氏なんかいないよね」

「……ほんとにわかってんの？」

「わかってるわかってる」

どうやらお姉さんは信じてくれないようだ。私を訝しむような目で見つめてくる。返答が棒読みだったのがいけなかったか……

「ま、まあまあ桐乃……そのへんで……」

ここであやせの助け舟が入った。やはりあやせはできる子。

「うーん、どうしよっかなー。詮索やめてくれるんなら、許してあ

「でもいいケド……」

その言葉にみんなは頷いた。というか、詮索やめてくれるんなら、という発言がさらに信憑性を増すことになると思うんだけどね。とりあえず私もお姉さんの言葉に頷いておくことにした。

「あ、そうそう。桐乃と楓って、お兄さんいたんだね？ 知らなかったよ」

「……う……そ、それが？」

「うん。いるよ」

そういえば言っ てなかった。学校やあやせたちと遊ぶときには、お兄さんの話題なんかも出なかったし、もちろん一緒にいるなんてこともなかった。そうすると今日が初対面か。なんだか感慨深い。特に何が、と言われても答えられないけれど。

「桐乃、なんでそこで嫌そうな顔するの？ 優しそうな人じゃない？」

こんなことお兄さんが聞いたら嬉しすぎて飛び上がってしまうのではないだろうか。もし盗み聞きしていたらすでに飛び上がっているのだが。

「えー？」

お姉さんはあやせの言葉に肯定的な反応を示さない。それはそうだ。なぜならお兄さんとお姉さんの仲は良くないからだ。最近“例のもの”のおかげで多少仲は改善されているとはいえ、すぐに仲良くなるというわけではない。この反応も致し方ないのかもしれない。「眼科行つたほうがいいよ……？ それゼツタイ目の病気だつて」

「そ、そんなことないと思うけど………たぶん」  
少し言いすぎな感はあるけれど、お姉さんの目から見るお兄さんというのはそう見えるのかもしれない。あやせもそう聞いて自信を無くしているように見える。

「あ、楓はどう思うの？」

お姉さんだけでは判断できないと踏んだのか、私にも聞いてきた。別にあやせがそこまでお兄さんの人柄を判断する必要はないと思わ

なくもない。でもまあ、答えない理由もないか。

「私かあ。まあ優しいけど、馬鹿だね」

いろいろなところを端折って説明した。間違っているところはな  
いと思う。

「あ、馬鹿だけど優しいんだね。よかった」

よかったかどうかはわからないけれど、お兄さんは馬鹿だけど優  
しい。それは言える。

「あたしも見た見た。チラッだけど。なんかあ、桐乃たちに全然似  
てなかったよね？」

確かに全然似てない。万能美少女と天才美少女と凡庸青年。ちな  
みに天才美少女が私だ。似てないだけで別段悪いことはない。それ  
に凡庸ということは言い換えれば欠点はあまりないということでも  
あるし。

「むしろ地味っていうかあ——」

「あはは、言ってる言ってるーっ。なんて言ったらいいかなあ……  
あ、アレアレ。十年後とかあ、フツツにしょぼい中小企業とかに  
勤めて、課長とかやってそうじゃない？」

「うっわビミョー……でもわかる。あの顔はそんな感じだった」

周りの子たちは楽しそうにそんなことを言っている。言いたい放  
題に。おそらくこの会話も聞こえているだろう。お兄さんに同情せ  
ざるを得ない。

それにしても、課長なら十分に家庭を養えるくらいの貯金はでき  
ると思うのだが。それに普通の中小企業といっても、まず就職でき  
ない人がたくさんいるのに就職できるだけマシだと思う。大手に就  
職できる人なんて僅かにしかないのだから。プラス課長なんて勝  
ち組に入るのではなからうか。そして凡庸だから特筆していいこ  
ろはないと思うけれど悪いところもない。まさに結婚相手としては  
優良物件だと思う。

と、なぜか自分の兄に対してそんな評価を下してしまった。まあ  
彼女たちが言っているしょぼくない人というのは、超イケメンで芸

能人や社長か何かなのだろう。先ほどの評価を彼女たちに言っても仕方ない。中学生だし。私も中学生だけど。

というか、ものすごく居心地が悪い。

「あれ？ 桐乃お……なに黙り込んでんの？」

「……別に？」

私だけでなくお姉さんも黙り込んでいたみたいだ。いつものお姉さんなら、彼女たちに賛同していたのだが……。やはり“例のもの”の影響か、お姉さんのお兄さんに対する評価はそこまで低いわけではないようだ。

どうしたらいいのかわからないのか、お姉さんは私を見つめてきた。私もこの空気をどうしたらいいのかわからない。姉妹そろって居心地の悪さを感じている。自分の家なのに。どうにかして話題を変えたいが……

あやせも苦笑いでその場を見ているだけだ。

まあ、たかが女子中学生に言われたくらいじゃお兄さんもそこまで傷つかない——なんてことは……どうかなあ。

## 11話（後書き）

前の話をざっと読み返してみたんですが………なんだこの駄文とてつもなく恥ずかしい気持ちでいっぱいであります、はい。

そしてなんで過去の自分はこんな展開にしたんだオラァ！ と叱りたくなりました。

文の書き方が変わっているかと思えます。すいすすすん。

といっても相変わらず駄文ですので、今後もしよろしく願います。

## 12話（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。言い訳はありません。

前回の投稿の感想で、文間をあげたほうがいいという指摘があり、いろいろ試してみたのですが、しっくりこなかったものでいままでもどおりの書き方で投稿しようと思いました。申し訳ありませんが、そこらへんは目を瞑ってください。

どうしても読みにくいという方がいましたら感想のほうにお願いします。もう一度考えます。

## 12話

私たち姉妹が何とも言えない気まずさを覚えて数分後、時間にしては数分だが体感では何十分にも思える。我が家に救世主が現れた。救世主というには大げさだが。

「あ、私出るね」

「あ、いいよつ、あたしが出るから!」

その救世主は何かというと、我が家に来客を知らせるチャイムが鳴っただけである。いつもは来客に応じる行為自体が面倒くさくて嫌なのだが、今回はこの場から席を外すのにいい口実になる。

その考えはお姉さんも同じだったようで、私が腰を浮かせる前にさつさと部屋を出て行ってしまった。お姉さんと私のこういう行動の早さの違いが悔やまれる。あやせが苦笑いで私を見る。何気につらい。

周りの子たちはなぜお兄さんの話題でここまで話することができるのか、いまだにお兄さんをネタに何やら話している。「もし彼女がいるなら、その子のあだ名は絶対地味子だ」などと言っている。お兄さんは頑として認めないが、お兄さんとても親しい麻奈美さんのことを、お姉さんは地味子と呼んでいる。お兄さんはそういうと怒るので私は言わないようにしているけれど。しかしさすが女子中学生。彼女ではないが、あだ名を当てるとは……侮れない……

することがないので真ん中に広げてある雑誌でも読もうかと手を伸ばしたとき――

「じゃじゃーん! みてみて!」

お姉さんがすごいテンションの高い声で部屋に入ってきた。先ほどとは比べ物にならないくらい上機嫌だ。腋にはなにやら箱を抱えている。それをお姉さんは円になっているみんなの真ん中に置いた――  
「ってこの箱……」

「なになに――うわ!“エタナー”じゃん!」

「すご！ いいなあ」

「エターナル・ブルー」。通称“エタナー”。超人気の化粧品メーカーだ。あまりの人気にネットはもちろん、どこかしこも売り切れの超人気メーカー。その包装がなされた箱が今目の前に置かれている。雑誌の関係者とか伝って手に入れている私でもなかなか手に入らないレアもの。それでも手に入りやすくなったほうだけど……。モデルになる前の頃の苦労は図らずとも判るというものだ。すごくとってもすさまじくチョー羨ましい。しかもこれ……

「しかもこれ今年の新作じゃん！ よく手に入ったね！」

そう、今年の新作なのだ。それを手に入れるのがどれくらいすごいかというと——少々熱くなってしまったようだ。でも言い訳をさせてもらうと、私が頑張っても入手できなかった代物がいまこの場にあるのだから仕方ないと思う。前々から予約していたのだからうか。そうだったのなら私の分もついでに予約してくれていれば……

「へへん！ いいでしょ！」

「お姉さん、それどうやって手に入れたの？」

今すぐ身を乗り出してお姉さんに問い詰めたいところだけど、こ

こは冷静に努めて入手経路を聞くのが正解だろう。

「ええと、それがね、なんか兄貴がくれた」

「お兄さんが？」

「うん」

お兄さんが？ 何の意図があるのだろう。単純にお姉さんの機嫌取りか……？ だとしたら私の機嫌も取ってほしいものだ。これからお兄さんにもうすこし甘えてみるか？ どうせへたれだからいつもみたいに手に入れてくれるかもしれない。男に貢がせている悪女みたい見えなくてもいいけれど、兄妹だしそこらへんはご愛嬌。

お姉さんは本当に嬉しそうにエタナーの箱を見ている。私としては手に入れることができなかったこともあり悔しいが、お姉さんの顔を見ればまあいいかなとも思える。

「へえ、やっぱり桐乃のお兄さんって優しい人なんだね」

「そ、そうなのかな……」

あやせは核心を得たような顔をしている。お姉さんも先ほどのようなきつい言葉を発さない。恐るべし、プレゼント効果……

「桐乃！」

「ッ!？」

と、そんなことを思っていると廊下からドンドンという床を踏み鳴らす音が聞こえてきて、そのまま私たちがいる部屋の前まで来ると勢いを止めずに部屋のドアを開けてお姉さんの名前を大きな声で呼んだ。お兄さんだ。走ってきたことからわかるように、お兄さんの顔は相当焦っているように見える。

私はもちろんお姉さんやあやせ、その他女の子もびっくりしてお兄さんのほうに目を向ける。お兄さんは見られて少しビビったようだ。

「ちよつとやだっ!? なに勝手に入ってきてんの!」

一足先に状況を把握したお姉さんがお兄さんにそう問い詰める。誰だってこんな状況になった場合、同じ反応をするだろう。私だって勝手に部屋に入ってこられていい思いをしない。

「あ……いや……その、な？」

お兄さんは話の順序がついていないのか、口を開けたり閉めたりしている。頬を、冷や汗かわからないが伝っているのが見える。

お姉さんはお姉さんで、そんなお兄さんをゴミを見るような目で睨み付けている。これが原因でお姉さんに嫌われても、お兄さんは文句は言えないだろう。

「勝手に開けてごめんな? 申し訳ない。えっと、ちよつとした手違いがあつたんスよ……」

引きつった笑みを浮かべながら、ペコペコ頭を下げて言う。そう言いながらも、足はさらに部屋の中へと向けて一歩踏み出した。お兄さんの焦り具合からやばいということはわかるが、私たちにはそれが何なのかわからない。推測できるのは、お姉さんが先ほど持ってきたエタナーの箱のことではにか手違いがあつたのだろうという

ことだけ。どつきりで渡したかったのであろうか。しかしお兄さんがそこまで焦るような理由には思えない。

「は？ 手違い？ いいから出てって。早く、いますぐ」

お姉さんはそう言いながらお兄さんに詰め寄って、部屋の外に押し出そうとしている。お姉さんも相当イライラしているようだ。それも当然のことだろう。

「ちょ、待て……そうじゃないんだ！ 話を聞いてくれ……」

それでもお兄さんは引く気は無いらしい。どうしてもお姉さんに話を聞いてほしいようだ。

「うるさい！ 出てけって言ってるでしょ！」

お姉さんもお姉さんで譲らない。お兄さんを押す力が増したように見える。

「いや、だからさ……ちょっと話を聞いてくれって！ ちょっとだけだから！ それさえ終わったらすぐ出ていくから……！」

「くどい！」

「ああもう……！ 箱だよ箱！ お前がさっき俺の手からひったくった箱！ 返してくれよそれ！」

一向に進展しないやりとりを無理やりお兄さんは進めた。私の推測通り、原因はエタナーの箱のようだ。それにお姉さんはくれたって言うてたけれど、実はひったくって行ったものなのか。そういう理由ならお兄さんがここに来る理由もわかるような気がする。

「はあ？ そんな理由で入ってきたわけ！？ 一回くれたもんじゃん！ イミ分かんない！ いいから出てけ！」

それでもお姉さんは“貰ったもの”と言いたいらしい。お姉さんはそろそろ限界に近いようである。怒り狂うかもしれない。友達の前だからないとは思っけれど。

「……くっ」

お兄さんは悔しそうに唇を噛んでいる。——と、そんな様子を見るに眺めていた私とお兄さんの目が合った。SOSサインであるうか。

「もしかして、その箱ってお兄さんの彼女が何かへのプレゼント？」  
今度お礼に何を買ってもらおうかなどと思いながらお兄さんへ助け舟を出した。

「——ああ……！ そうなんだよ！ プレゼントでさ、だから桐乃、返してくれよ……な？」

私の言葉にとっさに合わせてきた。洒落っ気のないお兄さんが、プレゼントにこんな入手困難な化粧品をプレゼントする訳がないだろうが。そんな理由もないよりはましだろう。

「え……だ、誰によ……？」

お姉さんはそれを聞いて完全にはないが、少々攻撃の手を緩めたようだ。お姉さんも冷静になればそんなことがあるわけないとかるだろうに。

周りの子は周りの子で、今の発言をネタにコソコソしゃべりながら盛り上がっている。コソコソしているのだと思うが、普通に話し声が聞こえる。お兄さんも聞こえているのか、すぐ居心地が悪そうだ。その前にこの部屋にいる時点で居心地が悪いか。

「お前に言わなくちゃいけねえのか？」

「あつたりまえでしょつ。言わなきゃ返さない」

これは嘘なので相手など教えられない。もしかしたら万分の一の確率でいるのかもしれないが。

それにしてもお姉さんはなぜそこまでお兄さんの彼女とやらを知りたいのだろうか。多少仲が改善されたからといって、そこまで仲が良いとは思えないが。私だつてもしお兄さんにいたら気にならないことはないが、今この状況でそこまで問いただすほどでもない。後で聞けばいいのに。

「ええとだな……そう！ 麻奈美にだよ！ 世話になってるからな、感謝の印としてだな……」

「はああ？ ゼツタイ嘘でしょそれ！ 洒落っ気のカケラもないあんなと地味子にエタナーとかありえないでしょ！ 嘘なら出てつて！」

「お、おい。地味子って言うなって言っただろ？」

「うるさいっ！早く出てっ！」

まったく。お兄さんは嘘が下手くそだな。架空の女の子の名前でも出しておけばうまく言いくるめられたかもしれないのに。正直者と言えば聞こえはいいが……。しかしお姉さんが毛嫌いしている麻奈美さんの名前を出すとはお兄さんもまだまだだね。

それにしてもお姉さんも、お兄さんがこんなものをプレゼントするなんてありえないってわかってるのに聞き出すとは人が悪い。

「くっ……スマン！」

「ちょ、ひゃっ」

お兄さんはそう言うと、お姉さんの手を振り払い、そのまま二の腕当たりを掴み、体制を入れ替えた。なかなかに見事な体捌きであったと言っておこう。

そしてお姉さんを抱き抱えるような体制になったお兄さんは、箱に目を向け手を伸ばした。

「え、えーと、ちょっとごめんな？」

お兄さんの手が箱に届くというところで――

「いひ」

加奈子が意地悪そうな笑みを浮かべて、お兄さんが箱を取る前に加奈子が箱を取った。

「ぐっ……。ははは、いたずらはやめてくれよ」

今の行動か頭に來たのか、笑みを浮かべてはいるがイライラしているのが目にわかる。それでもこの場で怒らないのはさすが高校生といったところか。

加奈子も加奈子でよく初対面の人に、しかも友達のにこんなことができないかと逆に感心してしまう。私なら目も合わせられないかもしれない。

お兄さんは箱を受け取ろうとさらに手を伸ばしたが、加奈子はそれを避けてベッドの上に逃げた。お兄さんはまだ笑みを浮かべているが、内心相当なものだろう。ご愁傷様。

「いい加減にしてよ！ 人の友達が遊びに来てるときくらいおとなしくしてられないワケ！」

逃げた加奈子に向かってさらに手を伸ばしたところを見計らってお姉さんは拘束から抜け出し、胸倉を掴んでそうお兄さんに怒鳴った。マジギレ、である。怒られていない私たちでも萎縮してしまうほどの威圧だ。こちら辺はお父さんの血を受け継いでいるのだ。私はというと、どちらかというとお母さんよりだ。

お兄さんも怒鳴られて相当ビビっている様だ。みんなが帰った後が怖い。

「桐乃っ！」

「……な、何よ……怒ったワケ？」

しかしすぐに体制を立て直し、お姉さんを睨み付けてそう言った。さすがのお姉さんも、お兄さんの威嚇で一瞬怯んだ。その隙を見逃すお兄さんではなく、一度息を吸うと大きな声でこう言った。

「あつ、あんなところにゴキブリが！」

「……えっ？」

お兄さんが部屋の隅に向かって指を差しながらそう言うと、私も例外でなくみんなはその方向へ目を向けた。しかしそこにはゴキブリはいなかった。なんとも古典的な罠に引っかかってしまったようだ。屈辱である。

しかし、ゴキブリは人類の敵である。速いうえに黒いしテカテカしている。この世の気持ち悪いというものをすべて背負ったような生物だ。私の中の、今すぐにでも殲滅すべき生物ベストテンの堂々の一位だ。しかしそれが無理なのも知っている。なぜならやつらは何億年も生き抜いてきたからだ。それでさらにやつらは――

つまり何が言いたかったかという、いくら天才な私でもこんな古典的な罠に引っかかってしまうのも無理はないということ。いつかこの恨みは晴らす。

「わらい！」

「あんっ」

「お、お邪魔しましたあ……」

みんながゴキブリに気を取られている間に、お兄さんは加奈子から箱を奪い取りそのままそくさと部屋から出て行ってしまった。加奈子は加奈子で変な声を出すし。狙って出しているのだろうか。

「このっ……！」

お姉さんは悔しそうにそう言うと、お兄さんを追うために部屋を出て行った。

「……………」

「……………」

残された私たちは完全に置いてけぼりである。廊下からお兄さんとお姉さんが言い争っているのが聞こえる。

「なんか……すごいね……」

「……まあ、ね」

あやせがつぶやいたそれに、私はそう返した。正直こんな光景は、“例の事件”以降しばしば見るようになった光景だ。慣れてしまった。

「止めに行かなくていいの？」

「……まあ、そのうち収まるでしょ」

止めに行くのはいいのだが、お姉さんが怖いので正直な話行きたくない。それにこういう状況になってもなんだかなんだで仲直りか知らないけれど、収まっているし気にすることでもないだろう。

「そうなのかなあ……」

「そうなんだよ、うん」

と、ジュースを飲みながらのんきにしていたのだが、周りの子はそういくわけはなく、野次馬よろしく廊下に見物しに行ってしまった。加奈子が先頭で。

「あ、わたしも心配だから行ってくるね」

残っていたあやせも行ってしまった。あやせの場合は野次馬ではなくお姉さんを心配してのことだと思うが。

私は一人部屋ですることなく、ぼーっと部屋のドアを眺めてい

る。

「……なんか、今日は騒がしいなあ」

そんな独り言をつぶやいたところで――

「「「キヤーーーーーー！？」」」

そんな悲鳴にも似た叫び声が廊下から聞こえてきた。あやせや加奈子たちの声である。何かあったのだろうか。廊下だから階段から転げ落ちてしまったのだろうか。だったら一大事だ――！

「何！ どうしたの！？」

「き、桐乃……」

「うつわー……ちよつとこれは引くよ……う？」

「まさか禁断の恋っ！？ 二人はそういう関係だったの！？」

私が急いで駆けつけてそう問うたけど、みんなはそれに返事をせず目の前の光景に目を向けてそんなことを言っていた。

私もそれに倣い、目を向けてみた。

「これは……」

お姉さんが下でお兄さんが上になって倒れていた。お兄さんの右手はお姉さんの頭の下で、左手は、服がめくれあがって下着が丸見えになっているお姉さんのブラジャーにかかっている。

「「ちつつがーーーーーうー！」」

二人は合わせたようにそう叫んで否定した。それでも周りの子は変わらず『禁断の恋』やら何やらと盛り上がっている。

私にはもちろんただの事故だつてことくらい理解はしている。けれども反対に、今まで極力気にしないようにしていた、お姉さんの“趣味”やお兄さんとお姉さんがやっている“ゲーム”のことが頭をよぎる。この光景は、私にそういう“誤解”をさせるのには容易なことであった。

そして周りの子のそれもさらに手助けをしたというべきか。

うるさい。もういいから、うるさい、うるさい――

「うるさいっ――！」

「……………か、楓…………？」

「……え、なに……？」

「そんな大きな声出さなくても……」

あやせにそういわれてはつと気づいた。先ほどまでうるさかった廊下がしんと静まり返っていた。どうやら無意識のうちに叫んでいたようだ。

「あはは……ご、ごめん……」

苦笑いでそう私は謝った。私を信じられないような目で見るお兄さんとお姉さんが印象的だった。

## 12話（後書き）

正直どついたらいいかわからないぜ……

### 13話

あのごたごたも何とか片付き、いけ好かない女子中学生共は帰った。だがまあ、俺のことを心配してくれた美人女子中学生であるあやせから携帯番号をもらったし、許してやらないこともない。

しかし、あれが本当の美少女って言うんだなあ……。うちの美少女とは大違いだ。やさしい彼女とは反対に、乱暴だし横暴だし……。こうやってみると暴力の塊みたいな女だな……。やつらが帰った後も散々言われたし。ちつとは俺の働きを褒めてくれたっていいんじゃないねえか？ もしあの箱があそこで開かれたら桐乃は終わってたかもしれないねえのによ……。そこところをあいつには小一時間問い詰めたいところだ。……。まあ怖いからそれまできねえんだけどよ……

そして今は、夕食も終えて各々に時間をつぶしてあとは寝るだけという時間。俺は桐乃の部屋の前にいる。一つ用があつて桐乃の部屋の前に来たというわけだ。理由は先ほどのような愚痴を言いに来たわけではない。それよりも大事なことがあつて来たのだ。

「おい桐乃」

「……なに？」

言いながらノックをする。たいして部屋の中は広くないのに、二分も俺を待たせたあと桐乃は出てきた。客人に対する礼儀というものを知らないのかあいつは……

「ちよつといいか？」

「……だからなに？ くだらない理由なら帰って」

当然桐乃にそんな愚痴を言えるはずもなく、心の中で毒づきながらそう言ったが、どうやら機嫌が悪いらしい。さっさと帰れオーラを俺に対して振りまいている。まだ昼間のことを引きずっているのか知らんがよくまあ、お疲れ様だな。

しかし、俺が次に発する言葉を聞けば、桐乃のそんな態度もなくなるだろう。

「用というのは……楓のことなんだが」

「……………入って」

俺がそう言っていると桐乃は少し間を開けて、俺を一度睨んだあと部屋へと招いた。……そんなにいやなら別に俺は明日でもいいんだけどよ。まったくよくわからねえ妹さまだぜ。

俺はそんなことを言うはずもなく素直に従っているわけだが……これは仕方ないことなんだ。男が女に勝てる時代はとうの昔に終わってしまった……。世の男どもは大いにわかってきているだろう。そして部屋に入った瞬間に漂ってくる甘ったるい匂い。前回こいつの部屋に入った時のやつとはまた違うものようだ。飽きっぽいのか知らんがコロコロ変えやがって。きっと将来こいつの隣りを歩く男は、このアロマのようにコロコロと変わるんだろう。うまいことを言ったな、さすがだ俺。

「……なんかその目、ムカツクんだケド。なに？ 文句あんの？」

「俺は生まれつきこんな目だよ！ 言うなら親父がお袋にしてくれ、相変わらずこの鋭さ。こいつを御すには相当な努力が必要だろう。いや、そんなやつは現れねえかもしれないな。なんせこいつは生粋の暴れ馬。俺が保証してやろう。なんの保証だと言われても、俺にもわからん。」

「キモっ……………で？ 楓がどうしたの？」

「お前なあ……………、まあいい。楓な、お前も気づいているとは思うが、昼間の？ あれ？ のことだな」

俺に座布団の一つも超越してくれない桐乃さまは、さっさとして身体で示しながら俺にそう言った。

桐乃も何の話か予想はついてるだろう。なんせいつも俺に対して嬉しそうに楓のことを話す、楓大好きな桐乃のことだから気づいていないということはない。

？ あれ？ というのは、昼間俺が桐乃を押し倒して（あれは事故だ。故意ではない）しまったときに楓が急に「うるさいっ！！」と叫んだことだ。

案の定というか、俺が言うと桐乃は先ほどの威勢はどこへやら、見るからにしょぼくしてしまった。

「まあ、前々から楓の様子がおかしいとは思ってはいたんだがよ、別にこれといったものはなかったから気にしなかったんだよ。だが今日の見て、核心つつかんかなんかよ、やっぱりおかしいなと思ってな？」

桐乃の返事を待たずに続けて言う。これは前々から思っていたことなんだ。前々、というのは具体的にはわからんが、桐乃が？趣味？のことを楓に告白して少し経ったあたりから時々見るようになった。もつと前からかもしれないが、俺が変だなと思い始めたのがそのあたりだ。

平然を装っているようだったが、楓の演技力の低さが幸いしたというか、なにか無理をしているように見えた。その時の俺は別に体調が悪いのか、機嫌が悪いのかと思っでそこまで気に留めていなかったが……

そして今日のあれだ。普段大人しめの楓からは考えられないくらい大声と鬼気迫る顔。正直その場では異変に気付くよりも驚きが勝っていてただ見ることでしかできなかった。だがあいつらの友達が帰って冷静に物事を考えられるようになってもう一度あれを考えてみると、前からおかしいと思っでいたのが今日の前兆のようなものだったかもしれない。

それに気付かなかった昔の俺に対して叱ってやりたいところだが、今はそんなことをするより、桐乃と話し合ったほうがいいだろう。

「……あたしも、そう思っでた。前からなんかおかしいなって……」  
俺が気づいて桐乃が気づかないことなんてないだろう。やはり桐乃も同じことを思っでいた。

「で、なにか思い当ることはないか？」

「思い当ること……うーん……あんたはどうなのよ？」

「いや、正直さっぱり」

そう言う俺に対して桐乃は「つかえないわね」などと言うが、お

前もつかねえな、と俺は心のなかで呟く。

そんな感じで数十分と結構な時間悩んでいると、突然桐乃が「あとなにかに閃いたような声を出し、そのあとすぐに何か思いつめたような顔になった。

「なんだ桐乃。なにか思いついたのか」

「えと……うん。思いついたと言えばそうなんだケド……」

なんだか要領を得ない返答。急にどうしたのであるうか。

「なんだよ。いいから言ってみろ」

俺の言葉に桐乃は数分悩んだ後、やっと口を開いた。

「……あんたが楓のおかしさに気付いたのっていつごろ？」

「親父にお前の？趣味？がバレた少しあとだったな。正確にはわからねえけどな。気づいたのがその時期で、もっと前だったかもしれない」

「そう。あたしもあんたと同じ時くらいに気が付いたんだけどさ……」

……

「で、それと楓の異変がどう関係してるんだ？」

やっと桐乃が口を開いたと思えば、そんなこと訊いてきた。それは今、楓のこととは関係ないと思うのだがどうなんだろう。

そう思い素直に訊いてみたのだが、桐乃はそれを聞くと、明らかに蔑むような目つきで俺を見てから続けた。

「……あんたのその脳みそって何のためにあるの？　すぐ思いつかないワケ？」

「……わりい。思いつかないから教えてくれ……」

目だけじゃなく口でも俺を貶してきた。理不尽なように見えなくてもないが、桐乃にとっては、さっきの問答で気づかないほうがおかしいのだろう。大変腑に落ちないが素直に訊いてみることにする。本当に俺がいけないのかもしれないしな。

「はあ……ま、いいわ。元からあんたになんか期待してないし。……で、話を戻すけど、あんたとあたしの情報をまとめると、楓がおかしくなったのって……あたしの……その……？趣味？のことがバ

したあとくらいからじゃん？」

「ああそうだな」

言わせておけばこのクソアマ！　と思われないが、今そんなことで怒ってもまた話がそれるだけだ。いつかお前を泣かす。

「で、さ……ていうことはさ……あたしの？　趣味？　のことは楓にも言っただじゃん？　それでさ……」

桐乃はそこまで言うのと、俯き黙ってしまった。……だんだんこいつの言いたいことがわかってきたぞ。たしかにそういうこともあるかもしれない。これは全体的に気づかなかった俺が悪いな。桐乃の俺に対する言い分は正しかったというわけだ。言い方はともかくな「つまり、お前の言いたいことは、楓がお前の？　趣味？　に対して何かしら無理してたってことか？」

「……………うん」

桐乃は俯きながら肯定した。しかし、仮にそうだとするならば、おかしい点というのものもある。

「仮にそうだとしよう。でもよ、だとしたら今日のあれはなんだったんだ？　今日はお前は黒猫や沙織とじゃなくて友達と遊んでいたわけだろ？　お前の？　趣味？　のことなんて一切触れることはなかったわけだ。唯一触れそうになったのも俺が阻止したわけだしよ」

『黒猫』と『沙織』というのは最近桐乃がSNSとやらで知り合ったやつで、今日来た桐乃の友達とは違う友達なのだ。何が違いかというと、桐乃の趣味友達かそうじゃない友達かという違いだ。今日来たのはそうじゃない友達だ。

知り合ってから今日まで桐乃は二人と結構遊んでいたらしい。いままでそういう趣味友達というものがいなかったこいつは嬉しかったんだろう。そう思えば俺にとって地獄のようなあのオフ会もよかったんじゃないかと思える。

話が逸れたが、今日はそういう友達と遊んでいなかったなので当然、楓にもそういうオタクなものは目に触れるはずがない。

なのに普段冷静で大人しい楓は取り乱した。もし桐乃の仮定を取

り入れるのならば、それはおかしいのではないだろうか。

「そう、ただけだよ……」

「いつそのこと本人に訊いてみるか？ 案外単純な理由かもしれないしよ？」

俺としてはここでもう一時間近くこんなことをしているのですっさと結論を出してしまいたいのである。こんなところでぐだぐだしていても、楓の無理している原因がわかるわけでもないし、解決するわけでもない。ちゃちゃっと訊いて、ちゃちゃっと楓を元気にしてやる方がいいだろう。

「でも、あたしの？ 趣味？ のことで無理しているって言われたらどうしよう……」

「そんなものそんなときじゃねえか。もしそうだとしても、俺も一緒に考えてやるからよ。それに、そうだと決まったわけじゃないしな？ 楓のことだから案外、失恋かなんかで落ち込んでいるかもしれないじゃねえか。あいつ結構根に持つつて言うか、引きずる傾向あるしよ。だしたら相談に乗ってやれるお前の出番じゃねえか、な？」

「うん、そうだよね、うん」

「なら善は急げだ。まだ楓なら起きていると思うし、行くぞ」

「うん」

本当にこいつを相手するのは疲れる。楓を相手するのは俺の精神的ダメージな意味で疲れるが、こいつは文字通り疲れる。

俺の必死な問いかけに桐乃も意を決したらしく、直接訊きに行くと言ってくれた。いつもこんなくらい殊勝だったらいつも可愛いものになあ……。なぜあんな頑固女になってしまったのだろう……

そんなことを思いながら、俺たちは部屋を後にした。

### 13話（後書き）

4000文字と短くなってしまった。

あとここから3、4話は京介パートになりそうです。

## 14話

「楓、ちょっといいか？」

「はいはいちょっとまって——何？……二人そろってどうしたの？」

俺の呼びかけに、楓はすぐに答えてくれた。桐乃とは大違いだ。そして楓は俺たち二人そろっての登場に疑問符を頭に浮かべている。

「いやまあ、ちょっと聞きたいことがあってよ、中、入っていいか？」

「ああうん、いいよ。入って」

楓に促されて部屋へ入る。

桐乃の部屋と違って、楓の部屋は落ち着いている。どちらかというと、桐乃の部屋はかわいい系という部類に入るところのだが、楓の部屋は大人っぽいという印象を受ける。たいてい部屋は広いわけでもないのに、なんだか開放感がある。

なんだか最近楓はインテリアに凝り始めたようで、よくそういう関係の雑誌を読んでいるのを見かけるようになった。おそらくこの部屋もその影響なんだろう。

いままではきれいにしてある普通な部屋だったんだが、最近楓はモデルを始めたせいかな金を持つようになり、それでいろいろ買ったんだろう。人間金を持つと変わると言うが、そういうもんだな。それに背伸びをしたいお年頃というのもあるだろう。

まあ、桐乃みたいにオタクグッズに金を使うよりはよっぽど有意義だと思うよ。

あとは稼いだ金で俺に日ごろの感謝としてなんかプレゼントをくれると最高なんだがな。そんなことを楓にいつでも鼻で晒われるだけだろうがな……

「ああ、勉強中だったか。邪魔だったか？」

「ううん。片付けの途中だったから大丈夫だよ」

楓の勉強机に目を向けると、教科書やら参考書が広がっている。

……そういえばこいつ、模試で全国トップなんだっけか。モデルなんか始めるし、桐乃とも遊んでるしで忘れてたわ……

つつかなんでモデルやってんのにそんなに点数とれんだよ。俺は問い詰めたいねっ！ 問い詰めたところで「日ごろの予習と復習だよ」とか当たり前なこと聞くんじゃないやねえよ、みたいな顔されるんだけどな。

麻奈実に家庭教師してもらって平均より少し上の成績の俺が馬鹿に見えるじゃねえか。

そついや、桐乃が勉強している姿なんて見たことがないな。県で五本にはいる点数を出したとかどこかで聞いたが……。俺から見たら真剣にオタクやってる、アホで馬鹿なギャルにしか見えねえんだがなあ。

それに陸上もすごいらしいし、モデルもやってるしで……。こいつら二人はどうやって日々を過ごしているのだろうか。ものすごく気になるところだ。

「それで、私の素晴らしい部屋を眺めるのはいいけど、とりあえず座ったら？」

そう言つて、俺と桐乃にすごい座り心地のよさそうな座布団を寄越してくれる。それにしても座布団までよさそうな使ってるし、金つかつてんなあ。俺がこんなことしても、どうせ妹二人には似合わないやら親父には無駄遣いするなとか言われるだろう。それ以前に、そんなことしようとも思わないが。

そういえば、さつきから桐乃は言葉を一切発していない。やつぱり無理させていると心配なのだろうか。

「で、さつきも訊いたけど、二人そろってどうしたの？」

「ああ、ちよつと話があつてな……。ほら、桐乃」

楓は早く本題に入ってほしいようだ。それはそうか。なんだかん

だ言って時間はもう遅いし、寝たいのだろう。楓の顔を見ると、眠たそうな顔をしている。

桐乃は俺の催促に一瞬嫌そうな顔を浮かべ、俺を一睨みしてから楓の方へ向き、おおきく深呼吸をした。こいつが相当緊張してるのはわかった。こういう仕草がなんかこう、いつもの桐乃の態度と違って、ギャップと言うか、かわいいところもあるよなって思っってしまう俺は馬鹿なのであろうか。

「……はあ……、よし。楓、怒らないで聞いてほしいんだケドさ？」

「あ、うん」

楓はなんのことかと疑問で仕方ないだろうが、話を進めるために桐乃の言葉を肯定した。

「ちよつと前、あたしさ……親父に、バレたじゃん？」

「う、うん」

楓はこれでなんの話かわかったようだ。そして楓の反応も少しおかしい、やはり楓は何か桐乃の趣味に対して思うところはあったということだ。

「楓にはいつか言おうと思ってたんだけど、心の準備というかなんというか、そういうのが整わなくて。あんな形になったけど、楓に言うことができてよかったとあたしは思ってる」

「……………」

「あたしが楓に打ち明けたとき、そのとき楓はあたしのこと応援してくれてさ、すごく嬉しかった。だから調子に乗ってたのかもしれないけど……あたしのコレクションとか楓に見せたりしてさ。けど……なんか楓の様子がおかしいなって最近思ってきたの」

「そ、そうかな？」

真剣な眼で話す桐乃と反対に、楓はうろたえている。最後らへんの、おかしい、という単語が出たとき楓は一瞬しまったという表情を出したのを俺は見逃さなかった。

「うん、なんか……あたしがDVDとか見せたりするとちよつと反

応がおかしくなるときがあるし……まあそれは気のせいかなと思っ  
てただけど、今日の……楓がいきなり大声だしたときさ……楓っ  
て普段冷静だからああいう取り乱すなんてこと起こさないからさ」  
「あ、ああれはそのみんながうるさかったから一気に収めようとし  
たというかなんというか」

「うそつかなくていいから、楓教えてよっ。あたし頑張るからさっ  
「で、でも……」

「楓がもしあたしにどこか直してほしいことがあったらあたし直す  
からさっ。お願い……！」  
「うっ……」

楓は桐乃の迫力に体を縮こませてしまった。

桐乃は桐乃で本当に楓のためならなんでもするというような眼を  
して楓に詰め寄っている。……本当に好きなんだな、楓のこと。い  
まどきこんなに妹のことを真剣に思ってくれる姉なんてそうそうい  
ないだろう。

楓は十分ほどうつむいていたが、言う決心が付いたのか、顔を上  
げた。いつの間にか時刻はもう深夜を回っていた。

「お姉さん。怒らないで聞いてね？」

「うん。怒らないよゼツタイに」

楓はなぜかもう泣きそうに瞳を潤ませている。それほどまでに思  
いつめていたということなのか、俺にはわからない。

「お姉さんが私に趣味のことを打ち明けてくれたとき、私は嬉しか  
った。これは私の本当の気持ち」

「うん」

桐乃は楓のその言葉を聞くと嬉しそうに顔を綻ばせた。

「だけどね、同時に嫌だなんて思った」

「嫌……？」

「うん。怒らないでね？ 私は小さいころからお父さんに躰られて  
きてさ、そういうのはダメなんだって思ってたんだ」

桐乃はそう言われると俯いてしまった。そりゃそうだよな……い

わゆる桐乃を全否定されたようなものだもんな……桐乃としては相当ショックだろう。

「でも私だってダメだって思っても、なんだかんだ言ってアニメも漫画も多少見たり読んだりしているから、お姉さんみたいな……その……オタクっぽいものもその延長線上なのかなって思ってた、理解はできるよ?」

「……うん」

「それだけならよかったんだ。私も応援しようって思えるから。だけれどね、やっぱり?あれ?は私はどうしてもダメなの」

「?あれ?……?」

もう桐乃は涙声だ。顔は見えないが、必死に涙を堪えているんじゃないだろうか。俺だって、最愛の妹にこんなこと言われたらこうなってしまうだろうな。実際桐乃を手伝ってきた俺だって、楓の告白は結構胸にぶっ刺さる。

「うん……あの、その、18禁のあのゲームは……正直、気持ち悪いというか……」

その言葉を聞いたときの桐乃の顔を俺は当分忘れることができないだろう。信じていたものに裏切られたような、なんていうか、絶望を長時間じつくり煮込んでさらにトッピングに絶望を加えるなんていうわけのわからない例えが出てくるくらいに、絶望した桐乃の顔を。

「そして18禁ゲームをお姉さんと一緒にやっていて何も思わないお兄さんも……」

うそだろ……?

俺は呆然とするしかなかった。

「でもね? 私はお姉さんもお兄さんも好きだよ。決して嫌いになつたりしないよ。だからお姉さんもお兄さんも私のことを嫌いにならないで……」

楓は言い終わると泣いてしまった。いままでずっと我慢してきたのだろう。楓の目の前でエロゲーをやったことなんて何度もある。

本当は気持ち悪いと思いつつも笑顔で――

もしかしたら途中でトイレに行くといって出て行ったときは吐いてきたのかもしれない。

――そう思うと、どうして俺は今まで気づかなかったんだと自分を殴り倒して蹴り倒したい衝動を感じた。

桐乃の方は泣いてはいないようだ、もう俯いてしまった顔を上げる気力がないらしく、プルプルと体を震わせている。真正面から気持ち悪いと言われたのだ。俺ならともかく、楓に。桐乃の心中は察することはできないし、どうしたらいいのかもわからない。

桐乃と楓にどう声をかけていいのかわからず、俺はただいることしかできずにいた。

「……そうだね。楓がそう思うのも当然だね」  
「桐乃……？」

俯いていた桐乃が、突然そんなことを言い出した。

「そりゃ、気持ち、悪いよね。気持ち悪いって言われても仕方ないよね」

「おい……どうしたんだよ？」

「ごめんね、楓。あたし、楓のことなんも考えてなかった。これじゃ姉貴失格だね」

桐乃は一人で勝手にそんなことを言い続ける。

顔は見えないが、ひとつ、きらりと光るものが桐乃の顔から下へ落ちた。

「……もう、夜遅いね。楓も眠いでしょ。あたし部屋に戻るよ」

「あつ、まって、お姉さん……」

桐乃はそう言つと、楓の静止の声に応じず、楓の部屋を出て行ってしまった。

「……じゃあ俺も。おやすみな」

桐乃を追うために俺も楓に一言挨拶すると逃げるように部屋を出た。楓の顔をまともに見ることができなかった。

最初は桐乃を追おうと部屋を出たが、俺が部屋を出るところにはす

で桐乃は部屋に戻っていて、電気も消えていた。相当ショックだったんだろう。事実俺もダメージがかい。

そんなわけで、俺も部屋に戻り、すぐにベッドに入った。時間的な問題もそうだが、なんかもう他に何かする気力が起きなかったからだ。

翌朝——正確には今日の朝だが、楓と顔を合わせるのが気まずい。楓の顔をしっかりと見ることが出来るだろうか？

そんなことを思いながら、寝た。

## 14話（後書き）

お久しぶりです。なんかもうすいません。

定期的に投稿できるようになりたいです。だれか叱ってください。

そしてまた4000字しか書いてない。私は吊ったほうがいいのでしょうか？

## 15話

本日の授業は終わり今は学校から自宅へと帰る途中、俺は寄り道をして近くの公園のブランコに腰かけている。

「はあ〜」

足取りがうまく家へと向かないのでこうして道草を食っている。

それはなぜか、考えるまでもないが楓のことだ。今朝は目を合わせるのが精一杯であった。楓のほうはおそらく無理していたのであるが、いつも通りの様子で俺にも接してきてくれた。俺もそうすればよかったのだろうが、そっけない態度を取ってしまった。

桐乃は陸上部の朝練で早くに行ってしまったので様子はわからない。だがいつも通りとはいかないだろう。昨日は相当なショックを受けただろうし。

「ずっと気になってたんだけど、きょうちゃん、どうしたの？ 今日朝からため息ばかりついて」

「麻奈実……まあ、その……なんでもねえよ」

隣のブランコには麻奈実が腰かけていて、心配そうに俺に話しかけてくる。

学校の帰りというのは毎日麻奈実と帰っているのですが、当然今日も一緒に帰っている。俺は家に帰りたくなかったので麻奈実に無理を言っただけで公園についてきてもらったのだ。

麻奈実が家に帰ってから勉強があるので、最初は帰ってもらおうと思ったのだが麻奈実は快く俺の注文に応えてくれた。

自分勝手に申し訳ないと思うが、これは正直ありがたかった。とりあえず隣に誰かいてほしかった。女々しいと思うかもしれないが、それほどに昨日の出来事は衝撃的だったのだ。

俺のエロ本をお袋と一緒に笑顔で探す楓が、エロゲーに隔意を持つとは思えなかったし、あんなに思いつめていたのも知らなかった。そして昨日の反応を見ると、俺と桐乃に多少なりとも嫌悪感を覚え

ていたのは間違いないだろう。

桐乃には前々から嫌われていると知っているので嫌悪されているとしてもそこまでシヨックはないのだが、全国にいる兄妹よりは仲が良いと思っていたもう一人の妹、楓にもそう思われていたというのは俺の想像以上にシヨックが大きかった。

だからこうして高校生にもなって家に帰りたくないなんて小学生みたいな行動を起こしている。

「……もう、さっきからそればかり。悩み事があるなら、わたしで良ければ相談に乗るよ？ い、いつもきょうちゃんと一緒にいるんだからさ。……きょうちゃんがわたしじゃ嫌って言うなら無理しなくてもいいけど」

「ああ……すまないな麻奈実……そういうわけじゃないんだけどな……」

「………もうっ」

ちなみにこのやり取りはここにきて六回目だ。普通なら呆れて帰ってしまったもおかしくはないのだが、こうして麻奈実はずっと俺のそばにいてくれる。本当に助かっている。麻奈実は将来いい奥さんになるだろう。そう言ったら調子に乗りそうなので声には出さないが。

そして別に麻奈実に相談したくないというわけではないのだ。ただ、これは俺の家族の問題であって、麻奈実に相談していいのか判断がつかないのだ。

だけど麻奈実に相談すれば解決するかしないかはともかく、真剣になつて俺の相談に乗ってくれるかもしれない。

「……麻奈実」

「なに、きょうちゃん？」

「相談……乗ってくれるか？」

「……うんっ、いいよっ」

まあでも、このまま何もしなかったら何も始まらないし変わらない。それに麻奈実は相談に乗ってくれると言っているんだし、それ

に甘えることにしようじゃないか。

俺はそんな言い訳を自分にして言ったが、麻奈実嬉しそうに顔を綻ばせて答えてくれた。ただ俺の愚痴という名の相談に、何がそんなに嬉しいんだろうか。むしろ嬉しいのは俺のほうなんだが……お節介焼きのお婆ちゃん、そんな言葉がぴつたりと当てはまる。本人に言うとはねるので言わないけどな。

「相談というのはな……楓のことなんだ」

「桐乃ちゃんの妹さんだよな？ 楓ちゃんがどうしたの？」

麻奈実は楓と何度か面識があるのですぐ誰かわかったようだ。

「まあな。んでな？ その内容ってのが——ってことなんだよ」

「うん、うん。つまりきょうちゃんは楓ちゃんに嫌われてるかもしれないくて、そして桐乃ちゃんも楓ちゃんに嫌われてるかもしれないくて、仲直りしたいんだけどどうしたらいいかわからないっていうことだね？」

「うっ……ま、まあそういうことだ」

俺は麻奈実に昨日の出来事を桐乃の趣味云々の話を除いて話した。でも全部抜いてしまったら相談にならないので、とりあえず趣味、としか言わないで相談してみた。

麻奈実から返ってきた言葉は、本当にそのまま俺が思っていたことだったので少したじろいってしまったが、強がって否定することでもないので肯定した。

「うーん……いまどきの女の子ってわたしよくわからないけど、その桐乃ちゃんの趣味っていうのが楓ちゃんにはちょっと受け入れられなかったんだよね？」

「まあな。でも受け入れられなかったって言うても、一部だけだかな。それさえ楓が受け入れてくれればどうかなと思うだがな……。それにしてもいまどきの女の子って……お前も一応はピチピチの女子高生じゃねえか」

「やだきょうちゃん……ぴちぴちの女子高生だなんて……えへへ」

麻奈実は手を頬にあてて体をくねくねさせながら照れている。…  
…これって一昔前の反応だよな……前言撤回、やっぱりこいつはお  
ばあちゃんだ。

「話逸れちゃったけど、楓ちゃんのことだね。うーん……その桐  
乃ちゃんの趣味っていうのが良くわからないからなんとも言えない  
けど、受け入れさせたいなら、ちよつと強引にでも楓ちゃんにもそ  
の趣味っていうやつを体験させてあげればいいんじゃないかな？  
そしたら見方も変わるかもしれないし」

麻奈実を改めておばあちゃんと認識すると、そのおばあちゃんは  
俺に案をだしてくれた。

強引にでも楓に桐乃のエロゲーをやらせるか……それはちよつと  
やばい気がする。最悪仲直りどころか口も聞いてくれなくなるかも  
しない。

「案を出してくれたのに悪いが、強引にやらせるっていうそれはち  
よつとまずいかもしれない。仲がさらに悪くなる可能性があるな。  
ただ、体験させるっていうのは悪くはないかもしれない」

仲直りするには、絶対的に楓に桐乃の趣味を受け入れてもらわな  
ければならないのだ。桐乃がオタクをやめるっていう手もあるが、  
桐乃がオタクをやめてしまつては桐乃ではなくなつてしまう気がし  
て、それはどうも選択しにくい。だから楓には全てでなくてもいい、  
桐乃のエロゲーに対して少しの理解を示してもらわなければいけな  
いのだ。

今日の朝から今までずっと考えて、おそらく楓は桐乃がエロゲーを  
やっていることにショックを受けていたんだろう、という結論に至  
った。楓は桐乃を尊敬している。それは俺から見てもよくわかる。  
そして楓自身は気づいていないかも知れないが、あいつは何かと桐  
乃と自分を比べたがる。だからあいつのイメージに合わない読者モ  
デルも始めたし、他にも思い当たることがある。

だから教えなくてはいけない。ただ単に桐乃はキャラを愛でるた  
めにエロゲーをやるのであつて、世の男どもがやる？そつという目的

？のために使っているわけではないのだ。

それならば楓も多少は考えが変わるだろう。あいつはエロゲーはただだけどアニメとかならまあ許せるみたいなこと言ってたしな。

「——きょうちゃん、わたしの話聞いている？ さっきからぼーっとして」

「あ、ああ、すまない。聞いてなかった……」

「もうっ、今度はしつかりきいてよねっ」

どうやら俺は考え込んでいて麻奈実の話を聞いていなかったようだ。麻奈実には悪いことをしたと思うが、ぶんぷんと怒るこいつを見るのはなかなか癒されるのでたまにはこういうのもいいのかもしれない。

「でね？ 桐乃ちゃんの趣味友達って言うのかな？ そういう人と遊んでみればいいんじゃないかな？ 遊べば桐乃ちゃんも楓ちゃんと仲直りできるだろうし、きょうちゃんも仲直りできるかもしれないしね？」

「ああ……その手があったか」

これが灯台下暗しというやつなのか、そんな手があったな。黒猫と沙織に協力してもらえば仲直りできるかもしれない。沙織は気が利くし、黒猫も桐乃の為なら嫌々言いながらも手伝ってくれるだろう。

「麻奈実、助かったよ。桐乃の趣味友達な、まあ少ないが頼んでみることにするよ。俺じゃ気づかなかつたし、お前のおかげだぜ」

「えへへ……お役に立ててよかったです」

「さて、帰るか」

「うんっ」

俺たちはブランコから離れると、帰路についた。相談に乗ってくれたお礼として帰る途中にジュース一本をおごってやった。我ながらダサいとは思ったが麻奈実は嬉しそうだったのでよししよう。そうして俺は麻奈実と別れて気分よく帰宅し部屋に戻り、部屋着に着替えているところで、どうも桐乃の部屋が騒がしいことに気が

付いた。衣替えでもしているのかってくらいがたと音が響いている。

あいつ、帰ってたんだな。いつもは門限ぎりぎりまで帰ってこねえのに、ずいぶん早いじゃないか。

まあだからといっていちいち桐乃の部屋まで行って何してんだと聞くまでもない。したがって俺は自分の部屋から一階に下りて麦茶でも飲むとしたのだが――

「おっと、わりい」

「……邪魔、どいて」

扉を開けると運悪く桐乃とぶつかってしまった。桐乃はなにやら段ボール箱を抱えており、それを下に運んでいるようだ。

桐乃のこの突き刺すような視線にはだいぶ慣れてきた。慣れてはいけないような気もするが。

「それ、なんだ？」

「っ、そんなのどうでもいいでしょ。早くどいてよ邪魔なんだからノロマ」

桐乃の持っている段ボールなんて俺にとってはどうでもいいものなのだが、どうにも何かつかかるような気がして、聞いてみることにした。

すると桐乃は苦虫を噛み潰したような顔をしながら、俺の体を押しつけ階段を下りて行ってしまった。なんなんだよまったく……。

「――ん？」

桐乃が階段を下りて行ったとき、段ボール箱の中から何かが落ちるのを見た。見た感じ何かのDVDのケースのようだが……。つつか、ふたくらいテープで留めとけよ。

俺は桐乃に落としたものを届けようと思い、それを拾おうとして近づいてみたのだが……

「これはっ……！？」

桐乃が落として行ったものの、そのDVDのケースのパッケージには『星くずういちちメルル』の文字が。

「あの馬鹿——！」

これでなぜ桐乃の部屋が騒がしかったのかわかり、俺はすぐさまあの馬鹿を追おうと駆け出した。

あいつは、自分のオタクグッズの処分をしようとしていたんだ。

昨日楓に言われてそれがショックで、あいつは考えて、オタクをやめれば楓に嫌われなくなる、というような自己完結し現在に至ると

……

そうじゃないんだ桐乃。お前が無理してオタクをやめようとしても意味がないんだ。オタクじゃない桐乃なんて桐乃じゃないし、楓もきつと喜ばない。そんなことお前が一番わかってんじゃないのかよ……

「——桐乃っ！」

「……っ、……なによ？」

「お前、これは」

「……なによ、別に人の勝手でしょ。返して……つか返せ」

桐乃はそういうと、俺の元までやってきて手元にある『メルル』のDVDを奪おうとしてきた。だが俺も渡してやらない。

「さっさと返せ！」

「落ち着けて、おい！」

桐乃は容赦なく俺に蹴りやパンチをお見舞いしてくる。なんだよこの馬鹿力！ ちよつとシャレになんねえってまじで！

「お前がオタクグッズ捨てたって何にもならねーだろうが！」

「はあ！？ 楓はあたしがオタクやってんのがキモくて嫌だって言ってたじゃん！ あんたも訊いてたでしょ！ だからあたしは楓のためにオタクやめるの！ わかったなら早く返せっ！」

「いや返さねえよ！」

やはり桐乃はそう思っていたか。まったくこいつは妹想いなのはいいことだが、それが突っ走ってしまうことがあるから性質が悪い。今も桐乃は俺の手にあるDVDを取ろうと殴る蹴るの暴行を加え続けている。妹にボコボコにされる兄貴、日本中探したってそうそ

ういないだろう。

「お前がこんなことしたってなんもならねえだろ！？ この件は楓としっかり話し合うべきじゃないのか？ それにお前、オタクやめられるのか？」

「……楓のためならやめてやるし」

「じゃあ、黒猫や沙織はどうなる。お前の友達だろ？」

「……どうでもいいじゃんそんなの。あんたに関係あんの？」

「ああ、あるね」

まったく、こいつは素直じゃねーな。やめたくなければやめなきやいいのに、せっかくできた友達も無くす必要はないってのによ。

「あいつらはお前の友達でもあり、俺の友達だ。そんな身勝手に友達やめられちゃ困るんだよ。それにオタクやめて無理してるお前を見るのもこっちとしては本当に困る」

「なにソレ……ただの自己チューじゃん」

「ああ、自己中だ。何が悪い。お前だって楓や黒猫、沙織たちの気持ちも考えずにこんなことしてるじゃねえか」

そう言うのと、桐乃は黙ってしまった。本当に悩んだ末の決断だったんだろが、これでは誰もいい思いはしない。

「……じゃあ、なにか方法はあんの？ あんたまさかこんだけ言っついて無い、ってことはないでしょ」

「当り前だ、ちゃんとある。黒猫と沙織に協力してもらい、楓とオタクなゲームして遊ぼう」

「あんた……正気？」

「正気も正気、大真面目だ。楓は無理してオタクやめてるお前なんて見たくないんだ。だったら楓と一緒にゲームして遊んで、素のお前を見せてやればいいじゃねえか」

なんで俺が大嫌いな妹にこんな力説しなければいけないんだ……。本当に世話の焼ける……

「本当にそんなことできるの？ 楓は嫌だって言うんじゃないの？」  
「大丈夫だ。俺が絶対に楓も参加するように言う。ただお前は楓と

遊べばいいんだ」

「……ふん。いいんじゃない？ あんたにしてはいいこと思いつくじゃない」

「いや、恥ずかしながら麻奈実に相談しました」

「また地味子……。あんた、あたしのこと言っただんじやないでしょうね……。？」

「まあ多少はな。けどどしっかり隠すところは隠したから安心しろ」  
「おおこわいこわい。さっきの妹想いの姉はどこへやら、今は人を一人睨み殺せるんじゃないかなろうかというくらいの眼光を俺に放っている。もう少し兄想いの心は無いのでしょうか桐乃さん。」

「ま、いいわ。あたしは部屋に戻るから。あとそれ返して。少しでも傷がついてたら弁償してもらうからね」

桐乃は段ボール箱を抱えなおすと、部屋に戻って行った。その際にDVDを俺の手から掻っ攫っていった。

「ああ、あと——」

桐乃は階段を上る直前、俺のほうに向き直すと、

「あんたが全部セッティングしててね？ あんたが言いだしっぺなんだからさ」

桐乃はそれだけ言うと、部屋に戻って行った。

本当に都合がいいな、あいつ……。いざ解決策を出されたらコロツと変わりやがって……

まあいい、今回は俺の発案だし、特別に許してやろう。さて、沙織に電話でもしようかな。

俺はポケットから携帯電話を取り出し、昨日知った沙織の電話番号を呼び出し通話ボタンを押した。

## 15話（後書き）

ちょうど一か月です。

もっとはやく書きたい。そしてうまく書きたいです。

おかしい表現や、もっとこうしたほうがいいよってところがありませんでしたら教えてください。お願いします。

## 16話（前書き）

やっと夏休みだよ。そして何もしない自堕落な生活が始まるのであった……

## 16話

コール音一回目、沙織は驚異的な速さで俺の電話に出た。

「もしもし、突然で悪——」

『これはこれは京介氏。昨日は拙者からでしたが、本日はどのような用件で？　もしや現役中学生の電話番号をゲットして浮かれてしまったのですかな？　ですがいけませんぞ京介氏。確かに拙者は魅力的な女性ではありますが、電話番号を教えたくらいで勘違いするというのは——』

「ああうるせえ！！　初っ端からなんだよ！　勘違いなんかしてねえよ！　それに誰だよ魅力的な女性って！　ぐるぐるメガネでオタクファッションのお前のことか！？　ああん！？」

『おやおや京介氏、そんなに恥ずかしがらなくても良いではないですか。男性のツンデレなんぞ流行りませんぞ。それに京介氏は日ごろから拙者をそういう目で見ていたのですか。さすがの拙者も傷つくというものですぞ？』

開口一番、沙織がそんなことを言うのでつい突っ込んでしまった。こいつ、学校ではどう過ごしてるんだろう。ずつとこざる口調でこの調子なのか？　すごく気になるところである。

『まあ、京介氏のツンデレは置いておいて』

「置いてくのかよ！？」

『おや、なんですか？　京介氏は拙者の魅力について聞きたいことがあるのですか？　それならば仕方ありません。拙者の魅力のひとつ、それは——』

「すまん！　なんでもない！」

『そうですか……それは残念です。京介氏に拙者の魅力をもっと知ってもらうためにいろいろ考えたのですが』

こいつに語らせたら日が暮れてしまいそうだ。それにしてもこいつの自信はどこからくるんだ？　麻奈実に少し分けてやりたいとこ

るだ。麻奈実とこいつと足して二で割ったらちようどいい人間が出来る上がりそうな感じがする。

『とまあ、茶番はここまでにしておいて、どのような用件で電話を？ 京介氏に限って、ただ浮かれて電話してきたなんてことはまずあり得ないでしょう？』

……器用といふかなんというか、切り替えがすごいと思う。

「まあな。ちよつと相談があつて電話したんだよ。突然で悪いんだが、今時間あるか？」

『拙者は今暇を持て余していたところなので問題ないでござる。それにしても相談ですか……それはもしかなくともきりりん氏のことですかな？』

「いや、そうじゃないんだ。確かに桐乃も関係しているが、今回は桐乃の妹、楓のことだな」

『ほお……きりりん氏の妹は楓と言つのですか。かわいらしい名前ですな』

「突然妹の名を出した俺が言つのもなんだが、お前……知ってるのか？」

当然だが沙織は楓と会つたことなんてない。黒猫もだ。俺がこいつらと会つたのは秋葉原とかそういう場所だし、桐乃は知らんが家に呼んだつてことはないだろう。

だから沙織が楓を知っているわけが思つたんだが……

『知ってるもなにも、きりりん氏が自慢するものですからな。曰く、自分の妹は世界一可愛いだとか、俺の嫁だとか云々。ならば名前を教えてほしいと言えば、変な虫が付くのは嫌だから教えないとか言う始末で。楓殿のことになるとスイッチが入ってしまうようでして、大変で大変で』

「ああ……」

まあ、沙織に楓の存在が知られている原因は桐乃以外あり得ないよな。桐乃は黒猫と沙織に自慢しまくつたんだろう。容易にそのときの様子が想像できる。ご愁傷様としか言えない。

「まあ、すまなかつたな」

『いや、そうでもないですよ？ きりりん氏が楓殿のことについて話すときの顔はとても幸せそうでしたからな。それを見ればそんなことなんでもないと言うものです。黒猫氏もうんざり顔でしたが、話をしっかり聞いていましたしな』

「へえ……」

すこしばかりした。別に桐乃が楓のことについて自慢することではない。桐乃は良い友達を持ったなってことについてだ。好きなことを好きなだけ話せる相手というものはかけがえのないものだ。この前のあやせていう子もそうだが、桐乃は本当に良い友人を持っていると思う。

「サンキューな」

『はて？ 何か拙者は京介氏に感謝されることをしましたか？』

「いや、なんでもねえよ」

いつも自然に心配りができる沙織も、毒舌だが優しい黒猫も、本当に感謝してもしきれない。

桐乃はこの恵まれた環境に気が付いているのだろうか。……気が付いていないだろうな。気が付いていたら今頃俺に土下座して感謝しているだろう。

「さて、また話が脱線してしまいましたが、楓殿がどうしたのですか？」

「おおすまん。実はな——」

俺は沙織に今までの経緯を説明した。楓の告白から、桐乃がオタクをやめようとしてグッズを処分しようとしたところまで。

結構長い話になったのだが、その間沙織は何も言わずずっと俺の話を聞いていてくれた。

「——とまあ、いろいろと端折っちまったが、大体はこんな感じだ」

『ふむ。それは……なかなか難しい問題でござるな』

「まあな。それでな、どうにか楓と桐乃を仲直りさせてやりたいと

思ってるんだが、どうしようかと悩んでいて、勝手だがお前に電話したということなんだ」

『そうですか。それで相談ですな。京介氏はなにか案はありで？』  
「まああるっちゃあ、ある。楓に桐乃と一緒にゲームさせて、仲直りさせてやろうって思ってるんだが……どうだ？ それならばいいのに、楓にお前たちを紹介できるしな」

沙織の言葉に俺は麻奈実と相談して考えたことを話した。

『まあ悪くはないと思います。拙者も楓殿と会えるのならば、きりん氏と仲直りできるよういくらでも手伝いましょう。ただ、楓殿はどう思うでしょうな。話を聞く限り楓殿はきりん氏の趣味に嫌悪感を露わにしている。それはただ楓殿に苦痛を与えるということにはならないでしょうか？』

その沙織の言葉は、俺も思っていたことだ。だけど、

「ああ、それはな、たぶん大丈夫だ」

『というと？』

「ややこしいかもしれんが、あいつはあるときエロゲーは嫌だけど、桐乃のオタク趣味については理解しようとしていたと言っていたんだ。だからゲームするだけなら大丈夫だとは思うんだが……」

『京介氏の言う通りならばそうなのでしょうが、それでは根本的な解決にはならないのでは？』

「そうなんだよなあ。どうすっかなあ」

沙織の言うとおり、ただゲームするだけでは根本的な解決にはならない。最終目的は桐乃と楓の仲直りだが、やっぱり桐乃のエロゲーについて多少の理解を持ってもらわねば、結局は変わらないのだ。ただそれを強要するのもどうかと思ってしまう。仲直りさせるためだとはいえ、楓が嫌悪しているものをやらせるのだ。もしそんなことを俺がされたら当然嫌だし、嫌いになってしまいかもしれない。よってそこをどうしようか悩んでいて、結局俺の頭では思い浮かばなかったから沙織に電話したというのも理由の一つだ。

桐乃にはあんな啖呵を切ったが、そんな具体的にどうするとか決

まっていなかったりする。ただ、楓に桐乃とゲームさせて仲直りさせようとしか決まってなくて、どのゲームをやるのだとか、どうやって楓に悪い思いをさせないようにするのとかなーんにも思いついてない。だからこうやって俺たち家族の問題なのに、関係ない沙織に相談なんか持ち出した。

我ながら無責任だと思う。だけど妹のためになにかしてやりたいと思うのは兄として当然のことではないだろうか。

今回のことは楓に無理をさせるかもしれない。いや、絶対に無理させるだろう。なにせ嫌なことをさせられるのだから。だけどそれは心苦しいが少し辛抱してもらおう。桐乃の趣味を楓が知ってから昨日までそうしてきたように。

それでも本当にダメだったら——そうなったら桐乃がどうするか決めるしかない。先ほどのように、オタクをやめるのもいいし、あいつが楓を説得するのもいい。もしそうなったらもう、悔しいが俺の入る余地はない。俺は桐乃？人生相談？には乗ってあげたりして完全な部外者というわけではないが、結局の問題はあの二人だ。あいつらで決着をつけるほかない。

『——京介氏、聞いてますかな？』

「あ、ああ。すまん考え事をしてた」

沙織の言葉で俺は思考の海から出ることができた。麻奈実に相談した時も同じようなことがあった。俺は、考え事をすると周りが見えなくなる性質の人間らしい。いままで生きてきて気づけなかった俺の癖だ。

沙織の言葉に俺はそう返すと、『相談を持ちかけたのは京介氏なのですから、しっかり聞いてもらわないと困るでござる』と呆れ声で返された。ごもつともである。

『妹のことに真剣になる京介氏は素晴らしいですが、仮にも見目麗しい女性である拙者と電話している最中にほかの女性のことを想い浮かべるなど失礼ですぞ？』

「いや、ほかの女性ってただの妹じゃねえか……」

『……はあ、まったく京介氏は。これだから単細胞生物なんて言われるんですぞ?』

沙織のあほらしい言葉に俺はごく当たり前の返答をしたと思ったんだが、沙織はどうしたのかため息をついて、俺を単細胞生物なんて言いやがった。俺はそんな名前で呼ばれたことなんて一度もねえよっ! 唯一呼びそうな奴は予想がつくけどな!

「何だそれは!? 誰だよそんな風に俺のことを言ったやつは!」  
『もちろんきりりん氏です』

ですよね!! 言うとしたらあいつしかいねえよな! わかつてたよ、ええ!

「さ、沙織は俺をそんな風に言わねえよなっ?」

俺はこの高ぶる気持ちをなんとか抑えつつ、沙織に言った。さ、さすがに沙織は俺のことを単細胞生物なんて呼ばないよな。黒猫は躊躇なく言いそうであるが。

なんだって沙織は気配りができて頭もいい、素晴らしい女性だ。こんな素晴らしい女性が俺のことを単細胞生物などと言うわけがあるまい。うんそうだ。いまなら今まで沙織が自称してきた数々の言葉に賛同してやってもいい。

『フッフ、京介氏。拙者がそんなことを言うわけありませんぞ』

「だ、だよな。さっすがだぜ沙織さん」

そんな俺の願いが届いたのか、続けて沙織（女神）は実に優しい声で言った。

『言うなれば……女に尻に敷かれ、奴隷のようにこき使われる男』

——と

「はっ——!? ごほっごほっごほっ——!?」

俺はその言葉に驚愕を隠しきれず、そしてむせて咳き込んでしまった。

な、なんと……沙織がそんな風に思っていたなんて……。沙織はあの三人の中で一番の理解者だと思っていたのに……俺に安らぎを与えてくれる人間はいないのか……。沙織の言うとおり俺は女に尻

に敷かれるように見え——るよなあ……。桐乃にあんなにやられれば。俺、おわったなあ……

『ははは、京介氏、冗談ですぞ冗談——半分』

「半分は本気なんだな……」

沙織は取り繕うように言ったが、俺は聞き逃さなかったぜ。最後に小声で言っていたことをな！俺の繊細なハートはまさに今ブレイクしたぜ。現実はこのなんにも無常だ。みるくちゃん（桐乃に借りたエロゲーのヒロイン）は絶対こんなこと言わねえよ……

『はは、またも脱線してしまいましたな。京介氏。拙者いいことを思いつきましたぞ』

「……いいことって？」

『楓殿ときりりん氏をどう仲直りさせるかですよ』

そうだ。俺はこんなことで燃え尽きるわけにはいかなかったんだ。いや、こんなことじゃないが、それは今度問い詰めればいい。見返してやる。

だから今は沙織のその？いいこと？を聞こうじゃないか。

「なんか思いついたのか」

『はい。もうすぐで世間は夏休みに入りますな？』

「まあそうだな。俺は別にやることはねえけどな。それがなにか関係あるのか？」

——夏休み。それは世の学生にとって重要なものだ。それは俺も例外ではない。合法に学校を休めるのだ。これ以上にいいものはない。そしてその休暇の間には、夏祭り、プール、花火大会など青春を謳歌する胸躍るイベントが目白押しだ。俺だつてとくにやることはないが昼まで思いつきり寝坊できる素晴らしい休暇に胸が躍る。

だがだからといって仲直りさせるのには関係あるのだろうか。そんな疑問を沙織に素直に告げてみた。

『焦ってはいけませんぞ。夏と言えば祭りですか？』

「ああ、確かに夏と言えば祭りだ。……ああ、そうか」

『おや、気づきましたかな？』

沙織の言いたいことは、桐乃と楓を夏祭りに一緒に行かせてやればいいということなのだろう。確かにそうすればわだかまりは解けるだろう。だが――

「ああ、夏祭りに行かせればいいんだろ？　けどよ、それはお前がさっき言ったように、根本的な解決にはならねえんじゃないか？」

ということだ。夏祭りに行かせようが、ゲームさせようが同じだ。穏便に済みそうなのは夏祭りのほうではありそうだが。

『はて？　拙者は祭りとは言いましたが、夏祭りではございませんぞ？』

「は？」

祭りは祭りでも夏祭りではない？　祭りつつたらそれしかねえだろ？　「パンはパンでも食べられないパンはな〜んだ？」みたいな意味の分からないなぞなぞみたいな沙織の言葉に、俺は戸惑った。

『祭りと言ったら一つしかありませんでしように。知らないとはオタク失格ですぞ京介氏。ならば拙者が答えを言しましょう。祭り、それは夏と冬に行われる一大イベント。それは――コミケですぞ！――』

こ、こみけ？

俺は初めて聞くその摩訶不思議な言葉に、首を傾げることしかできなかった。

## 16話（後書き）

ちょうど一か月です。

更新ペースあげたいですね。まあ時間は腐るほどできたのでこの休暇中に更新したいです。

コミケ行きたかった。買うもんはとくになかったけど。

気づいている方はいないかもしれませんが、一話から改稿してます。時間は気が向いた時です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4633p/>

---

私はノーマルだ！

2011年8月17日03時19分発行